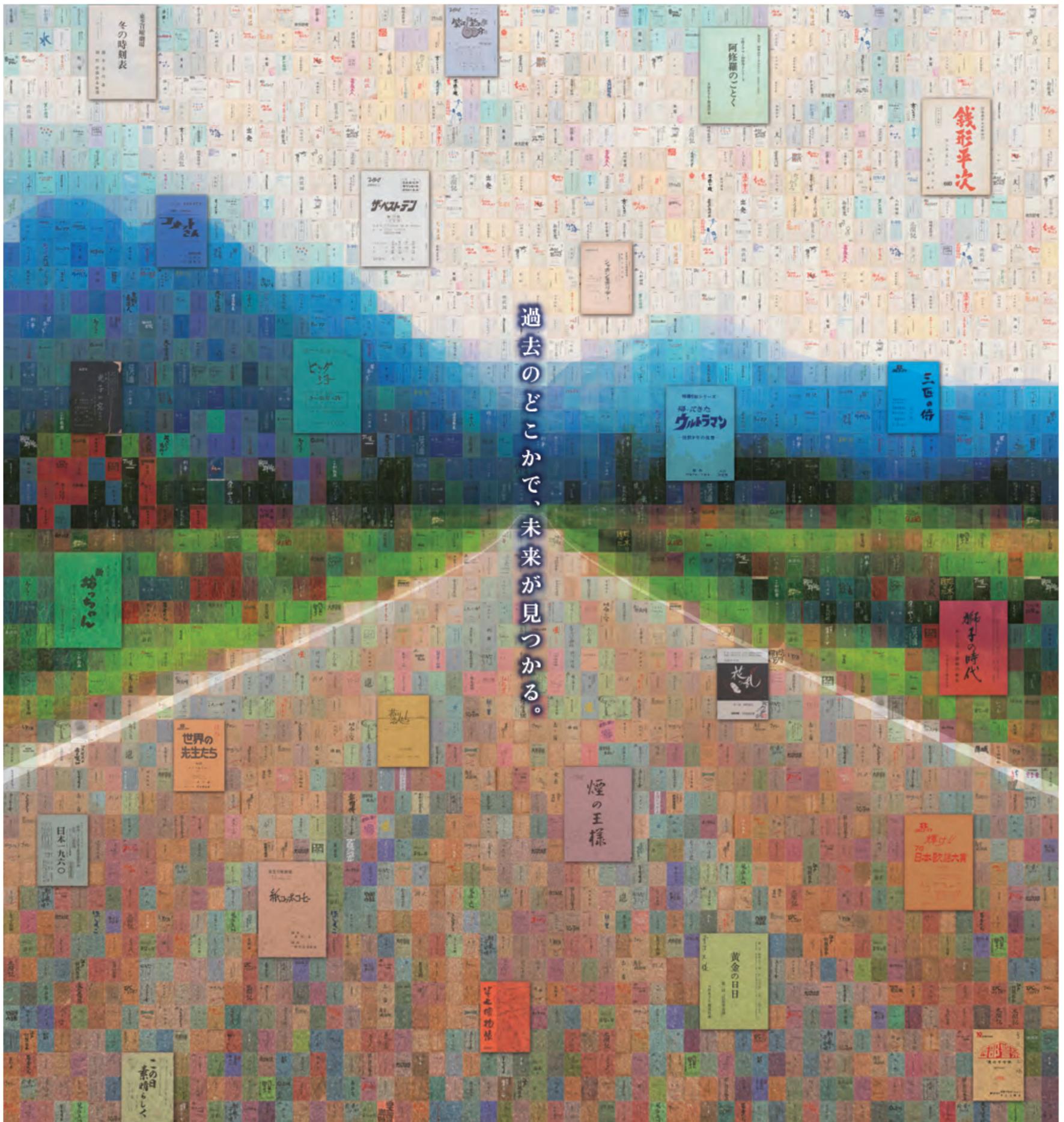


平成26年度事業報告書

文化関係資料アーカイブ構築に 関する調査研究

— 放送脚本・台本のアーカイブ構築に向けて —



 文化庁
Agency for Cultural Affairs, Government of Japan

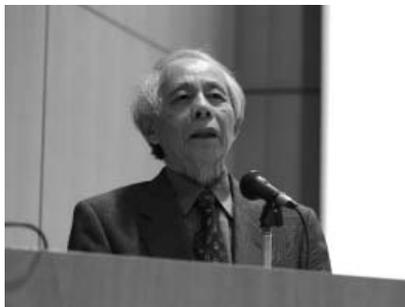
一般社団法人 日本脚本アーカイブズ推進コンソーシアム

■シンポジウム

脚本アーカイブズの新たなるステップへ
～未来に向けた保存と利用～

(2015年3月18日 於・国立国会図書館)

※敬称略



開会挨拶 日本脚本アーカイブズ
推進コンソーシアム
山田太一代表理事



共催挨拶
有松育子文化庁次長



共催挨拶
大滝則忠国立国会図書館長

第一部 座談会



岡室美奈子 (司会)

嶋田親一

三田佳子

中村克史

山田太一



第二部 パネルディスカッション



国立情報学研究所教授
高野明彦



弁護士 福井健策



国立国会図書館 電子情報部
電子情報企画課長 大場利康



東京大学大学院情報学環教授
吉見俊哉 (司会)



目 次

「御挨拶」(山田太一)

「脚本アーカイブズの現在と今後」(大滝則忠)

「登るべき目標がはっきりしました。さあ、スタート」(橋本隆)

I	脚本アーカイブは新たなステップへ……………	10
	1. 平成26年度の年間計画と実績概要	
	2. コンソーシアムの役員体制	
II	保存・公開の進展と新たな収集に向けた取組み……………	13
	1. 国立国会図書館での公開状況の概要	
	[寄稿]「脚本アーカイブズでの『発見』」(鈴木嘉一)	
	2. 川崎市市民ミュージアムでの公開準備作業と課題	
	3. 収集のためのアンケート調査の実施	
	4. 新たな収集に向けて	
III	データベース展開とデジタルアーカイブの検討……………	29
	1. 脚本所蔵館へのヒアリング	
	2. 「脚本データベース」の更新	
	3. 表紙と本文全体のデジタル化	
	4. デジタル脚本アーカイブの試行検討	
IV	脚本の教育活用の模索……………	48
	1. ワークショップ①教師向け 実施報告	
	2. ワークショップ②中・高・大学生向け 実施報告	
V	脚本アーカイブズ検討委員会と継続する基本課題……………	55
	1. 「脚本の収集・保存」の方針	
	2. 「脚本データベース」の方針	
	3. 「脚本の公開・活用とその促進」の方針	
	4. 「アーカイブ脚本の権利処理」の方針	
VI	コンソーシアム主催シンポジウムの開催……………	58
	1. 脚本アーカイブズシンポジウムの概要	
VII	まとめ……………	77
	1. 今年度の総括として	
	2. これからに向けて	

御 挨拶

一般社団法人 日本脚本アーカイブズ推進コンソーシアム

代表理事

山田太一

私たちコンソーシアムの願いは、主としてテレビ開局から1980年以前のテレビドラマの脚本の散逸をなんとか救えないかという、脚本家で亡くなってしまった市川森一さんの提言に発しています。初期の生放送時代、高価な営業用ビデオテープの重ね撮りの時代は、ほとんど映像がありません。手がかりは脚本しかないのです。

それ以後でも、その気で残す人がいなければ映像はどしどしなくなってしまいます。紙だって劣化しますが、まだ頼りになりそうです。

現在までに集まった5万2千冊余りは、ご理解をいただき、主として国立国会図書館と川崎市市民ミュージアムに引受けていただきました。公的機関が引受けて下さらなければ、集めても置き場所もお金もありません。保管をしてそこに何があるかを検索すればすぐ分るようにデータ化して、はじめて役に立つのです。

そこまでする値打ちがあるのか、という人がいました。値打ちは十分あるのです。

たとえば江戸時代の離縁状（三下り半）は当時では生活の必要以上のものではなかったでしょうが、今となればその紙や墨や、文字の崩しよう、筆の質から沢山の情報を得られます。脚本も当時は資料的価値など感じようもない電話事情ひとつとっても、今とは嘘のように状況が変わっているのが分ります。遠距離の時の大声とか「呼び出し」なども。そういう生き生きした現実や年表や歴史の本ではまず得られません。

私たちが理事をお願いしている東京大学の吉見俊哉先生が明治維新で日本は近代西欧を取り入れながら、同時に必死にそれと格闘して来ており、その痕跡が小説、映画、建築、絵画にいっぱい残っていて、ここまでの実例は他国にはなかなかない、とおっしゃっています。

戦後のテレビドラマからも、歴史では捉えられない、生き生きした親子のありよう、刑事のありよう、医者のあるありよう、アメリカや政治への感覚の変遷も感じとれるでしょう。いえ、時を経れば経るほど、なにが輝き出すか分からないので、今の価値判断で選別をしないでまるごと大切にしようとしているのです。

今は一応集まった宝のデータ化、誰でもそれを利用できるシステム化に力を入れています。当然ながら1980年以前の脚本も更に収集を待っている作品が相当数あることが分っています。国立国会図書館がその分だけでも追加を引受けて下さらないかと願ったりしています。と同時に一方で、これは一脚本アーカイブズのことにとどまらず、映像も音楽アーカイブズとも、演劇のアーカイブズとも力を合わせて国策的統合が計れる機関が必要ではないかと痛切に感じています。

とかく私たちは現在と未来だけで生きることを考えがちですが、過去が豊潤なこと、いかに生きるべき道を示唆してくれるかを忘れてはいけないと思っています。

脚本アーカイブズの現在と今後

国立国会図書館長

大滝則忠

平成24年6月に日本脚本アーカイブズ推進コンソーシアム（以下「コンソーシアム」）が設立されて、丸3年が過ぎようとしています。この間、コンソーシアムに関係の皆さまの献身的なご尽力と関係機関・団体の協力によって、脚本アーカイブズの活動は大きく前進しました。散逸・消失の危機にあった脚本等約5万冊が、コンソーシアムから国立国会図書館をはじめとする6つの機関に寄贈されて、公開あるいは公開準備が進んでいます。また、「脚本データベース」が整備され、寄贈された脚本の書誌と所蔵機関がインターネット上で調べられるようになりました。

国立国会図書館では、平成26年4月から東京本館音楽・映像資料室で、寄贈いただいた約27,000冊の利用提供を開始し、放送関係者から脚本家を志す若い方まで、様々な方たちにご利用いただいています。また、コンソーシアムのご協力のもと、その一部の35点ではありますが、画像デジタル化して、本年3月17日から「国立国会図書館デジタルコレクション」でご覧いただけるようになりました（2点のみインターネット公開）。その中には、3月18日に国立国会図書館を会場として開催された脚本シンポジウムにご登壇いただいた三田佳子さんが出演された作品や山田太一先生が書かれた脚本等も含まれています。

国立国会図書館は平成23年度に文化庁との間で協定を締結し、脚本のほか、音楽関係資料及びマンガ・アニメ・ゲーム等のメディア芸術の分野でも連携・協力を進めてきました。平成26年度には具体的な成果が形となり、音楽関係資料の分野では、戦前までに刊行された楽譜の書誌と所在を調べることができるデータベース「近代日本刊行楽譜総合目録 洋楽編」を3月24日から国立国会図書館のウェブサイト上で公開しました。また、メディア芸術の分野では、文化庁が構築された作品及び所蔵情報に係る「メディア芸術データベース（開発版）」が3月17日から公開されています。

これまでは、分散して所蔵されている資料を検索できる、書誌・所在情報データベースの構築を中心として取り組まれてきました。次の段階としては、貴重な資料を永く保存し活用できるための資料のデジタル化が課題となり、各機関による資料のデジタル化の推進と、それらが連携した全国規模での「デジタルアーカイブ」の整備が求められています。折しもデジタルアーカイブ推進のための議論が本格化しており、国立国会図書館は、所蔵資料のデジタル化と公開を着実に進める一方、我が国における「デジタルアーカイブ」整備に向けた官民の連携に鋭意、貢献したいと考えています。その一環としても、脚本のデジタルアーカイブ構築についても、関係される皆さまと引き続き連携しながら、取り組んでいくことができるよう願っています。

「登るべき目標がはっきりしました。さあ、スタート」

日本脚本アーカイブズ推進コンソーシアム 常務理事
放送批評懇談会 副理事長

橋本 隆

昨年暮れに素晴らしい本が出版されました。『アーカイブ立国宣言』（「アーカイブ立国宣言」編集委員会編、監修 福井健策 吉見俊哉 ポット出版刊）であります。

様々な分野の団体や個人がここ数年アーカイブズ事業に関わってきましたが、それぞれに悩みや困難を抱えての活動でした。この宣言で「アーカイブ」を日本の<文化資産として残し活用して>いくという方向が示されました。いくつかの連峰の奥に鎮座する目指すべき巨峰の頂きが見えてきました。裾野の広い大きな山で、頂きをはるか遠い存在ですが、目指すものをはっきりと明示した宣言でありました。目標がはっきりすれば後は一步一步進むだけです。

昨年の報告書で私は「もう一歩前へ」という短文を書かせていただきました。約5万冊の脚本・台本が収集され、国立国会図書館や川崎市市民ミュージアムに収められ、一部は公開が始まる時でした（平成26年4月公開）。そこで、立ち止まらずに更に前に進もうと提言しました。今年は放送90年の年です。NHK 1局で始まった放送界に、民間放送が加わったのが約60年前です。戦後10年も経たないうちに始まったラジオ、テレビという放送メディアの発展は、その後の日本国民の生活に想像も出来ないほどの大きな影響を与えてきたと思います。これからは、そういった放送が経済的に文化的にどういった役割を果たしたか、どのような功罪あいまった結果を残したかを検証し、未来への展望を考える時でしょう。

放送90年は大きく3段階に分けられると思います。NHK 1局であった開始から民放開始までの第1期の30年、民放が加わって国民の情報収集、娯楽の中心となった昭和の終わりころまでの第2期の30年間、平成に入り更に発展し、録音録画が当たり前になり資料となるものが幾何学的に増大している今、の第3期です。

しかし約10年前に故市川森一氏が、文化としての放送を研究対象として検証するために必ず必要資料となるであろう初期のころの台本、脚本が散逸、消失、破棄されつつあると危機感を持たれ立ち上げた「脚本アーカイブズ」の事業。人々の記憶と思い出の中だけにしか残らないことを心配してのことでした。そしてそれを受け継いだ我々、そう考えれば為すべきことは明確ではないでしょうか。

映像が残っていることによって研究は更に深化することでしょうが、今はかすかに残っている当時の台本・脚本・それに類する資料の確保に全力であたる必要があると思います。

前回の収集活動が一時休止になって2年、貴重な2年でした。再開が決まった今、改めて活動の基本方針を考えるならば、先ほど申し上げた「他に資料が少なく、その貴重な資料が散逸しつつある昭和の時代の脚本・台本」に絞って進めることが現実的だと思います。

それもまずは脚本を書かれた作家の皆さま、次いでその本を基に制作された制作者（プロデューサー、ディレクター、出演者、技術者等々）の皆さま、3番目には、その範囲を全国地方局にまで広げるといふ段階を踏みながら、一步一步進むことが今求められていると思います。遠くの頂きを視界に入れながら、その手前につながる連峰のひとつの頂上が今の目標です。益々のご協力をお願い申し上げます。

I 脚本アーカイブは新たなステップへ

本コンソーシアムによる脚本アーカイブ事業の開始から、既に3年が経過している。活動の柱になっているのは、脚本の所蔵状況を調査しデータベースのあり方について整理をすること、脚本のデジタルアーカイブ化を推進すること、脚本の保存と公開についての課題検討と実践を行うことの3点である。

このうち保存・公開をめぐる状況においては、着実な成果を生み始めている。そして、公的機関での保存と一般公開という土台となる進展を前提にして、われわれの推進事業全体は今新たなステップに入りつつあると考える。そうした中、残存している古い脚本の収集・保存のあり方を考え、統合的なデータベースへの取組みを深め、デジタル化の具体策に関する検討を行い、脚本の利活用について重点的に試行するなど、今年度もアーカイブの充実化に対し有効な展開を精力的に進めてきた。

1. 平成26年度の年間計画と実績概要

今年度の当初計画の各項目に対し、その活動結果概要について要点をまとめる。

(1) 脚本データベースに関する検討

- ① 統一的书誌データや総合データベースの具体的なあり方に関して、脚本の所蔵機関等との連絡会を継続する等、検討を推し進める。

⇒移管先機関等、随時ネットワーク連携を図り課題等の検討を行っている。(国立国会図書館、川崎市市民ミュージアム、NHK放送博物館、東京国立近代美術館フィルムセンター、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館、放送ライブラリー、NHKアーカイブス等)

⇒他のアーカイブ事業者・関係者とのシンポジウム企画に参加し情報交換等を行った。

- ・座談会「こんなアーカイブにしたい～担い手が語る」(11月7日)
- ・談話会「放送・演劇・時代劇思弁のアーカイブ化と共有」(1月24日)
- ・「アーカイブサミット2015」(1月26日)

⇒調布図書館、京都国際マンガミュージアム、東北新社ライブラリー、藤本義一ギャラリー、上方演芸資料館ワッハ上方、日本写真家協会では保存状況・データベース等取材した。

- ② 脚本アーカイブズと映像アーカイブのデータベース連携の可能性に関し、調査等を行う。

⇒民放局ライブラリーの状況調査を一部実施。また、NHK放送文化研究所運営の「放送文化アーカイブ」との連携について継続検討を行った。

(2) デジタル化に関する研究と試行

- ① Web公開中の「脚本データベース」の再整備を行う。また所蔵先情報のサービス等、データベースとしての効果を検証する。

⇒Web上の「脚本データベース」について更新を行った。

- 追加画像表示：合本内の見出し画像を詳細ページに表示
- Wikipedia表示：タイトルや人名に合致したWikipedia情報の表示
- TOPページ：検索窓、関連サイトのバナー追加、週刊ランダムピックアップやアクセスランキングのデザイン向上等の改善
- ヘッダデザインのリニューアル

- ② Webサイト「市川森一の世界」の成果を踏まえ、新たなデジタル脚本アーカイブズのテーマや方法について検討を行う。

⇒関西の放送作家、故・藤本義一氏をテーマとするデジタル脚本アーカイブ企画について検討し、準備作業を開始。（手書き原稿や写真等サンプル画像を作成）

- ③ 脚本のデジタル化について、目録用に表紙のデジタル化を実施する。また、現物の劣化状況も鑑みて、限定した脚本の全文デジタル化を検討し実施する。

⇒「脚本データベース用」に、およそ3万点の脚本の表紙についてスキャンを実施した。

（国立国会図書館・1万5千点、川崎市市民ミュージアム・1万5千点）

⇒国立国会図書館保存のうち35件を選び脚本の全文デジタル化を共同で実施。国立国会図書館・デジタルコレクションに搭載され、館内（図書館送信）で閲覧可能な形になった。また、著作権保護期間が切れた作品（2作品）をインターネット公開に。

- ④ デジタル化脚本を教育現場で活用するための試行や、活用に関する研究を継続して実施する。

⇒教育活用として以下のワークショップを実施した。

- 教師向けの脚本創作（講師：一色伸幸、東多江子）7/31・8/1 品川区文化会館
- 中・高・大学生向けラジオ脚本創作（講師：北阪昌人）11/29・30 NHK放送博物館
- 小学生向けのストーリー作り（講師：北阪昌人）
3/14・15 日比谷図書文化館 3/29 川崎市市民ミュージアム
- 中学生向けラジオ脚本ワークショップ（講師：北阪昌人）3/21 両国中学校

（3）脚本の収集・保存と公開についての取組み

- ① 80年代以前の番組制作者や放送作家に対しヒヤリング調査やアンケートを行い、脚本所有等の状況把握を行なう。

⇒放送作家467名（59歳以上）に対し脚本保存・寄贈等に関する郵送によるアンケート調査を実施し、今後の収集計画の参考とした。

- ② 新たな脚本収集として、80年代以前の放送作家が所蔵している脚本の収集を検討する。複本の扱い方等も含め収集・保管・整理の効率的な実施体制を整える。

⇒上記アンケートの結果に基づいて、放送作家からの収集を優先的に行うことを決定した。収集実施体制の検討を進めている。

- ③ 脚本の移管先機関と連携を図り、公開における実態や課題等を検証し（国立国会図書館）、また公開開始に向けた整理作業に取り組む（川崎市市民ミュージアム）。

⇒国立国会図書館との課題等調整を行い、川崎では公開に向けた準備作業を済ませた。
 ※排架方法は国立国会図書館方式を参考に実施した。脚本内の個人情報への被覆が必要な現物をチェックし、複本を分別して資料数等の整理を行った。

④ 脚本アーカイブズ活動とその意義の理解促進のために、シンポジウム等を開催する

⇒国立国会図書館にて、脚本アーカイブズの意義と今後に関するシンポジウムを実施。

(4) 委員会による課題検討

① アーカイブ関連組織の代表者や研究者等で構成された「脚本アーカイブズ検討委員会」を開催し、脚本アーカイブの課題等の検討を行う。

⇒「脚本アーカイブズ検討委員会」を年間計3回開催し、脚本の保存・一般公開の実現を踏まえて現状の課題等の整理や検討を行った。

※主な議題・検討の項目：脚本の保存・公開の状況推移と現実的な課題、今後の収集計画の方向性やアンケート実施等、実態把握のあり方、データベースの更新やデジタル脚本アーカイブの可能性検討、脚本の利活用（特に教育活用の具体方法）、利用促進等

＜平成26年度「脚本アーカイブズ検討委員会」の実施＞

- 第1回 平成26年6月6日
- 第2回 平成26年10月15日
- 第3回 平成27年2月10日

2. コンソーシアムの役員体制

今年度の日本脚本アーカイブズ推進コンソーシアムの役員体制は、以下の通りである。

役職	氏名	所属
代表理事	山田 太一	脚本家・小説家
副代表理事	上滝 徹也	日本大学名誉教授
副代表理事	今野 勉	放送人の会 代表幹事
常務理事	石橋 映里	事務局代表、日本放送作家協会 理事
常務理事	田中 格	日本放送作家協会 常務理事
常務理事	橋本 隆	放送批評懇談会 副理事長
理事	大寺 廣幸	日本民間放送連盟 理事待遇
理事	北村 充史	放送人の会 事務局長
理事	木田 幸紀	日本放送協会 理事
理事	西村 与志木	日本映画テレビプロデューサー協会副会長、NHKエンタープライズ
理事	福井 健策	弁護士、日本大学芸術学部特任教授
理事	金子 成人	日本脚本家連盟 理事・著作権部長
理事	吉見 俊哉	東京大学大学院情報学環教授、東京大学副学長
監事	香取 俊介	日本放送作家協会 理事
監事	さらだ たまこ	日本放送作家協会 理事長

Ⅱ 保存・公開の進展と新たな収集に向けた取組み

平成25年3月、それまでの7年に渡る脚本アーカイブ活動により収集されていた脚本・台本・資料類5万点が、保管・整理場所であった足立区の図書館から以下の公的機関に移管された。

【これまでの収集脚本の移管先等】

機関・施設名	内容	数	公開等
国立国会図書館	1980年以前の放送脚本・資料	27,219	公開中
川崎市市民ミュージアム	1981年以降の放送脚本・資料	18,143	平成27年内に公開予定
東京国立近代美術館 フィルムセンター	映画シナリオ・資料	1,143	公開中
早稲田大学坪内博士記念 演劇博物館	演劇・イベント脚本・資料	408	公開中
世田谷文学館ほか	脚本の直筆原稿	91	(予約による限定公開)
日本動画協会(寄託)	アニメ脚本・資料・グッズ	1,305	展示会などに使用予定
倉庫保管(貴重資料)	直筆原稿、個人情報記載の資料	434	
川崎市市民ミュージアムにて 保管(複本)	1981年以降の脚本の複本		
返却・廃棄等	劣化で利用付加のもの、著作者非保存希望分等	78	

このうち放送脚本・台本の多くについては、国立国会図書館と川崎市市民ミュージアムが着実に一般公開に向けた体制を整え、国立国会図書館では既に平成26年4月から公開を開始し、川崎市市民ミュージアムでは平成27年度には公開となる予定である。

以下、国立国会図書館におけるこの1年の一般公開の全体概要と、川崎市市民ミュージアムについての公開準備作業の具体状況や課題について報告を行う。

1. 国立国会図書館での提供開始後の取組み

国立国会図書館利用者サービス部音楽映像資料課 佐藤従子

国立国会図書館において日本脚本アーカイブズ推進コンソーシアム（以下「コンソーシアム」）から寄贈された1980年以前の脚本の利用提供を開始してから約1年が過ぎようとしている。この1年の当館での脚本関係の活動についてご報告する。

(1) 館内利用提供

脚本の利用者は、月によって異なるが4月～1月の10か月の平均が6人／月、閲覧件数（冊数）は23.3件／月となっている。利用数は決して多くないが、その理由としては、調査・研究目的の利用に限定していること、当館のオンライン目録「NDL-OPAC」で検索できないことなどがあげられる。

実際に利用された方は、放送関係者で過去の作品の情報を調べている人、構成作家を目指している人、個人的に特定の俳優の出演作品を調べている人、自分の郷土が取り上げられている作品を調べている人など様々で、利用される脚本もそれぞれ異なる。



【音楽・映像資料室】 開室時間：9:30～17:00 資料請求時間：9:30～16:00

(2) デジタル化

コンソーシアムは脚本のデジタルアーカイブ構築を活動の柱にしているが、今年度はコンソーシアムと国立国会図書館との共同で、当館所蔵の脚本35冊（約1600コマ）のデジタル化を実施した。対象資料はコンソーシアム事務局と相談しながら選定し、保存の観点から、劣化の進んだ資料（「雲雀」等）、生原稿（「姿なき犯罪」等）、青焼き原稿（「歌謡ジョッキー」等）などを含めた。また、利活用の観点から、人気ドラマの脚本（「私は貝になりたい」「太陽にほえろ！」「七人の刑事」等）や、山田太一、早坂暁、向田邦子などの著名な脚本家の作品からも選定した。実施にあたっては、両者で覚書を取り交わし、コンソーシアムには専門業者への委託によるスキャニング作業を担当していただき、当館は作成されたデジタル画像にメタデータを付与し、当館のデジタル化資料閲覧データベースである「国立国会図書館デジタルコレクション」（URL：<http://dl.ndl.go.jp/>）に登録、3月17日に一般公開した。「国立国会図書館デジタルコレクション」のトップページに専用の入口を設けて目立たせると同時にアクセスしやすいようにした。35冊のうち、2冊は著作権保護期間満了のためインターネット公開したが、残りの33冊は国立国会図書館内での限定公開となっている。館内公開の33冊は所定の手続を経た後、平成27年度中にはデジタル化資料送信サービスにより全国の公共図書館等でも閲覧可能となる予定。

当館所蔵資料を、外部機関・団体との共同事業でデジタル化し当館で公開するのは、当館でも初めてのケースで、今後、外部との連携協力によるデジタル化推進の良い先例となることと思われる。今後も原本を保存しつつ、場所や時を選ばずに貴重な脚本に多くの人がアクセスできるよう、コンソーシアムと協力して、デジタル化を進めていきたいと考えている。



(3) 脚本アーカイブズシンポジウム

平成27年3月18日（水）、約3年ぶりに国立国会図書館を会場として脚本シンポジウムが開催された。参加者は関係者や当館職員も含めて260名で、参加者アンケートでは、約86%の参加者が内容に「満足」あるいは「どちらかと言えば満足」という結果であった。当館で開催することにより、当館利用者など、より広い層の参加を得られ、脚本アーカイブズ活動の広報につながったのではないと思われる。

(4) 展示等

① 国立国会図書館月報の脚本特集

当館刊行物「国立国会図書館月報」平成26年11月号では「国立国会図書館と脚本・台本」と題する特集を組んだ。脚本家中園ミホ氏のインタビュー、当館の脚本収集の経緯、所蔵脚本の紹介、「市川森一の世界」のWARP収録等を14ページにわたって紹介した。

② 企画展示「あの人の直筆」

日本の近世から戦後にかけて各分野で活躍した有名人約150名の直筆資料を集めた国立国会図書館企画展示「あの人の直筆」（会期：2014年10月18日（土）～11月18日（火））において、脚本のコーナーを設け、菊田一夫氏、津田幸於氏、岩間芳樹氏など6名の直筆原稿、脚本等7点を展示した。



藤村志保氏の書込み、津田幸於氏の直筆メモ

③ 電子資料室内でのミニ展示開催

提供開始に合わせて、平成26年4月から8月まで、音楽映像資料課所管のもう一つの資料室である電子資料室で脚本の小展示を行った。途中展示替えを1回行い、計18点の脚本と作品のDVD等の関連資料を紹介した。

④ 脚本シンポジウムでの特別展示

3で報告した脚本シンポジウムでは、1日限りの特別展示も行った。シンポジウム会場の講堂前のスペースに展示ケース4台を設置し、シンポジウムの座談会にご登壇いただいた三田佳子氏、嶋田親一氏、中村克史氏、山田太一氏ゆかりの作品を中心に脚本12点を展示した。

シンポジウム会場ホワイエにて



国立国会図書館が1980年以前に放送されたラジオ・テレビ番組の脚本や放送台本の公開を始めてから、4月で1年を迎える。日本脚本アーカイブズ推進コンソーシアム（山田太一代表理事）から寄贈された約2万7千冊を音楽・映像資料室で閲覧できる。

私は日本のテレビドキュメンタリーの開拓者として知られる牛山純一（1997年死去）の評伝に取り組み、牛山らが65年に制作した「ベトナム海兵大隊戦記」の放送中止事件まで書き進めた。テレビの社会的影響力が増した60年代、自民党政権の圧力やスポンサーの干渉も強まり、放送中止事件や番組の改変などが相次いだ。日本教育テレビ（NET、現テレビ朝日）で62年から66年まで放送された社会派ドラマ「判決」は、受難劇の代表格となった。2月に国会図書館を訪れた目的の1つは、放送中止の憂き目を見た回の脚本を探すことだった。

税制を批判した深沢一夫作の「老骨」は、「判決」で初の放送中止を余儀なくされた。「ベトナム海兵大隊戦記」放送中止事件が大きな波紋を広げていた65年5月には、教科書検定問題をテーマにした本田英郎作の「佐紀子の庭」も放送が見送られた。翌月、この脚本づくりに協力した家永三郎・東京教育大学教授は「教科書検定制度は違憲」と国を相手取って提訴した。世にいう「教科書裁判」である。「佐紀子の庭」は全2巻の「本田英郎戯曲集」にも収録されていない。脚本データベースで「判決」を検索すると、52件もヒットしたが、お目当ての回は見当たらなかった。

脚本アーカイブズは、こうした「放送史の闇」に光を当てるような脚本の収集・保存もめざしてほしい。

せっかくの機会だからと、同じ60年代に人気を集めたTBSの「七人の刑事」を検索してみた。堀雄二、芦田伸介、菅原謙二（後に謙次）、佐藤英夫らが出演し、61年から69年まで続いたが、映像は今野勉ディレクターがすべてフィルムで撮った「ふたりだけの銀座」しか現存していない。当時はまだビデオテープが高価だったことなどから、次々に消去され、使い回しされたためである。

今野は65年から3年余り、「七人の刑事」の演出陣に加わった。内田栄一ら気鋭の脚本家と組み、まるで犯人が主人公のような異色作を送り出した。中には、刑事たちが調べれば調べるほど、犯行の動機が見えなくなる不条理劇に近い作品もあったと聞く。

「描きたかったのは犯行自体の不思議さ、刑事でもわからない犯人の心象風景です。アナーキーなホステスやテロリストまがいの少年を登場させ、実際にドラマと同じような事件が起きたことも何度かありました」。こう回想する今野が多くの大学祭に招かれたように、この作風は若者から強い支持を受けたが、「刑事たちを添え物にしてしまったことで、演出部長からよくしかられました」とも言う（読売新聞芸能部編「テレビ番組の40年」）。

「ふたりだけの銀座」では、人気俳優だった山内賢と和泉雅子がベンチャーズの曲で歌った当時のヒット曲「二人の銀座」が使われた。今野が自ら「歌謡曲シリーズ」と呼んだ脚本を探すと、佐々木守の「時には母のない子のように」が目にとまった。哀調を帯びたカルメン・マキの歌が脳裏によみがえり、読んでみたくなった。

東京のふ頭に20代後半とおぼしき夫婦がいる。頭部に負ったけがの後遺症に悩まされる男は、出版社に勤める女を東京に残し、郷里の岐阜に帰ろうとしている。言葉少なな会話が続く中、デモ隊が警官隊と衝突する回想シーンがたびたび挿入され、男の傷は学生時代、警官に殴られたためとわかる。回想シーンは米軍基地反対闘争だろうか、60年安保闘争だろうか、特定されてはいない。2人は岸壁の近くで死体を見つけ、何かを海に捨てた少年を目撃する。この少年は密航を企てて船員に発見され、ナイフで殺してしまった。2人は警察に通報した後、その場から姿を消す。7人の刑事たちは目撃者として2人の行方を追う。

「岐阜へ、一緒に行くわ」

「いや、いい」

「でも……」

「しかし、君の青春はまだ終わっていない」

「終わっているわ、あなたと一緒に」

2人は最終部の東京駅でこんな会話を交わす。この回の「主役」は刑事でも犯人でもなく、学生運動の記憶を引きずる男女であり、青春時代との決別が描かれる。この時、今野は29歳だった。同い年の佐々木とは時代感覚を共有し、意気投合したのだろう。今野演出の「異色作」たるゆえんが納得できた。

しかし、これが65年12月放送と知って、ふと疑問が生じた。カルメン・マキの「時には母のない子のように」がはやったのは私の高校時代で、この放送時はまだ中学生だった。調べてみると、カルメン・マキが寺山修司作詞のこの歌でデビューしたのは69年となっている。この時間差は何なのか、今野に電話で問い合わせたところ、腑に落ちた。

この回に流れた曲は、米の女性歌手マヘリア・ジャクソンがカバーした黒人霊歌の代表曲「サムタイムズ・アイ・フィール・ライク・ア・マザーレス・チャイルド」で、「時には母のない子のように」と訳された。ジャズのスタンダードナンバー「サマータイム」の原曲である。今野は「原盤を聴いて気に入った。寺山はこれをどこかで聴き、タイトルをそのままカルメン・マキの歌に使ったんじゃないか。歌詞は寺山のオリジナルですけれどね」と教えてくれた。これは思いがけない発見だった。

「七人の刑事」の脚本リストには、準備稿から改訂稿、決定稿、MAV（音声ダビング作業用）稿まで保存されている「サマー・ガール」という作品もあった。4種類もあるのはきわめて珍しい。これは78年に復活し、1年半放送された芦田伸介主演の新シリーズ「七人の刑事」のうちの1回で、脚本を書いたのは小説家の矢作俊彦だった。

この表紙には鉛筆で「浅生」と書かれていて、ハッとした。スタッフの名前を見たら、演出はやはり浅生憲章とある。今は亡き浅生とはTBSの番組宣伝部長の時に面識があり、かつて向田邦子の傑作の1つとされる「隣の女 現代西鶴物語」（芸術祭優秀賞）や、故市川森一の第1回向田邦子賞受賞作「淋しいのはお前だけじゃない」を演出したのを知っていた。これは恐らく遺族が寄贈したのだろう。ページをめくると、カット割りやせりふの直しが細かく書き込まれていた。ディレクター時代の浅生の息遣いがうかがえて、感慨深かった。

音楽映像資料課の佐藤よりこ課長は「利用者は月に1けたで、思ったより少ない。仕事の関係で調べに来るのか、特定の作品を指定する人が目につきます。デジタル化を進め、館内のどの端末からでも読めるよう利用のハードルを下げていきたい」と語る。

日本放送作家協会理事長だった市川が先頭に立って展開した日本脚本アーカイブズ設立運動によって、10年越しで公開にこぎ着けた貴重な脚本・台本類が活用されないのはもったいない。脚本アーカイブズは番組の制作者や脚本家、放送作家、研究者、放送界を志望する学生を問わず、利用者たちの「発見」を待っている。（敬称略）

2. 川崎市市民ミュージアムでの公開準備作業と課題

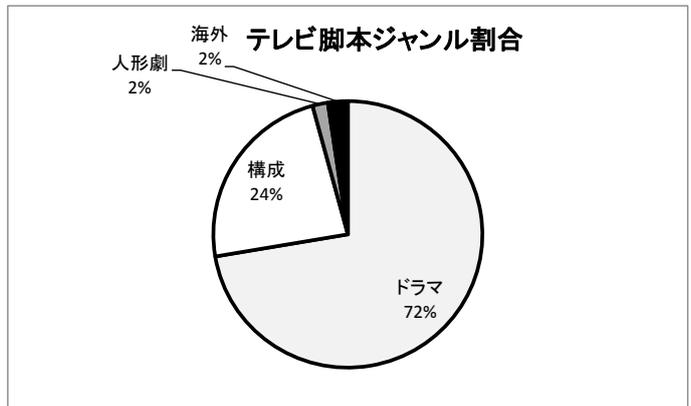
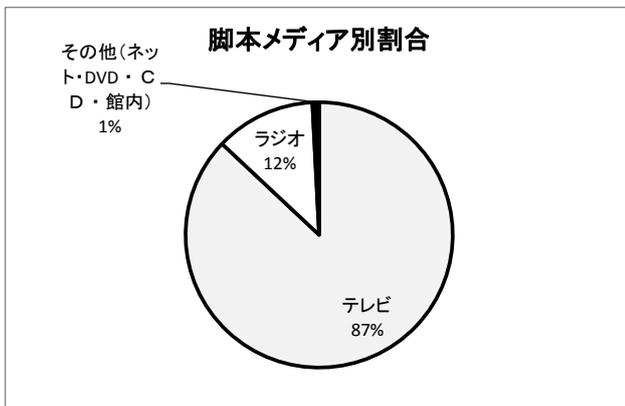
脚本の一般公開を目指す川崎市市民ミュージアムでの現物脚本にまつわる主な準備作業は、

- 1) 脚本に記載されている個人情報量の調査とその被覆方法の検討
- 2) 重複脚本（複本）の冊数調査とその抜き取り
- 3) 同一タイトルで固めた脚本排架の並べ替え（名寄せ作業）

の3つである。以下、準備作業及びそれに関する課題の検討内容について報告する。

【川崎市市民ミュージアムへの移管脚本・資料の数】

種類	脚本							資料	総数
冊数	15,436							123	15,559
メディア	テレビ				ラジオ		その他（ネット・DVD・CD）	未分類	総数
冊数	13,435				1,876		125	123	15,559
ジャンル	ドラマ	構成	人形劇	海外	ドラマ	構成	ドラマ・構成	未分類	総数
冊数	9,719	3,148	248	320	1,583	293	125	123	15,559



(1) 個人情報の調査と被覆方法の検討

① 個人情報量の調査

脚本は一般的な書籍・出版物とは異なり、収録現場で使用する道具の一つである。放送局・撮影所で制作されていた番組が制作会社等でも作るようになってきたことなどから、印刷脚本の最初の部分にスタッフや出演者事務所の連絡先（電話番号）も記すようになってきた。

こうした「個人情報」について、国立国会図書館の脚本内にあるものは1980年以前の古い情報であるがため、被覆せずそのままの閲覧が可能とした。川崎市市民ミュージアムで公開予定の脚本には比較的新しい情報が記されていることもあり、まず、どの程度の情報が脚本に記載されているのか調査を行った。

（期間：5月2日～7月23日 日数：9日 のべ作業人数：42名）

結果、出演者・スタッフの連絡先が記されている脚本は、複本も含めた17,402冊中9,282冊、割合でいうと53.3%にのぼることがわかった。

「中部日本放送で制作された放送脚本」「太秦撮影所で撮影された時代劇」「準備稿段階の脚本」などには連絡先が全く記されていないことが分かったため、この時点ではこれらの脚本を先に公開し、その後で情報の被覆作業を終えたものを公開するという段階的な公開方法を検討することになった。

② 被覆方法の受講

資料の被覆方法調査のために、国会図書館で実際に行われている被覆方法を受講した。

日時：平成26年6月5日13時～15時

場所：国会図書館資料保存課

受講人数：3名

ページの一部情報は、下記のように被覆する。

- i) 被覆する情報の大きさに合わせて黒い和紙を切る。
- ii) 白くて薄い和紙を黒い和紙より1周り大きいサイズに切る。
- iii) 黒い和紙の四隅に水で溶いた澱粉糊を塗り、白い和紙の中央に貼り付ける。
- iv) 白い和紙の縁に水で溶いた澱粉糊を塗り、被覆する箇所が黒い和紙で隠れるよう貼り付ける。

元の状態に戻すには、筆で接着箇所に水を塗ると、糊が溶けて和紙が剥がれる。被覆した文字に直接貼り付けたわけではないのでダメージは極小に抑えられる。

数ページにわたるまとまった情報は、下記のように被覆する。

- i) 1センチ幅のテープ状に切ったビニールを2本輪にして被覆するページを束ね、両面テープでゆるみのないようにとめる。
- ii) 束ねたページの文字部分を削るんで？隠せる大きさに黒い和紙を切る。
- iii) 白くて薄い和紙を黒い和紙より1周り大きいサイズに切る。
- iv) 黒い和紙の四隅に水で溶いた澱粉糊を塗り、白い和紙の中央に貼り付ける。
- v) 白い和紙の縁に水で溶いた澱粉糊を塗り、束ねたページをくるむように貼り付ける。

この場合も、筆で接着箇所に水を塗って糊を剥がし、ビニールテープをハサミで切れば元の状態に戻すことができる。資料を傷めることなく情報を被覆するという点において上記の方法は有効だと分かったが、1万冊に近い脚本を被覆するとなると、膨大な日数と人件費、材料購入費が派生し、公開準備として間に合わない可能性がある。1981年以後の脚本は複数存在するものも多いので、「管理・保存」の原則に囚われず、情報のある箇所を切り取るなど別の被覆方法を考えるべきか、今一度検討の必要に迫られた。

③ 脚本内記載の「個人情報」の定義

平成26年6月24日の当コンソーシアム理事会において、川崎市市民ミュージアムでの公開準備に関し上記①②について報告をしたところ、理事の面々から以下のような意見が出された。

- △スタッフ・出演者などの名前や所属先は、長い目で見れば脚本の内容以上に重要な情報。ページを切り取ってしまうと貴重な情報が失われてしまう。
- △出演者・スタッフ等の連絡先はあくまでも「職場」の情報。放送局、制作会社、芸能事務所などの連絡先は、脚本を見なくてもインターネット等から入手できる。「自宅」「携帯」と記されている電話番号、視聴者参加番組の出演者連絡先以外は「個人情報」と捉えなくてもよいのではないか。
- △早稲田大学やその他脚本を所蔵している研究機関で申請者が脚本を閲覧する場合にも、出演者・スタッフの情報は被覆していないのが現状である。
- △知り得た情報を利用されるのを防ぐため、閲覧申請には申請者の住所・氏名を記入し、「脚本で知り得た情報を利用しない」という一文に同意するチェックを入れれば、問題をクリアできるのではないか。

これらの意見を受けて、「職場の連絡先は個人情報とは別の情報である」と定義し、「個人情報」の記載脚本について一旦「非公開」扱いにして、被覆等のしかるべき処理をしたうえで公開することで意見がまとまった。

(2) 重複脚本の冊数調査と抜き取り作業

① 「複本」の定義付け

川崎市市民ミュージアムでは原則、複本の寄贈は受けないことになっている。昨年度は北千住から移動した脚本を箱番号順に排架する段階で作業が止まっていたので、その中から重複しているものを抜取るのが喫緊の課題となっていた。

当初「複本」の定義付けとして、「タイトル」「放送日・放送回」「台本バージョン（準備稿・決定稿・スタッフ稿などの稿数）」が一致するものが2冊以上ある場合を指していた。

だが、異なる寄贈者から提供された同一脚本が複数ある場合、どちらの寄贈者からのものを正本・複本として残すかという問題が生じる。また、同一の脚本であっても、俳優から寄贈されたものにはセリフの直し等の書込みがされていたり、演出家から寄贈された脚本にはカット割り、絵コンテ、シーンの秒数等が記入されていたりと、書込み内容が異なる。これらのことから、「寄贈者が異なるもの」「書き込みがあるもの」は、上記の複本の定義に当てはまるものでも別本として扱うことになった。

② 抜き取りと箱詰め作業

抜き取り作業

(期間：3月28日～5月2日 日数：7日 のべ作業人数：26名)

- i) データ上で重複がある同一脚本をピックアップしてリスト化
- ii) 旧管理番号を手掛かりに既に排架されている棚から重複のある脚本を抜いて状態を確認
- iii) 状態の良い物を元の棚に残して正本とし、複本は複本棚に別置

別置した脚本の箱詰め作業

(期間：10月21日～12月2日 日数：4日 のべ作業人数：13名)

メディア・放送局・ジャンルに分けてタイトル50音順に箱詰めを行った。

☆ 箱詰め複本の内訳

放送局	NHK				民放			
	テレビ		ラジオ		テレビ		ラジオ	
メディア	ドラマ	構成	ドラマ	構成	ドラマ	構成	ドラマ	構成
ジャンル	ドラマ	構成	ドラマ	構成	ドラマ	構成	ドラマ	構成
冊数	1416	456	627	32	423	92	13	7

2007年以降、NHKからはテレビドラマ・ラジオドラマ、音楽番組等に余裕があった場合に2冊以上の寄贈をいただいていたので特に複本が多い。複本の多いドラマ放送枠としては「連続テレビ小説」「大河ドラマ」「ドラマ10」「金曜ドラマ」「土曜ドラマ」「FMシアター」「青春アドベンチャー」「新日曜名作座」など。構成番組では「きよしとこの夜」「ごきげん歌謡笑劇団」「歌謡コンサート」などがあげられる。

計3066冊の複本を60箱の段ボール箱に梱包して川崎市市民ミュージアムの書庫内に別置。それぞれの箱にどの脚本が入っているかはデータ化され、PCで確認できるようになっている。

③ 複本の取蔵先

複本の整理作業は終了したが、これらの複本の移譲先を考えなければならない。国会図書館や川崎市市民ミュージアムと同様、閲覧のための料金が派生せず研究目的での利用閲覧に制限できるといことから、大学図書館を中心に検討を進めている。また、日本放送作家協会内にて、後進の指導目的として一部の閲覧のスペースを設けることも検討している。貴重な台本をより多くの方々に利用・活用して頂くため、今後、大学間連携を強め慎重に検討していきたい。

(3) 同一タイトルで固めて（名寄せ）の排架作業

① 作業前の排架状況

国会図書館と同様、前年度までにリストと現物の照合作業を終えたものを北千住の準備室でつけた従来の旧管理番号順に排架。データと脚本を紐付ける管理番号があれば、管理番号を請求番号として脚本を出納することは可能である。だが、国会図書館と違い、透明のOPP袋に入っているのが目立ち、出納の際に「同一タイトルの1話から3話」という申請がされた場合、書庫から取り出すのに手間取ることが懸念された。

また、OPP袋には旧管理番号のシールを貼っただけで、袋にはタイトル等記されていない。袋から出して閲覧者に貸し出しの後、リストで番号とタイトルを照合しないと袋に戻すことができない。これらの理由から、複本を抜いた約14000冊の脚本をタイトルごとに並べ替え、新管理番号とタイトルを併記したシールを添付した袋に入れ替える作業を行うことにした。

② 排架までの作業内容

- i) タイトルを寄せたリスト作成の前段階として、データ上の作品タイトル表記ゆれ等のチェック
(期間：7月30日～10月8日 日数：6日のべ作業人数：12名)
- ii) リスト並び替え→新管理番号・タイトル・サブタイトル・放送日・放送回数・旧管理番号を併記したラベルシート印刷（大森情報システムに依頼）
- iii) 同一タイトルの脚本を集め、新しい管理番号シールを貼ったOPP袋に入れ替えて新管理番号順に排架（期間：8月12日～10月7日 日数：8日のべ作業人数：37名）

当初はタイトルを50音順に並べるという案があったが、書庫内の脚本を全部抜く作業とタイトルごとに仕分ける広いスペースが必要なので、旧管理番号でそのタイトルの脚本が初出した箇所に他の同一タイトル脚本を寄せて固め置きする方法をとった。並び順は50音とはなっていないが、以前よりはまとまりのある配置になった。

(4) 公開に向けた今後の作業

① 具体的な公開の方法確認

川崎市市民ミュージアムでの今年度中の公開を目指して（1）～（3）の作業を行ってきたが、ミュージアムの施設工事のために平成27年1月中旬～3月末までミュージアムが閉館となり、図書館の出納業務担当者との間で脚本公開に伴う業務確認が延期となった。

確認が必要と思われる事項には、以下のようなものがあげられる。

i) 閲覧検索の方法

川崎市市民ミュージアム館内での脚本検索ツールをどうするか（たとえば、紙に印刷する、館内の図書検索システムにデータを流し込む、インターネットに接続できるPCを設置する等が考えられる）

ii) 閲覧場所

係員のフォローできる範囲の中で閲覧場所の設置を検討する

iii) 出納体制

貸し出しの際の作業手順と業務負担等の確認

iv) 複写希望者への対応

写真・書き込み等がある資料は複写不可であることを利用者に説明

v) 脚本の管理対策

盗難防止のために蔵書印捺印・シール貼付等の作業負担

上記の確認事項については、1月30日に川崎市市民ミュージアムに提出済。必要な事項については回答を持ち寄り擦り合わせる必要がある。業務内容の確認、準備等に時間が必要なため、川崎市市民ミュージアムでの脚本公開は、早くても2015年5月の連休明け以後の見通しである。

② 移管脚本の整理

(1)～(3)の作業終了後、川崎市市民ミュージアム書庫内の移管済脚本を箱から出し、内容をチェックしてデータ入力を行う。チェック作業は概ね終了したが、データ入力作業は整理作業後に資料の保存方法、保管場所等を検討する必要がある。

【寄贈資料への対応の実例】

寄贈を受けた資料の中には、公的機関に移管ができないものが存在する場合がある。例えば、寄贈者である作家が審査員を請け負ったコンクールへの応募作文や文集等が含まれていたケースがあった。50年前の小学生の作文は貴重だが、脚本アーカイブズ活動で保存するにはあたらない。これについては、日本放送作家協会以前アーカイブ活動に携わっていたメンバーが、元の著作者や学校等に返却すべく手を尽くして動いてくれた。以下は、その経過報告である。

「横田弘行氏その他の資料の移管」

日本放送協会会員 脚本家 鷺山京子

脚本・台本の寄贈を受けていると、その中に脚本や台本以外の資料が含まれていることがある。そうした資料のうち映画や演劇などに関係する資料は、これまでもしかるべき機関への移管を進めてきた。しかし、中にはそうした分野とは全く関係のない資料もある。故横田弘行氏のご遺族から寄贈を受けた資料の中にも、そうしたものが含まれていた。

横田弘行氏は、脚本家、劇作家として多彩な執筆活動を行ってきた大先輩である。特に子ども向けの番組などを多く手がけてこられた。その関係だろうか、ガリ版刷りや簡易印刷の学校文集などが含まれていたのである。現在では、昭和20年代～30年代の子どもたちと家族の暮らしが記された貴重な記録と言えるだろう。私たちアーカイブズ事業に携わるものとしては、できればふさわしい公的機関に移管し、教育や生活史の研究などに役立ててもらえたらと願わずにはいられなかった。

最も望ましいのは、文集等が作成された元の学校に返却することである。そこで、文集の題名や奥付、あるいは表紙などに押された学校名のゴム印などを手がかりに、元の学校名を洗い出すことから始めた。今回、作業に取りかかった資料はのべ46点あったが、そのうち45点については、作成元の学校を見つけることができた。1点については、確定することができなかった。文書の性質上、学校名などは自明のこととして略称で書かれていたりするためである。

せっかく判明しても、学校の統廃合が行われたり、高校の通信制が廃止されたりして、元の学校がなくなってしまうことがある。後継の学校がわかっている場合はその学校、わからない場合は地域の教育課や教育委員会を受け入れ先とすることにした。

同時に、資料の概要がわかるリストを作成した。項目は、文集のタイトル、数量、形態、学校名など、制作年月日。わかる範囲で記入し、その他の情報がある場合は、備考として追加した。

こうして6カ所の学校、5カ所の役場や教育委員会に連絡をとる準備ができた。先方してみれば寝耳に水のことと思い、まずは文書で返却受け入れのお願いをすることにした。前記リストを同封するほか、返却受け入れの可否をお答えいただく返信用ハガキも同封し、返信を待つことにした。

数週間のうちに、2つの学校、2つの教育委員会から返信をいただいた。そのうち3カ所は返却を受け入れるというお返事だった。

返却の方法を検討した結果、受領書を同封して、配達記録の残るレターパックでお送りすることになった。その際、著作者の権利とプライバシーへの配慮について注意を促す一文を添えた。これは、弁護士の指導によるものである。確かに、子どもの作文ということで、つい著作者の権利やプライバシーについての認識が甘くなってしまうことは十分考えられることだと思う。

こうして3カ所の学校、機関に計16点の資料を返却することができた。元々あるべき所に納めることができたと思うと、何とも言えない安堵感を感じた。中にはたいへん喜んでくださったところもあり、私たちにとってもうれしいことだった。

できれば今後もこうした作業を続け、今回返却がかなわなかった資料にもふさわしい落ち着き場所を見つけて、アーカイブが成し遂げられるよう努めてゆきたい。



寄贈された文集の一部

3. 収集のためのアンケート調査の実施

多くの脚本家・構成作家は、自作の脚本・台本をそれなりの数は保管しているものと推測できる。脚本アーカイブズの活動において、これまでも脚本家たちへの脚本の保存状況等に関するアンケート調査を行ったことがあり、その保存状況の把握という意味で有効だった。

今年度以降の新たな脚本収集計画の検討を進めていくにあたって、一番基本となる放送作家（脚本自体の著作権者でもある）の手元にある古い脚本の残存状況をあらためて探り、また寄贈の意向や著作権者としての権利にまつわる意識を丁寧に汲み取ることを目的として、以下のアンケート調査を実施した。

(1) アンケート調査の実施概要

- ・調査方法 アンケート調査票を郵送送付
- ・実施日 平成26年11月22日送付（回答締切日12月24日）
- ・調査対象 日本脚本家連盟の放送作家のうち59歳以上の人 467名
- ・調査内容 ※質問項目は以下の通り

<調査の質問項目>

問1 脚本アーカイブズの活動についてご存知でしたか？

- 1、よく知っている 2、少し知っていた 3、知らなかった

問2 この活動の趣旨についてどう思われますか？

- 1、大いに賛同する 2、まあ、賛同する 3、あまり賛同できない 4、その他

問3 ご自分の執筆脚本で、是非後世に残したいと思っておられる作品名をお教え下さい

問4 問3でお書きいただいた作品の脚本をお持ちですか？

- 1、持っている 2、持っていない

問5 上記も含め、印刷された脚本を現在ご自分でお持ちですか？

- 1、持っている 2、持っていない

問6 <問5で持っている、と答えた方のみ>

1980年までの脚本 を何冊くらいお持ちですか？（およその数）

- 1、テレビドラマ脚本 _____冊くらい 2、テレビ構成脚本 _____冊くらい
3、ラジオドラマ脚本 _____冊くらい 4、ラジオ構成脚本 _____冊くらい
5、劇映画脚本 _____冊くらい 6、舞台の演劇脚本 _____冊くらい
7、その他（_____を_____冊くらい）、（_____を_____冊くらい）

問7 <問5で持っている、と答えた方のみ>

1981年以降の脚本 を何冊くらいお持ちですか？

- 1、テレビドラマ脚本 _____冊くらい 2、テレビ構成脚本 _____冊くらい

- 3、ラジオドラマ脚本 _____ 冊くらい 4、ラジオ構成脚本 _____ 冊くらい
 5、劇映画脚本 _____ 冊くらい 6、舞台の演劇脚本 _____ 冊くらい
 7、その他 (_____ を _____ 冊くらい)、(_____ を _____ 冊くらい)

問8 お持ちの脚本の状況について、以下該当するものに○を付けて下さい(複数回答可)

- 1、2冊3冊と、同じ脚本が複数あるものが比較的に多い
 2、準備稿を数多く持っている
 3、手書きの原稿を持っている
 4、脚本以外の関連資料(企画書・資料写真や番組テープなど)を持っている
 5、図書館・文学館等に脚本を寄贈したことがある 寄贈先(_____)

問9 公的施設での公開に向けた脚本のご寄贈についてどうお考えですか？

- 1、早く寄贈したい 2、時期をみて寄贈したい 3、寄贈するつもりはない
 4、その他 ※具体的なお寄贈希望時期 (_____)

問10 もし脚本をご寄贈いただく場合、引き取り方法についてはどうお考えですか？

- 1、事務局に自宅に引き取りに来てほしい 2、自分で箱詰して送りたい 3、その他

問11 公的施設に納まった脚本に関し、次のことについてはどのようにお考えですか？

- A 希望者に複写(コピー)を行うこと(有償)
 1、許諾する 2、許諾しかねる 3、分からない 4、その他(_____)
 B デジタルスキャンを行い、それを施設内のパソコンで一般閲覧を行うこと(無償)
 1、許諾する 2、許諾しかねる 3、分からない 4、その他(_____)
 C 上記を他施設に送信し、そこで一般閲覧を行うこと(無償)
 1、許諾する 2、許諾しかねる 3、分からない 4、その他(_____)
 D 何らかWeb上に掲載公開すること(無償)
 1、許諾する 2、許諾できない 3、分からない 4、その他(_____)

問12 あなたのデビュー作品名と、その放送年をお教えてください

(2) 調査結果について

回答数は61名(回収率・13%)であった。これまでの放送作家へのアンケート調査の回収率の平均1割程度と比べても、返送されてきた回答は妥当なボリュームと考えられる。

【アンケート集計の結果・部分】 (※所蔵冊数については「相当数」「?冊」等の回答があり概数)

1980年以前の所蔵冊数

	TVドラマ	TV構成	ラジオドラマ	ラジオ構成	映画	演劇	合計
冊数	1,101	87	117	200	131	85	1,721
	64.0%	5.1%	6.8%	11.6%	7.6%	4.9%	100.0%

1981年以後の所蔵冊数

	TVドラマ	TV構成	ラジオドラマ	ラジオ構成	映画	演劇	合計
冊数	2,703	243	197	635	70	69	3,917
	69.0%	6.2%	5.0%	16.2%	1.8%	1.8%	100.0%

脚本アーカイブズ活動の認知

	知っていた	少し知っていた	知らなかった	記載なし
回答数	38	18	1	4
	62.3%	29.5%	1.6%	6.6%

活動趣旨への賛否

	賛成	どちらでもない	反対	記載なし
回答数	52	5	0	4
	85.2%	8.2%	0.0%	6.6%

残したい作品の台本の所蔵の有無

	有	無	記載なし
回答数	35	11	15
	57.4%	18.0%	24.6%

印刷台本の所蔵の「有無」

	有	無	記載なし
回答数	43	10	8
	70.5%	16.4%	13.1%

寄贈意思の有無 (○は「早く」、△は「時期を見て」、×は寄贈意思なし)

	○	△	×	その他	記載なし
回答数	10	17	14	7	13
	16.4%	27.9%	23.0%	11.5%	21.3%

複写について

	許諾する	許諾しかねる	わからない	記載なし
回答数	29	9	11	12
	47.5%	14.8%	18.0%	19.7%

デジタル化の施設内公開について

	許諾する	許諾しかねる	わからない	その他	記載なし
回答数	37	2	9		13
	60.7%	3.3%	14.8%	0.0%	21.3%

他の施設での公開(図書館送信)

	許諾する	許諾しかねる	わからない	その他	記載なし
回答数	33	5	11	0	12
割合(数/回答数)	54%	8%	18%	0%	20%

インターネットでの公開

	許諾する	許諾しかねる	わからない	その他	記載なし
回答数	24	9	14	0	14
割合(数/回答数)	39.3%	15%	23%	0%	23%

- ① 脚本アーカイブ活動への認知度（「知っている」）は92%となっている。これまでの報告書配付やシンポジウムの案内、さらに新聞報道などの地道な周知活動を経て、活動状況を一番知ってほしいベテラン作家たちへの浸透が順調に進んだものと考えられる。
- ② 脚本アーカイブ活動の趣旨への賛否については、93%の人が賛同している。国立国会図書館等での公開開始という具体的な動きが、賛同のベースにあると思われる。
- ③ 回答者作家の脚本保存の数は、1980年以前については約1,700冊、81年以降が約3,900冊となった。もし、対象者全員がこのレベルで保存しているとした場合、総数は80年以前が13,600冊、それ以降が31,000冊となり、合計4万4千冊ほどが（59歳以上の日脚連会員作家の）脚本保存数になる。ただしこれは、あくまで「最大の数」と考えるべきであろう。未回答の全員が同じくらいの数の脚本を保存しているとは限らない。「保存がほとんどないので回答しない」という作家が多くいることも十分に考えられる。
- ④ 保存してきた脚本を「最近に処分」したといった回答もいくつかあり、こうした現実に対応するには、少しでも早くの収集と「保護」が必要である。
- ⑤ 今回あらためて認識すべきは、脚本の寄贈の意思があっても、寄贈時期について、「早く」ではなく「時期を見て」と回答する作家が全体の3割弱もいたことである。「自分が死んだときに寄贈する」という答えもあるように、自分が生んだ脚本を簡単に手放したくないという思いも垣間見える。また現役で執筆の仕事をしている脚本家・構成作家の中には、過去の自作の脚本を手元に置いて参考にする場合もあることから、資料として自分の脚本が必要と考えている人も少なくない。
- ⑥ 権利に関する意識は、特に人によりさまざまであるように見える。これについては、慎重に考えていくことが前提となる。ただ、「公開」の先にある利用方法（複写・デジタル化による公開・ネット配信等）を考えていくとき、極めて難しい壁があるということではないのかもしれない。どの設問にも、40%～60%までの人が許諾をすると答えている。この点については意外な結果であった。今後、欧米に続いてデジタルアーカイブが振興されていく流れとなった場合、追い風になるのではないだろうか。賛同できない方や「わからない」と回答された方々の気持ちも配慮しつつ、じっくり検討していく必要があると考える。

4. 新たな収集に向けて

脚本アーカイブの活動においては、以前より、新たな脚本収集作業に取りかかるタイミングを計りつつ、収集を再開する場合の体制について様々な検討が行われてきた。

本コンソーシアムの収集作業のベースにある問題としては、1) 収集したものをどこに一時保管するのか、2) その整理作業をどこで行うのか、3) 作業に何人の要員体制が組めるか、4) そもそも、どこが公開のための収蔵先になるのか、5) 様々な検討・実践を限りある予算でどう賄うのか、といったことが根底にある。その問題をクリアしていくためにも、集める対象脚本をどう絞り込み、いかなる優先順位を付け、どういう効率的作業を行うのかという視点が必要とならざるをえない。

放送作家へのアンケート調査の結果も踏まえて、今後の脚本・台本の収集計画については、以下のような項目での体制作りが行われている。

新たな脚本収集の計画案（平成27年度に向けて）

(1) 収集の呼びかけ対象

- ・放送作家の遺族やベテラン作家の方々への呼びかけ・連絡を先行して行う。（今年度のアンケート結果の情報に基づき収集の連絡を行う）
※俳優やスタッフ等から緊急の寄贈の申し出があったときには状況に応じて対応する。
- ・その後、上記の進行の様子を見ながら、制作者・スタッフや出演者への呼びかけ範囲を広げていく。

(2) 収集する脚本の時期

- ・散逸や消失の状況を考慮して、1980年代まで（昭和の時代）の脚本・台本に対して、先に重点的な収集作業を行う方法を工夫。

(3) 重複する脚本の扱い

- ・同じ内容のものが複数ある脚本の効率的な扱い方をルール化していきながらも、個別ケースでの状況判断も行っていく。
- ・使用者（スタッフや俳優）による書き込みのある脚本は価値をもつもので、複本とは扱わない。

(4) 寄贈時の権利処理の再検討

- ・寄贈者が著作者である場合、権利処理文書の手続きとしてより効率的な方法を検討する。

※今後の脚本収集のタイムスケジュール（案）

◇平成27年4月～8月	放送作家からの現物収集（1980年代までの脚本・台本を中心に収集） <収集と同時に入力・管理⇒仕分け後、一旦倉庫へ移し保管>
◇平成27年9月～28年2月	それまでの収集数と状況を検証の上、対象者をスタッフ等へ広げ収集を行う <収集と同時に入力・管理⇒仕分け後、倉庫へ>
◇平成28年3月以降	収集の全体状況を検証しながら、出演者等へ対象を広げるか検討

Ⅲ データベース展開とデジタルアーカイブの検討

1. 脚本所蔵館へのヒアリング

◇「調布市立中央図書館」映画資料室

(取材先：図書館司書 川名亜弥氏)

〒182-0026 調布市小島町2-33-1 文化会館「たづくり」内

電話 042-441-6181

毎月第4月曜日とその翌日

(第4月曜日とその翌日が祝日と重なる場合はその前後の週) 年末年始、特別整理日は休館。

開館時間 午前9時から午後8時30分まで



映画資料室

(1) 脚本所蔵の経緯

「映画のまち調布」にある図書館としての特色を打ち出すために1995年10月、文化会館「たづくり」内に中央図書館がリニューアルオープンしたのを機に映画資料室を新設。中央図書館の5階に、一般室、参考図書室とは別に設置されている。当初の蔵書は図書館が購入した映画に関する図書・雑誌が主だったが、映画資料室新設の広報を見て、映画関係者からの脚本、ポスター、ちらし、スチール写真等の資料が寄贈されるようになった。常勤職員2名、嘱託職員2名で資料の収集保存管理を行なっている。

【映画資料室所蔵資料の内訳】

資料	所蔵数
図書	約 30,000 冊 (うち撮影台本 1,100 冊)
雑誌	約 2,500 冊 (約 100 タイトル)
ポスター	約 2,500 枚
チラシ	約 7,600 種類
スチール写真	約 4,500 枚 (約 800 タイトル)



書庫

(2) 所蔵脚本の現状

寄贈元 大映、にっかつ関係者からの寄贈が多い。

所蔵場所 パンフレット、スチール写真、ポスター等と同じく地下1階の閉架書庫に収蔵。

保管状況 表紙をパラフィン紙で覆い、中性紙の封筒に入れてタイトル 50 音順に排架。タイトルは封筒右上に縦書き。棚から引き出した際にすぐにタイトルが判別できる。また、封筒右下には、Movie の頭文字をとった別置を表す「M」と、日本十進分類法で映画に区分される「778」を組み合わせた「M 778.5」の番号とタイトルを印字した紙をシールでタグのように貼り付けられている。

書誌情報 図書館の書誌情報の項目に下記の事項を入力。

「書名」・・・映画のタイトル

「著者名」・・・脚本家、監督、主演俳優の名前

「出版社」・・・映画配給会社、制作会社名

「出版年月」・・・映画の公開年

「ページ数」・・・台本のページ数

「大きさ」・・・台本の大きさ (縦の長さ)

「NDC 9」・・・日本十進法の分類番号
「注記」・・・原作名など
「資料形態」・・・台本は「図書」と記入
「言語」・・・日本語

閲覧方法 調布市図書館のHPでタイトルを入力して蔵書検索。
検索語の入力画面タイトル欄に「男はつらいよ」出版社欄に「松竹」と入力すると、下記の8点が引きあたる。



放送台本

資料の種類	タイトル	著者名	出版社	出版年
図書	男はつらいよ-噂の寅次郎- (男はつらいよシリーズ 22)	山田洋次監督 渥美清[出演] 大原麗子 [出演]泉ピン子[出演]	松竹株式会社事業部	
図書	男はつらいよ-拝啓車寅次郎様- (男はつらいよシリーズ 47)	山田洋次監督 渥美清[出演] かたせ梨乃 [出演]	松竹株式会社事業部	1994
図書	男はつらいよ-葛飾立志篇- (男はつらいよシリーズ 16)	山田洋次監督・脚本 渥美清[主演]倍賞千 恵子[出演]榎山文枝[出演]桜田淳子[出	松竹株式会社事業部	
図書	男はつらいよ-寅次郎の縁談- (男はつらいよシリーズ 46)	山田洋次監督・脚本 渥美清主演 松坂慶 子出演	松竹事業部	1993
図書	男はつらいよ・寅次郎サラダ記念 日 改訂稿	山田洋次脚本 朝間義隆脚本 山田洋次監 督	松竹	1988
図書	男はつらいよ・寅次郎物語	山田洋次脚本 浅間義隆脚本 山田洋次監 督	松竹	1987
図書	人生に、寅さんを。-『男はつら いよ』名言集-		松竹	2008
図書	人生に、寅さんを。-『男はつら いよ』名言集 2-		松竹	2010

NO.1~4は、映画パンフレット。7、8は図書。撮影台本は5、6の2点。

NO.5のタイトルをクリックすると詳細な書誌情報を見ることができる。

書誌情報

書名	男はつらいよ・寅次郎サラダ記念日 改訂稿
著者名	山田洋次脚本 朝間義隆脚本 山田洋次監督
出版社	松竹
出版年月	1988
ページ数	121p
大きさ	25cm
NDC8	912.7
注記	原作:山田 洋次 俵 万智 原作「サラダ記念日」河出書房新社刊より
資料形態	図書
言語	日本語
マークNo.	T10505610

貸し出し可能な一般図書は書誌情報の下にある「この資料を予約する」をクリックすれば貸し出し予約ができるが、撮影台本は館内閲覧のみ可能な「禁帯」扱いになっており、貸し出し予約はできない。

資料ID	所蔵館	禁帯	請求記号	資料の状態
05056107	中央	館内のみ	M 778.5 オ	[地下書庫映画]にあります。職員におたずねください。

書誌情報ページの下には上記のように閲覧の申請に必要な資料IDと所蔵場所が記されており、「職員におたずねください。」と記されている禁帯資料は受付窓口で資料IDを申請すれば、映画資料室内で閲覧することができる。閲覧にあたって閲覧者の氏名の記入が必要。成人映画撮影台本の閲覧であっても特に年齢制限は設けていない。

(3) 関連資料の保存状況

パンフレット 中性紙封筒に入れてタイトルごとに保存。撮影台本と同様に閲覧申請すれば館内で閲覧可能。日本十進分類法では商業広告を表す「674」の番号がつけられている。

ちらし ファイルにまとめたものを5階の映像資料室内開架書庫で自由に閲覧できる。

スチール写真 一枚ずつ写真サイズの透明な袋に入れて保存。タイトルごとに中性紙の封筒にまとめて入れて保存。配給会社で作成された、映画館で上映時に飾る大判のロビーカードも、タイトルごとに中性紙のファイルホルダーに入れて保存。写真やカードの裏には俳優の名前や映画のタイトルが鉛筆で記されている。

ポスター ルミラーで一枚ずつ覆って保存。スチール写真とポスターの閲覧はできないが、調布市映画祭の折に、撮影台本と一緒に文化会館「たづくり」内で展示活用されている。非閲覧資料なので図書館の蔵書データベースには入力されていないが、図書館内部でエクセルで「ポスターリスト」を作成して情報を管理している。

(4) 非閲覧にする判断基準

寄贈された撮影台本、書籍等は分類整理作業を終了後、閲覧可能となるが、中には非閲覧扱いとなるものもある。非閲覧とする判断基準は以下のようなものである。

- ・住所等個人情報が記されている
- ・他では手に入らない（1冊しかない）、古くて価値がある
- ・裁判記録などの資料

◇ 「GiichiGallery」 (藤本義一の書齋)

(取材先：館長 中田有子氏)

〒659-0003 兵庫県芦屋市奥池町11-10

電話 090-8126-1933 (館長直通)

3月～11月の日のみ開館 入場無料

(1) 開館の経緯

2012年に逝去した藤本義一氏は、直木賞作家であり、「11PM」の司会者として活躍したが、放送作家としても多くの作品を残している。出身地である関西を舞台とした作品が特徴であり、大阪に在住し続け、日本放送作家協会の関西支部長として後進育成に大きく貢献した。そのゆかりの品が集められたギャラリーが氏の別荘敷地内に新設され、2014年3月にオープンした。館長の中田有子さんは藤本氏の長女。別荘地にひっそりと佇む隠れ家のようなギャラリーである。

(2) 所蔵資料

1960年代のNHKのテレビドラマ『現代人間模様』をはじめ、テレビ放送初期のドラマ脚本や1950年代の宝塚映画の脚本など、合本製本され保存されている。所蔵冊数は現在整理中のため把握は難しいが、脚本は初期の作品から映画まで網羅され、劣化もなく最良の状態で保存されている。

原稿用紙に万年室で手書きされた生原稿もファイリングされ保存されている。氏の父親が制作したいたというスクラップブックも見逃せない。その他、藤本氏が愛用していた書斎机やアタッシュケース、ペンなどが展示されている。

HPに作品はリストアップされている。詳細の書誌データについては、当コンソーシアムと共にデジタルアーカイブ企画と並行して作成中。

(3) デジタル化

今後、当コンソーシアムと共同作業での「藤本義一デジタルアーカイブ」を企画している。

27年度インターネット公開を目指し、脚本や写真資料などのデジタル化作業を開始した。



館内写真ほか

◇「大阪府立上方演芸資料館」(通称・ワッハ上方)

〒542-0075 大阪市中央区難波千日前12-7
YES・NAMBAビル7階
10:00~17:00(映像・音声リクエスト締切は16:30)
休館日毎週水/木曜日(祝日の場合も休館)
年末年始(12月29日~1月3日)
電話06-6631-0884 FAX06-6636-1996



上方演芸に関する資料を収集・保存・活用する文化施設。

上方演芸(落語・漫才・講談・浪曲など)と上方喜劇に関する資料を収集・保存・活用し、上方の演芸・喜劇に広く親しんでいただき、学習していただくことを目的とする施設。収集してきた資料は約6万点。過去に放送されたテレビ・ラジオの3,000本に及ぶ演芸番組の視聴とともに、上方演芸・上方喜劇に関する書籍を閲覧できる(施設案内より転記)。

以前に「日本放送作家協会脚本アーカイブ特別委員会」によりヒヤリングを行ったことがある。その後、スペースが7階のフロアのみで縮小されたが、保管と管理が徹底された使いやすい施設である。

一般に検索可能なデータベースは、閲覧・視聴申請用のもののみ。台本などの貴重資料は、スタッフのみ検索可能なデータベースで管理されている。

放送された番組が自由に視聴できる施設は、放送ライブラリーやNHK番組公開ライブラリー以外には珍しい。放送局との連携・協力関係にあることがうかがえる。

◇「東北新社」等々カスタジオ&ライブラリー

(取材先:高野れい子氏)

〒158-0082 東京都世田谷区等々力4丁目6番8号

社内用収納施設のため、一般公開はしていない。

東北新社が制作した海外映画や海外ドラマの吹替え版、CM、国内ドラマの映像や脚本、資料が保存されている。フィルム等が、温湿度が徹底管理された室内に保存されている。

今回、複本の脚本についての廃棄検討で、当コンソーシアムに連絡をいただく。海外ものを扱うについて、大きな壁は海外の著作権である。特に「~ロードショー」のような映画番組は2時間枠(実際はCM分をさらに短縮)に統一するため、映像がカットされる。その台本は内部資料として閲覧を予定しておらず一般公開には課題は多い。しかし50年・100年後を見据えると、その保存には意味がある。

2. 「脚本データベース」の更新

脚本アーカイブ活動においては、コンソーシアムを經由して別々の機関に移管された脚本・台本を統合的に検索することが可能な形にすることを念頭に、Web上の「脚本データベース」を運営してきた。以下、今年度の脚本データベースの改修、データの管理体制について報告する。

今年度脚本データベースの改修点 (報告：株式会社キューズ・クリエイティブ)

「脚本データベース」の機能等については、今年度以下の改修を行った。

(1) 追加画像表示機能

合本の内部に存在する見出し画像を、詳細ページに表示する機能

(2) 詳細ページへの Wikipedia 表示機能

書誌のタイトルや人名に合致したWikipedia情報を表示する機能

(3) TOP ページの変更

- ・ 検索窓を目立たせわかりやすくなるよう改善
- ・ 関連サイトのリンクバナーを追加
- ・ 週刊ランダムピックアップを表紙画像がある書誌に限定して復活
- ・ 週刊ランダムピックアップのデザイン向上
- ・ アクセスランキングのデザイン向上

(4) ヘッダデザインのリニューアル

- ・ 検索窓と一体感があるデザインに改善
- ・ トップページ以外のページではヘッダ高が低くなるよう改善

(5) 一覧表示部分の項目追加

- ・ 「放送局」列を追加
- ・ 「放送回 (話数)」をタイトル情報エリアから列に変更
- ・ 「シリーズ名 (枠名)」をタイトル情報エリアに追加
- ・ ウィンドウ幅を広げると、情報が多い列の横幅が広がるよう仕様変更

(6) 列の表示幅変更機能追加

改修前は「主な出演」列しか幅が変わらなかったが、他の項目も広がるように変更

【変更後の一覧表示画面】

シリーズ名 タイトル サブタイトル 書誌数 放送日 管理番号	放送回	作家	主な出演	放送局	収録先
74 世紀の祭典オールスター 風屋記念紅白歌合戦 1 1974/3/1 N01-21923-00		保富康午、河村シゲル、下山啓	高橋圭三、美空ひばり	フジテレビ	国立国会図書館
77おめでどう!日本レコード大賞 1 1977/1/1 N01-22166-00		保富康午、諏訪英一、奥山悠伸、河村シゲル	菱川欽也、うつみ富士子	TBS	国立国会図書館
77連続!日本レコード大賞 1 1977/11/22 N01-22173-00		保富康午、河村シゲル	玉置宏、高橋圭三	TBS	国立国会図書館
「ありがとう!この人に」ニ テレビ徳康状—「テレビであ りがとう!」(仮題) 1 不明					国立国会図書館



(1) 書誌データ公開について

2015年1月現在、48,000件を超える収集台本・脚本の書誌データは、事務局内でMicrosoft®EXCEL®(以下、EXCELと称する)により管理され、日々適宜、新規データの登録や既存データの修正といったメンテナンス作業が行われている。また、これら書誌データは、事務局における複数人での作業分担の効率化という観点から、フォーマットを同じくする移管先毎のEXCELファイルに分割され、保持されている。一方、インターネット上の公開ウェブサイト『脚本データベース』は、これら収集書誌の基本データと、表紙画像をスキャンしたイメージデータを一般に向け公開し、検索による照会を可能としたシステムである。

しかし、検索する対象データは上記に挙げた分割されたEXCELファイルではない。不特定多数の利用者からの同時アクセスに耐え、検索結果をスムーズに出力するため、ウェブ画面の背後には物理的なデータベース(正確にはデータベースシステム：RDBMS)が実装され、そこに収められた書誌データが検索されている。



この「データベースにデータを収める」という工程は、実際のところ、分割保有しているEXCELファイルをそのまま格納する訳にはいかない。管理データと公開データではその扱いにおいて目的や手段が異なるためである。一例を挙げれば、書誌データの中には、諸般の事由により一般に非公開としたいものもあれば、公開されるデータの中でも寄贈者情報やその他個人情報を含むもの等、一部非公開としておきたい項目も存在する。また、事務局にて方々の移管先や寄贈者毎に管理するEXCELデータ上の並び順と、アクセスする利用者の利便性を優先的に考慮したウェブページ上の一覧並び順は異なって然るべきである。

では、どのような工程を経て、EXCELデータをネット上のデータベースに収めればよいのだろうか？

(2) 処理の流れ

書誌データが公開されるまでの流れを一文で表すと、以下のように要約することが出来る。

『公開を念頭に管理した EXCEL 書誌データを ACCESS テーブルに集約後、検査・抽出・編集する。公開サイト管理側が公開用データベースに取り込むための CSV 形式データに変換出力して送信し、公開サイト管理側は受信した CSV 形式データを公開用データベースに取り込みウェブサイトに公開する』

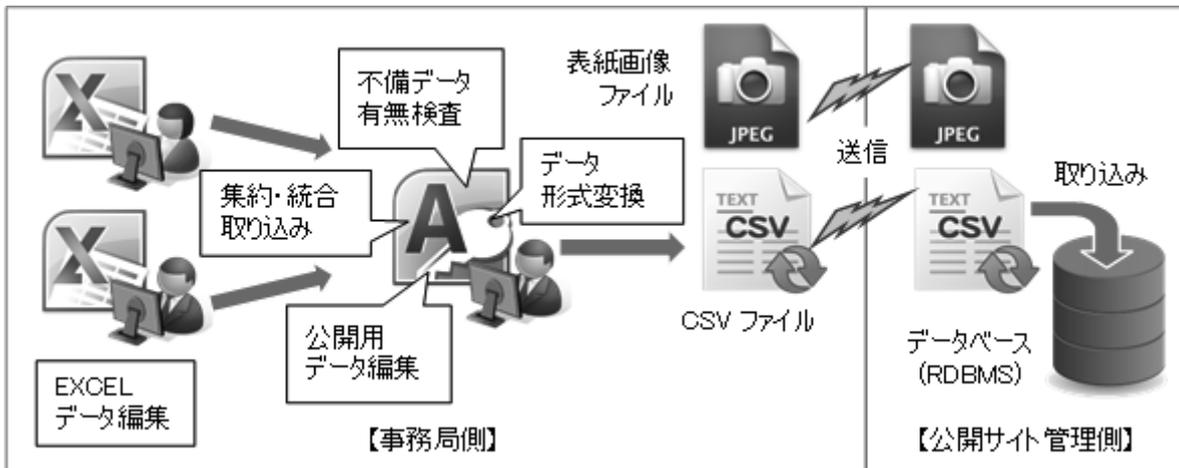
処理の流れを作業工程に準じ整理すると、以下のようなフロー・イメージとなる。

◆処理フロー

- ① EXCELデータ編集…データメンテナンス作業中から公開を見据え、入力規則を守り編集する
- ② ACCESSデータ取得…移管先毎の分割EXCELデータをACCESSテーブルに集約・統合する

- ③ ACCESSデータ処理…取り込んだデータに不備がないか、所取テーブルの内容を検査する
(検査・抽出・編集・変換) 公開対象データを抽出し、公開用に各種データ編集を行う
公開対象データを公開サイト側に受け渡すCSVファイルに変換する
- ④ 公開データ送信…公開サイト側にCSVファイル (+表紙画像ファイル) をFTP送信する
- ⑤ 公開データベース更新…受信したCSVファイルを公開用データベースに取り込む
受信した表紙画像ファイルを公開用の所定位置へ展開する
- ⑥ サイト反映確認…送信データ・表紙画像が公開サイトに正しく反映されているか確認する

◆処理イメージ



(3) 実際の作業

EXCEL編集

ウェブサイト「脚本データベース」は、前述したように、単なる静的なホームページではなく、背後にデータベースを構えた一つの統合的な仕組み＝システムである。書誌データを検索し照会を望む利用者に正しくその結果を示すためには、データベースに取められ画面で参照されるデータについても、一定のルール（データ規約）が求められる。

ルールを守らない規約外のデータがある場合、システムは正しい検索結果を利用者に示すことが出来ない。また規約外のデータは、例え画面に結果が表示されたとしても、その情報が正しく表現されていないという事態にも繋がる。利用者に余計な混乱やシステムへの不信をもたらすことは避けなければならない。データ規約には大別して、データ全般の形式や入力方法に関する「共通基本ルール」と、データ内で定義されている個別の各項目に関する「各項目入力ルール」の2つがある。

◆共通基本ルールの一例

形式に関するルール	書誌データ1冊に対しデータは1行であること、等
入力に関するルール	入力必須項目は必ず入力されていること、等
文字に関するルール	カタカナは全角、英数字は半角で入力されていること、等

◆各項目入力ルールの一例

入力必須ルール	管理番号は一意(重複しない)番号が必ず入力されていること、等
正規表現ルール	放送日は2015/2/28の様な形式で入力されていること、等
独自の取り決め	(不明と明示したい空白データは、' (?) 'という文字に置き換えること、等

ACCESSデータ取得

EXCELファイルにて移管先毎に分割された書誌データは、管理上、個別のEXCELファイル（ブック）内でもまた、基本となる通常の移管確定データ（通称「マザー」）以外に、排架状態や書誌状態、特定寄贈者、現物調査中や移管準備中等、何通りかの書誌状態・書誌属性によってシートで分けられ、保守・メンテナンスされている。

この内、公開対象として有効なデータシートのみを任意に選別し、ACCESS内に準備した「書誌情報テーブル」に連続して取り込むことで、書誌データを集約・統合する。実際の取込みにあたっては、ACCESS内に設けた「インポート情報テーブル」の取得ファイル名を必要に応じ都度、変更する。その後、開発した一括取込みプログラムを実行し、データを取り零しなく、連続して取得する。

ACCESSデータ処理（検査・編集・抽出・変換）

前項までの作業でACCESS内の「書誌情報テーブル」に集約・統合した書誌データを、開発した一括処理プログラム「公開DBサイト送信データ抽出整形PG」により処理する。このプログラムには大別して「①データ検査」「②データ抽出・編集」「③データ変換」と3つの機能がある。

① データ検査

集約・統合前のEXCELデータは、メンテナンスに携わる作業員により注意深く編集されてはいるが、残念ながら人間の目視によるチェックには限界があり、稀に、規約外の異常データを見落とすことがある。この工程では、「書誌情報テーブル」の全データを機械的に、様々な角度からチェックする。チェックは全て、事前に定義したACCESS上の管理テーブルとクエリおよびSQL文により行われる。異常データを検知した場合、一括処理プログラムは続行を停止し、修正すべきデータを表示する。主なチェック項目としては以下のようなものがある。

移管先相違 有無検査	取得元の移管先ファイルと書誌データ中に記載された移管先が合致しているか？ 例) 川崎市市民 M の EXCEL ファイルから取得したデータ中に移管先コードが 1(=国会図書館)と登録されたデータがある(移管先移動の修正漏れ疑い)
管理番号 有無検査	管理番号のダブリ(同一管理番号 2 件以上)はないか？ 例) N01-12345-00 という管理番号が 2 件ある(修正漏れ疑い)
範囲外データ 有無検査	規定以外のデータが存在しないか？ 例) 分類に「台本」「原稿」以外のデータがある(入力ルール違反)
必須項目 有無検査	入力必須の項目すべてにデータが埋められているか 例) 移管先が空白、メディア/ジャンルが空白、タイトル(書誌名)が空白、等

異常データが検知された場合はその内容を確認し、「書誌情報テーブル」データを直接修正する（同時に、元となるEXCELデータにも忘れずに反映する）。データの修正を終えたら、当プログラムを再実行する。1件でも修正残がある場合、プログラムは再停止するので、以降の「データ抽出・編集」処理に進むことは出来ない。

② データ抽出・編集

データ検査をパスした後、公開用データはプログラムにより自動的に「書誌情報テーブル」より抽出され、公開サイト管理側に引き渡すデータフォーマットに編集される。抽出と編集の各処理はプログラムの設計上、実際には同時または順次に行われるが、ここでは以下、機能毎に分割し、整理・要約する。

(a) 公開書誌抽出

非公開とマークされた書誌データと分類が「資料」の書誌データを除外し、「台本」または「原稿」に分類された書誌データのみを公開用データとして抽出する。

(b) 複本同定・代表公開書誌抽出

「脚本データベース」サイトにおいて、検索の結果として、同一の書誌を複数並び表示してしまうと、限られた画面スペースの中での一覧性を損なうばかりか、利用者に余計な混乱をもたらすことにもなる（「このx冊の書誌は同じものに見えるが…現物は何か違うのだろうか？」）。

こうした状況を避けるために、ここでは、分類（「台本」「原稿」）、タイトル、サブタイトル、放送回（不明時は放送日）、台本バージョン（稿番）が同一の書誌データについては、それらを複本と同定し、管理番号の一番若いデータのみを代表書誌として公開用に選抜、その他を非公開とする。複本が複数の移管先に跨る場合は、別途定義する「公開優先順」上位の移管先書誌（の中の管理番号が一番若い書誌）データを選抜する。

(c) 公開項目抽出

非公開項目を除外し、公開項目のみを抽出する。公開除外項目には以下のようなものがある。

公開不要データ	移管時箱番号、調査メモ(社内備考)、非公開理由、等メンテ用ワーク項目
個人情報データ	寄贈者情報、入力担当者名、等項目
公開検討中データ	公開是非検討項目

(d) データ整形

EXCELでの編集時、目視では気付きにくい、下表の様な文字データの不備を自動修正する。

トリム処理	文字データ前後の不要な半角・全角スペースを除外する
スペース除去	人名等特定項目データの文字中にある半角・全角スペースを除外する
セパレータ変換	人名等特定項目データの区切り文字`、` (読点)を`,` (カンマ)に変換する
全角記号変換	`(`、)`等、特定全角記号を半角に変換する
半角記号変換	`.` (中黒)等、特定半角記号を全角に変換する

例えば、表中の「トリム処理」であるが、仮にタイトル項目に記載されたデータの後ろに見えない全角の空白スペースがある場合、「脚本データベース」上では同一のタイトルであっても別タイトルとして認識される恐れがある。これらは全て、除去しておく必要がある。

(e) 公開用項目名変換／項目データ変換

EXCEL内での項目名と項目データの表現を公開用に変換する。項目名はすべて送信用の英数字項目名に、項目データは全てACCESS内に準備した各種マスタテーブルを参照し、変換（デコード）する。

全項目名	全ての項目名を「管理番号」→「KANRI」等、英数字の送信用項目名に変換する
移管先	「移管先 CD」を元に「移管先」データを「国立国会図書館」等、正式名に変換する
放送年	「放送日」より有効な年データ(YYYY)を取得しセットする
合本	「合本」に“○”とマークされているデータを“※合本”に変換する
劣化	「劣化」に“○”とマークされているデータを“※状態の劣化により…(略)”に変換する
準備状態	移管先毎に公開準備状態を「整理中」「寄託中」「保管中」等に振り分け、セットする。
項目共通	特定項目の不明ブランクデータを`?`に変換する

(f) 表紙画像情報追加

2015年1月時点で、国立国会図書館および川崎市市民ミュージアムより受領した表紙画像（スキャン）ファイルは全て、縦解像度を同一にした「管理番号+JPG」という名称のJPG形式ファイルに統一され、事務局で保管されている。これらのファイル化された画像イメージを、「脚本データベース」書誌毎の詳細ページで文字情報と共に表示させるためには、情報を予め、公開用送信データに紐付けておく必要がある。ここでは、これまでの処理で抽出した公開用データ全件から管理番号を順に取り出し、事務局内の画

像ファイルが収められたフォルダを検索する。結果、管理番号と同一のファイル名が有る場合は、その情報をデータとして埋め込むことで、文字情報と画像ファイル情報の関連付けを行う。

◆画像情報

イメージファイル名	紐付く画像ファイルの名称(管理番号+.JPG) ‘N01-26620-00.jpg’ 等
追加イメージファイル数	合本等で中表紙がある場合の、1 書誌データに追加する画像枚数 追加画像が無い場合はブランク(Null)、有る場合は 1,2,3…(実追加枚数)

(g) 一覧既定並び順設定 (データソート)

抽出・編集を経て全ての情報がセットされた公開データを、「脚本データベース」利用者が検索を行った際、結果の一覧として最も見易い形となるよう、並び替える。

並び替えた順番は、1,2,3…と昇順になるようデータ化し、送信データ内の「SEQ」(通番)項目にセットする。「脚本データベース」は一覧表示の際、この「SEQ」データを既定の並び順とする。

※その他「マッチ度順」「新しい順」「古い順」という任意選択の並び替えオプションがある。

◆現在の送信データ内既定並び順

優先順	優先データ	優先理由
1	移管先	極力、同一タイトルは移管先毎に固まり並ぶようにする 移管先の並び順は別途定義する「公開優先順」による
2	タイトルカナ	タイトルは 50 音順で固まり並ぶようにする
3	合本	合本は非合本の後ろに固まり並ぶようにする
4	放送回	「放送回」より有効な数値を取得し、若い番号を上位とする。 不明データは「放送回」有りデータの後に固まり並ぶようにする
5	放送日	古い放送日データを上位とする
6	管理番号	若い管理番号を上位とする

③ 送信データ変換出力

前項Ⅱ.データ抽出・編集の工程を経て、公開サイト管理側に引き渡すデータフォーマットは完成したが、未だデータの実体はACCESS内の一時テーブル(テンポラリ)に収められている。

この処理では、この一時テーブル所収データを、後述の「公開データ送信」で公開サイト側サーバに送信するCSV形式ファイルに自動で変換し、出力する。変換・出力は、前項にて設定した並び順で、ACCESS内で予め定義した「エクスポート定義」を参照し、以下の仕様に準拠するよう、行う。

データフォーマット	CSV (RFC 4180)
文字コード	UTF-8
タイトル行有無	あり
文字列引用符	"(ダブルクォーテーション)
送信ファイル名	NKAC_<yyyymmdd>.txt ※<>内は送信日付

なお、送信データに関する①ファイル形式／②項目レイアウト／③項目毎ルール、等仕様の詳細は、システム設計資料「WEB公開用送信データ仕様」に整理し、公開サイト管理者の(株)キューズ・クリエイティブと認識の統一を図っている。

公開データ送信～公開データベース更新～サイト反映確認

① 公開データ送信～公開データベース更新依頼

前項までの処理により作成したCSV形式ファイルを公開サイト側サーバの所定フォルダへFTP送信する。JPG形式の表紙画像ファイルも追加分があれば、このタイミングで送信する。

これらの作業はすべてFTP転送ツールにより手動で行い、プログラムによる自動送信は行っていない（送信の正常完了ステータスを人間の目視にて確認したいため）。

※本書では、セキュリティ保持のため、データ送信先サーバアドレス・FTPアカウント等情報については、全て記載を割愛する。

送信が無事完了した段階で、公開サイト管理者の（株）キューズ・クリエイティブへ、メール・電話等にて公開データベース更新作業（送信CSVファイルのデータベースへの取り込み・表紙画像ファイルの展開・「脚本データベース」サイトへのこれら反映）を依頼する。

② 公開データベース更新～サイト反映確認

キューズ・クリエイティブより、上記依頼作業の完了通知を受けたら、「脚本データベース」サイトを実際に開き、反映結果を目視にて確認する。特に、③掲載データ件数 ②修正データの反映 ③新規データの追加 ④削除データの非掲載 ⑤表紙画像の反映を重点的にチェックする。何らかの問題を発見した場合は速やかに対応する。

3. 表紙と本文全体のデジタル化

今年度の脚本・台本のデジタル化の検討及び実務として、まず、「脚本データベース用」に約3万点の脚本の表紙のスキャンを実施した。（国立国会図書館およそ1万5千点、川崎市市民ミュージアムおよそ1万5千点）

そして、国立国会図書館所蔵のうち35冊の脚本本文全体のデジタル化を共同で実施した。これについては、国立国会図書館内（図書館送信）で閲覧可能な形にしている。さらに、著作権保護期間が切れている2作品が国立国会図書館「デジタルコレクション」に搭載され、それによってインターネット閲覧が可能になっている。

（ラジオドラマ「アイスクリーム」、「隧道」作・水沢草田夫）

以下は、作業担当者からの実施概要報告である。

今回の脚本資料電子化作業の実施概要について（報告：株式会社ニチマイ）

（1）作業内容

- ① 脚本資料の表紙部分のみをスキャニングし、画像データを作製
→ 日本脚本アーカイブズ推進コンソーシアムへ納品
- ② 脚本資料の表紙から本文全体をスキャニングし、画像データを作製
→ コンソーシアムへ納品
- ③ スキャニング作業は、全て国立国会図書館内にて実施

（2）作業工程について

- ① 当日作業分の資料と資料リストとの照合を含む、スキャニング作業前整理作業
 - ② スキャニング作業
 - ③ 画像検査作業
 - ④ 画像ファイル変換作業
 - ⑤ 最終検査及び納品メディアへの格納作業
- ※①②の作業は国立国会図書館内にて実施、③④⑤は弊社にて実施

（3）電子化仕様

- ① 解像度：400dpi
- ② 認識サイズ：原寸認識
- ③ 階調特性：24ビットフルカラー
- ④ データ形式
 - ・表紙分
シングルTIFF／PDF
 - ・表紙・本文全体分
JPEG2000可逆圧縮／JPEG2000非可逆圧縮／JPEG（標題紙部分サムネイル画像）
- ⑤ 格納メディア
 - ・日本脚本アーカイブズ推進コンソーシアム分：HDD
 - ・国立国会図書館分：DVD-R

(4) 使用スキャナー

- ① 脚本表紙スキャニング作業
コニカミノルタ社製 EPICWIN5000CMK II Lab × 1台 (弊社所有機器)
- ② 表紙から本文全体スキャニング作業
ImageAccess社製 BooKeye 4 × 1台 (国立国会図書館所有機器)
- ③ スキャナー仕様

EPICWIN5000CMK II Lab		BooKeye4	
			
出力解像度	200,240,300,400,600 (光学解像度 400dpi)	スキャニング 解像度	150,200,300,400dpi
スキャンモード	24bit カラー、8bit グレイスケール、2 値	スキャン出力	24bit カラー、8bit グレイスケール、2 値
原稿サイズ	330mm×460mm	対象フォーマット	最大 W850mm×D635mm (>A1)
サイズ	W674mm×D787mm×H918mm	サイズ	W880mm×D855mm×H1,100mm
生産国、メーカー	日本 コニカミノルタビジネスソリューションズ株式会社	生産国、メーカー	ドイツ ImageAccess GmbH

※EPICWIN5000CMK II Labの画像及び仕様はコニカミノルタビジネスソリューションズ株式会社の当該機カタログより抜粋。

※Bookeye 4 の画像及び仕様は輸入元ユニバーサル・ビジネステクノロジー株式会社の当該機カタログより抜粋。

(6) 作業実施時期・場所等

- ① 作業期間及び作業時間
 - ・表紙部分のスキャニング作業
平成26年7月14日～平成26年8月8日 (作業日数：19日間)
平成26年7月9日弊社スキャニング機材等搬入／平成26年8月18日機材搬出
 - ・表紙から本文全体のスキャニング作業
平成26年10月 (作業日数：2日間)
 - ・作業時間
9時～17時
- ② 作業場所
 - ・表紙部分のスキャニング作業
国立国会図書館B6中央ステーション
 - ・表紙から本文全体のスキャニング作業
国立国会図書館内

③ 作業体制

- ・表紙部分のスキャニング作業
スキャニング作業員1名（文書情報管理士1級）／スキャニング前整理作業員1名
- ・表紙から本文全体のスキャニング作業
スキャニング作業員1名（文書情報管理士1級）

④ 作業数量

- ・表紙部分のスキャニング作業
15,104ファイル
- ・表紙から本文全体のスキャニング作業
1,608ファイル
合計16,712ファイル

※その他

① 資料状態について

資料の一部については劣化が激しいものがあったが、全体的には良好と思われる。

② 資料取扱いについて

封筒からの出し入れ時に、封筒に資料が引っ掛かる等で資料が傷まないように留意して作業を行った。

③ 資料の管理について

資料点数の管理・・・作業前に資料確認をおこなって資料点数管理を行った。

資料と封筒の管理・・・脚本資料は封筒に入っている状態であり、スキャニング作業に当たり封筒からの資料の出し入れは1点1点ずつ行った。脚本資料本体には管理番号等ラベルが貼付されないため、封筒への戻し間違い等起こらないように実施した。

④ 他に

- ・ひとつの封筒に複数資料入っているものがある。
- ・合冊製本の場合、合冊製本の表紙が台本の表紙ではないので注意する。
- ・リストと保管されている資料の並びが今回のように一致していることが重要と考える。
(資料リストと保管されている資料の並びが一致していない作業前の読み合わせ等が困難になり資料管理が煩雑になってしまい、作業進捗にも影響が出てくる恐れがある。)

検索するキーワードを入力...

検索

同書誌を含む

検索HELP

詳細検索

トップへ戻る

HOME

サイト

こどもの病歴
ユーマ教室 ※合本

作家	土井行法
放送局	NHK
放送日	1960/7/27,8
放送回	16～37
管理番号	N01-03415-00
分類	台本
メディア	ラジオ
ジャンル	ドラマ
収録先	国立国会図書館
題名注記	※状態の変化により閲覧不可の場合があります。

※[]内の情報は当館体の館内調査による参考情報であり、書籍原本に記載のあるものではありません。
※表紙、表紙に關しては、放送日の欄の記載は「公開日」「公開日」になっております。

copyright © 2012 日本録音アーカイブス協会 All Rights Reserved.

【参考：脚本全文デジタル化の作品リスト・国立国会図書館】

	管理番号	分類	タイトル	サブタイトル	劣化状態	放送回	放送日	作家名
1	N01-00015-00	台本	向ふ三軒両隣り			1	(?)/7/1	八住利雄、伊馬春部、北條誠、山本嘉次郎
2	N01-00070-00	台本	七人の刑事	きらいな虫	脚本装丁だが中身は鉛筆書き原稿	185	(?)/7/5	光畑碩郎
3	N01-00731-00	台本	次郎物語			1	1964/4/7	横田弘行
4	N01-00957-00	台本	大戸保家		セット図付(青焼き3枚)		1961/4/22	永六輔
5	N01-01800-00	台本	午後のおしゃべり		後方頁なし	9	1959/12/15	永六輔
6	N01-09867-00	台本	天下御免	こんびら船々		1	1971/10/8	佐々木守、早坂暁
7	N01-11894-00	台本	妻たちの二・二六事件	生けるものの紡ぎ車	書き込みあり	4	1976/11/4	杉山義法
8	N01-12121-00	台本	太閤記	夢生夢死		最終回	1965/12/26	茂木草介
9	N01-12323-00	台本	河を渡ったあの夏の日々		書き込みあり		1973/10/6	山田太一
10	N01-12336-00	台本	真夜中のあいさつ				1974/11/3	山田太一
11	N01-15745-00	台本	冬の桃		追加稿あり。訂正分あり	1	1977/4/7	早坂暁
12	N01-17584-00	台本	続 事件			1	1979/6/10	早坂暁
13	N01-19666-00	台本	ニコン・ミュージック・タイム	ミュージカル・ヒット・メロディ集	青焼き		(?)/5/29~6/2	遠藤淳
14	N01-19667-00	台本	歌謡ジョッキー	歌とリンゴの二人ごと	青焼き		1963/(?)/(?)	遠藤淳
15	N01-23995-00	台本	アナタと夜のハーモニー				1970/11/1	向田邦子
16	N01-24483-00	台本	七人の刑事	時には母のないこのように		209	(?)	佐々木守
17	N01-24670-00	台本	[鐘の鳴る丘]			15	(?)	菊田一夫
18	N01-24817-00	台本	太陽にほえろ!(10)			101 111	~ (?)	
19	N01-40714-00	台本	私は貝になりたい				1958/10/31	橋本忍
20	N01-41186-00	台本	なぜなぜ座談会				(?)	
21	N01-41187-00	台本	雲雀		万年筆書き、昭和15年再放送用配役記述あり		1936/4/9	堀江林之助
22	N01-41188-00	台本	光子の窓	イグアノンの卵		130	1960/10/30	三木鮎郎
23	N01-41195-00	台本	新諸国物語笛吹童子の巻			207	1953/10/21	北村寿夫
24	N01-41207-00	台本	銀座の山賊				1962/11/10	永六輔
25	N01-45013-00	台本	隧道				1949/12/22	水沢草田男
26	N01-45044-00	台本	えり子とともに	木枯の吹く道		66	[1951]/1/24	内村直也
27	N01-45189-00	台本	[執刀]				(?)	山本雪夫
28	N01-45213-00	台本	アイスクリーム			1	1951/8/15	水沢草田男
29	N01-45221-00	原稿	OH!タカラヅカ	Rock'nRoll GRAFITY	生原稿		1983/6/18	岡田敬二
30	N01-45222-00	原稿	OH!タカラヅカ	ザ・タカラヅカハートブレイカー	生原稿		1983/6/25	岡田敬二
31	N01-45254-00	原稿	雑草の歌若い道化師たち				(?)	横田弘行
32	N01-45259-00	原稿	姿なき犯罪		ラジオ生原稿		1947/4/30	菊田一夫
33	N01-45262-00	原稿	眠られぬ夜のために		ラジオ生原稿		(?)	内村直也
34	N01-45263-00	原稿	ささやかな真実		ラジオ生原稿		(?)	内村直也
35	N01-45265-00	原稿	競馬		ラジオ生原稿		1950/3/14	田中千禾夫

4. デジタル脚本アーカイブの試行検討

(1) デジタルアーカイブの試行企画の意図

デジタルアーカイブへの動向が進展していく中、本コンソーシアムにおいても、「脚本・台本のデジタル化」に関しては、重要な検討課題のひとつになっている。

あらためて整理をしてみると、アーカイブに向け脚本のデジタル化を具体的に推進していく際の検討項目として、何を、またどれくらいの数を（「対象」の選別・量）、いかなる形で行い（デジタル化の「形態」や編集の方法）、誰に対してどういう公開するのか（「活用法」・範囲）といったポイントがあげられる。

デジタル化の「対象」については、今後の収集により結果的に10万以上の数になるであろうアーカイブ脚本に対して、何をどう選び、どれほどの量を、どれくらい計画的にデジタル化するのかということを検討しなければいけない。当然これは、経費の問題と大きく関わってくる。

「形態」については、現物のデジタルスキャンをどう行うか、そしてデジタル化した脚本をそのまま見せるのか、あるいは何らか系統立てを行うのか、ひとつのテーマで取り揃えて関連要素も足しこむ編集作業を行うのか、といったようなことが様々考えられる。

「活用法」については（「形態」とも関連してくるが）、資料を所蔵する施設のみの館内公開か、限定された施設（国立国会図書館が行う図書館向けデジタル化資料送信サービス等）の公開なのか、インターネット上でのオープンな公開なのか等、利用者に関係してくることである。ここでは意図する状況に応じて、著作権者の権利処理も派生してくる。

総じて言えば、ベースとなる脚本所蔵館での資料保存のためのデジタル化の問題と、その活用に向けた編集方針や活用企画の展開等の問題を関連付けるべきであろう。

こうした点の検討材料として、また、脚本のデジタルアーカイブの価値を検証するためのパイロットとして、脚本コンソーシアムでは、「デジタル脚本アーカイブ」企画の試行的な検討・実施に取り組んできた。

その先駆けが、一昨年度取組んだWeb上の「市川森一の世界」の制作と期間限定公開であった。このサイトの場合、脚本アーカイブズの提唱者でもある故・市川森一氏の脚本や自筆原稿がデジタル化されたpdfが閲覧できるコーナー（「脚本を読む」）、市川氏のプロフィールや年譜、プライベート写真や肉声の音源のコーナー（「市川森一の軌跡」）、親交のあった人へのインタビュー（「関係者インタビュー」）の3つコンテンツに分かれている。期間限定（3か月半）ではあるが、100冊以上の台本を無料でインターネット公開するという画期的な試みであった。（脚本閲覧部分以外のサイトは現在も公開中）

また、特筆すべきはサイト運営と同時に、市川森一脚本ドラマの上映会や展示会、企画イベントを、横浜の放送ライブラリーやNHK放送博物館で開催したことで、これにより脚本アーカイブと映像アーカイブの連携といえるものとなった。結果として、総合的にユーザーから充分好意的に評価される有意義な企画になり、またデジタル脚本活用のあり方の検証の場としても有効なものになった。



この試行から、脚本のデジタル化活用は保存としての効用の部分に繋がるだけでなく、より多くの人を利用対象とした企画として公開することで、脚本という文化資産の豊かな有効利用の実証になる可能性が見えてきたともいえる。

(2) 新たな試行企画の始動

今年度、新たなデジタル脚本アーカイブズ企画の立上げに向け、様々な検討を行ってきた。

Webサイト「市川森一の世界」の成果も踏まえた場合、新企画立案にあたって、以下のポイント等に留意をしている。

- a) 脚本の選定 ……ジャンルやテーマ、作家等をどうするか
(たとえば、「刑事ドラマの比較特集」・「70年代時代劇ドラマ集」・「芸術祭受賞作選集」・「TVバラエティの変遷」・「ラジオトークの歴史」といったジャンルやテーマによるもの、「早坂暁作品アーカイブ」・「永六輔大全集」・「横田弘行／少年少女向けドラマの発掘」・「大野靖子ドラマの世界」といった作家を切り口としたもの等の検討が行われた)
 - b) 解説部分や付加データ ……監修者やライターをどうするか
 - c) 公開範囲 ……インターネット上での公開か 施設内限定(図書館など)にするか
 - d) 全体形式 ……シンポジウム・展示会などとの連動企画にするか
 - e) 運営の連携 ……放送局や関連機関との連携はありえるか(映像協力の可能性等)
- いくつか企画検討や交渉を行った結果、デジタル脚本アーカイブズ「藤本義一の世界」(仮)を27年度内に実施すべく、既に準備を開始した。
- そのデジタル脚本アーカイブズ企画の趣旨と、基本構成要素案は以下の通りである。
(構成内容は現在未定であり、今後、一部実施内容の修正もあり得る)

☆ デジタル脚本アーカイブズ「藤本義一の世界」(仮)

<企画意図>

脚本家・小説家の故・藤本義一氏(2012年没)の作品群にスポットライトをあてる。大学在学中からラジオドラマ・舞台の脚本を手掛け、TVドラマから映画へと数多くの作品を生み出し、小説の世界へも活躍の場を広げていった。その初期作品群の脚本をより丹念にひも解き、藤本義一の根底に迫ることねらいとしたデジタル脚本アーカイブ。

◇藤本義一氏

1933年大阪府堺市生まれ。作家。大阪府立大学卒。在学中にラジオドラマ、舞台劇など数々の脚本を手掛ける。1957年「つばくろの歌」で芸術祭長編部門文部大臣賞。卒業後、宝塚映画撮影所、大映などでシナリオを数多く執筆。1965年からはテレビ「11PM」の司会者を務める。1974年に「鬼の詩」で直木賞を受賞。主な作品に「螢の宿 わが織田作」「はぐれ刑事」「贗芸人抄」など多数の著作がある。

<構成要素・案>

■藤本義一作品の世界

- ・ドラマ脚本全文を読む(デジタル化150本を目途)

※国会図書館所蔵作品:「可愛い恋人」「四角い空」「背と腹」(読売テレビ)

「それが言えない」「ささやかな記念日」「本当の泥棒の話」(NHK)

※大阪・藤本義一ギャラリーからも脚本を借用

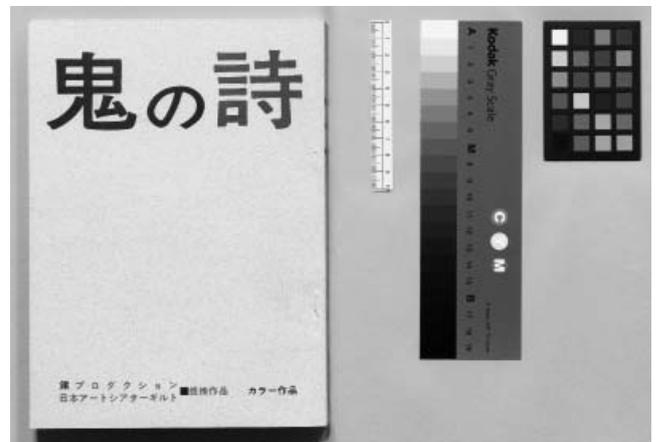
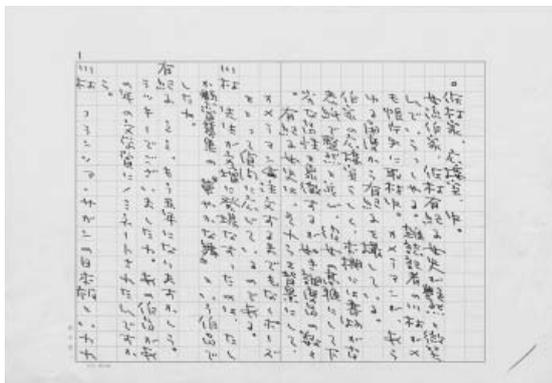
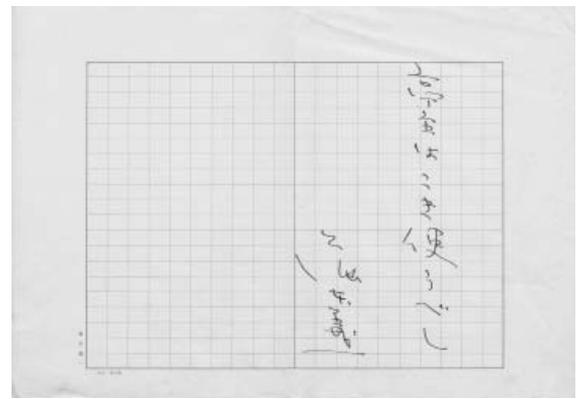
- ・直筆原稿を読む(原稿をデジタル化)
- ・「藤本義一の創作世界」分析(数名の執筆による)

■藤本義一の歩んだ道

- ・プロフィール、作品年譜
- ・藤本義一の足跡
 - ラジオドラマ・テレビドラマ・舞台、脚本家の仕事
 - 映画の道（川島雄三との関係）
 - テレビ出演者として 司会者・タレント・役者
 - 小説家の顔 直木賞作家として
- ・写真館（プライベート含み50枚ほど）
- ・交友録
 - ラジオ・テレビ界の仲間・後輩との交流コラム集

■藤本義一を語る（関係者のインタビュー、4・5名）

※サイトイメージ



IV 脚本の教育活用の模索

脚本・台本の利活用において「教育」での活用の検討・実践はかかせないものと考えられ、本コンソーシアムの開始当初から、その検討がなされてきた。

「脚本の教育活用」とは具体的にはどういうことなのか。その方法や効用について具体的に深めるべく、教育現場での活用試行を昨年度から積み重ねてきている。

昨年度に川崎市の中学校において「脚本教室」を開催した際、生徒たちが教室で実作するときに生じてくる「こういう場合どう書いたらいいのか？」という質問に細やかに対応できる教師の存在が必要であるという発想が生まれ、それを踏まえ、今年度は「教師向け」のワークショップも考案・実施したので、順に報告を行う。

1. ワークショップ① 教師向け 実施報告

ワークショップ「ドラマを描いてみよう」

日時 2014年7月31日・8月1日
場所 品川区五反田文化センター
主催 品川区教育委員会国語図書館部
講師 東多江子（脚本家）、一色伸幸（脚本家）

(1) 開催主旨

品川区教育委員会の協力を得て、教職員の夏季休業中の研修プログラムの1コマとして、「脚本とは何か」ということと「具体的な脚本の書き方」を知ってもらうための脚本セミナーを実施した。

(2) ワークショップ内容

1日目

- ① 講師の東多江子氏が執筆した「相棒season3 ゴースト～殺意のワイン」の脚本コピーを配布し、作品を一部視聴。脚本に書かれた文章がどのように映像化されているのか対比した。
- ② 脚本の書き方についての講義
 - ・基本的な書き方
表紙……タイトル、作者の名前。人物表……主役、脇役、端役。名前と簡潔な説明。
本文……（終わり、了、などで締める）等
 - ・脚本の構成要素
 - 〈柱〉 場所、時間帯を示す。一つの柱が、一つのシーン。
 - 〈台詞〉 基本的に話し言葉。叫びやため息も台詞の仲間。登場人物の性格、心理、感情を表す。人物同士の関係や葛藤を表す。物語を進行させる。
 - 〈ト書き〉 登場人物の出入り、動き、仕草。場面の情景。小道具の使い方を示す。台詞のなかにもト書きあり。原則的に、現在形で書く。
※登場人物の心理や感情を説明するものではない。物語の説明もしない。
- ③ 脚本を実作する
 - テーマ……「夏の思い出」あるいは「私の好きな人（好きだった人）」。
 - 表紙……独自のタイトルをつける。
 - 人物表……登場人物は、最低3人以上。
 - 本文……四百字詰め原稿用紙3枚（つまり3ページ）。シーン数3以上。
 - 起承転結をつけず、情景のスケッチでよい。頭に浮かんだ情景を柱、ト書き、セリフで表現することを目標とする。

④ 書き上がった原稿を見て一人ずつに寸評。寸評を聞いた後、各自修正加筆。

2日目

① NHKの単発テレビドラマ「ラジオ」の全編上映

(東日本大震災から10か月の宮城県女川町の女子高生が主人公、実話に基づく物語)

② 講師・一色伸幸氏(「ラジオ」脚本)の話

- ・ドラマ「ラジオ」を制作するに至った経緯
- ・脚本執筆に際して心掛けたこと
- ・脚本を書く際に大事なこと 等

③ 本読みと東多江子氏による作品講評

昨日書き上げた作品の作者が参加者の中から役割をキャスティングして、皆の前で演じ、芝居として成り立っているか、セリフが不自然ではないか、登場人物の心情がちゃんと表現できているかを確認。それぞれの作品について東氏が、表現しきれていない点とよく描けている点について講評を述べる。演じられた作品は全部で8本。(途中退席者と1日目のみ参加で2日目欠席した人の作品は、東氏が講評を書いて後日作者に学校経由で返送。)

「これを機に先生たちも脚本を書くことを楽しんでほしい。生徒さんたちにも脚本執筆に挑戦させてほしい」という東氏の言葉で締めくくられた。



講師 東多江子氏



講師 一色伸幸氏

ワークショップ「ドラマを描いてみよう」を実施して

脚本家 東 多江子

学校の先生方を対象に、脚本の実践授業を企画したのは、2つの理由があった。

ひとつは、台詞とト書きで成り立つ脚本形式を実際に経験することで、脚本をどう読み解くか、そのリテラシーのきっかけにさせていただきたいと思ったこと。もうひとつは、脚本とは「さまざまな他者を描くこと」であり、台詞を書くには他者の立場や気持ちを理解する必要がある。子どもたちのコミュニケーション能力が低下していると言われる昨今、脚本という手法を授業に取り入れてもらえれば、という狙いであった。

実際のワークショップは2日間。1日目は、拙作の「相棒」1話を観ていただき、実際の脚本の書き方をレクチャア。そして原稿用紙で3枚ほど、参加者に書いてもらった。3枚といえどもオリジナルのシナリオである。

私にとっては、教えるプロに教える、というプレッシャーの大きい時間だったが、みなさんいって「素直」であり「熱心」であった。演劇部の顧問を担当しておられる方も多く、生徒たちにどう教えるかは切実な課題のようにお見受けした。

書き上がった方から順番に、私が目を通しそしてまた手を入れてもらう、という流れにした。私のデスクのそばにはやがて列ができ、なんだかサイン会のようにすぐたい状況になった。何度も手を入れその都度見せにきてくださる方もいた。脚本の形式については、ほぼ全員が完璧に習得していた。また中身に関しても、参加者が台詞を書く楽しさを実感しているのがよくわかるものだった。

2日目は脚本家、一色伸幸さんに来ていただき、文化庁芸術祭大賞、菊島隆三賞を受賞したNHKドラマ「ラジオ」を上映、その後、一色さんに作品の制作秘話やご自身のドラマツルギーなどお話いただいた。ここでも参加者の皆さんは、食い入るように聴き入り、質問も活発だった。

そしていよいよ、クライマックス。前日の夜、私が必死に添削した作品のなかから、興味深いものをいくつか選んで、ご本人に発表してもらうという趣向。

ただ読み上げるのでは面白味に欠けるので、その場で「キャスティング」、先生方に演じてもらった。初見にもかかわらず、熱演名演を披露してくださる方もいて、実に楽しい時間になった。

これは楽しいだけではない。文字で書いた台詞が、人の肉声を通して表現されるときどんな風になるのか、それを体感してもらうという、意図があった。

初めて行った、中学の先生を対象としたワークショップ。2日間を合わせるとかなりの拘束時間となったが、参加者の集中力がとぎれることはなかった。しかしながら、このメニューを1日に集約した方が、もっと多くの参加者を得られたのではないかという反省は残った。いろんな地域で実践してみたい試みである。

2. ワークショップ② 中・高・大学生向け 実施報告

ワークショップ「ラジオドラマで想像力を鍛える！」

日時 2014年11月29日・30日

場所 NHK放送博物館

講師 北阪昌人（脚本家）

ゲスト 市川訓睦、小関里恵（声優）

（1）開催主旨

映像のないラジオドラマ脚本を書いて実際に演じることで、頭の中のイメージを具現化する体験をしてもらうとともに、番組制作における脚本の役割を知ってもらう。

（2）ワークショップ内容

1日目のプログラムと内容

参加者 一日目 21名（大学生11名、高校生7名、中学生3名）

① ラジオドラマ試聴

北阪氏が脚本を手がけたNHK-FM青春アドベンチャー「不思議屋薬品店」「ユニコーンの憂鬱」を聴いて、ラジオドラマとはどのようなものであるかを理解してもらう。

② ラジオドラマとは

ラジオドラマは台詞と効果音、音楽の3つの要素だけで構築されるドラマであることを説明。放送博物館のご厚意で、ラジオドラマの音響効果に使用されていた音を出す道具を動かして、「雨の降る音」「風の音」などを聴かせてもらう。映像的な情報を脚本で補う必要性を解説。画面がない分、聴き手も想像力を働かせて聴かなければならない。想像力の「想」は、相手を想う「想」と同じ文字。聴き手のことを考えて書く必要がある。

③ 本づくり

学年を超えた3～6名の4組に分け、5分間のラジオドラマの脚本制作。自己紹介の後、各グループのチーム名を相談して考える。

今回はストーリー作りよりも「耳で聴いてわかる脚本作り」が主眼。ストーリー作りに時間が割けないので、グループ内一人ずつに思いついた「5W1H」（いつどこで誰が何を何のためにした）のフレーズをつなげた文章を脚本に仕立てる。各グループがどんな話を作るのかを実作の前に発表。

「チーム東大」・・・2014年12月24日に新宿二丁目のデビルガイズのママと常連さんが疲れたから南極に引っ越しをした。

「チーム女子力」・・・1963年5月19日に宇宙で警察官がむしゃくしゃしていたから歌うことで殺人を犯した。

「チーム二日酔い」・・・戦国時代に人類が衰退しかけた街で、海の神様がお酒の勢いで情熱的に樹を植えた。

「チーム犬の行方」・・・秋の夜小学校のグラウンドで、犬がモテたかったから熟した桃を出荷した。

その後、簡単に脚本の書き方（書式を説明）を説明。書き上げたものを実際にチームで演じることを、面白いラジオドラマに聴こえることを目標に、書き始める。

終了時間が迫ってきたので、途中まで書き上げた脚本を声優2人が演じ、講師が耳で聴いて分るドラマにするために以下のポイントをアドバイス。

- ・SE（効果音）だけで状況は説明できないので、どんな音かをセリフ中で説明するようにして補足する。
- ・登場人物の誰が喋っているのかが、声だけでは区別し辛いので、名前を呼び合う、セリフに特徴をつけるなどしてセリフを区別する。

これらのアドバイスを受けて、翌日も各チームで脚本を最後まで書きあげて演じるようになった。

2日目のプログラムと内容

参加者 二日目 27名（大学生9名、高校生7名、中学生11名）

① ラジオドラマ試聴

北阪氏が脚本を手がけ、市川訓睦氏出演のTOKYO-FM「日産 あ、安部礼司」の冒頭5分間と、同じく北阪氏脚本、小関里恵氏出演のラジオドラマ『ルームナンバー0033』を試聴。講師から情景をリスナーが想像しやすいように、状況説明として特徴的なフレーズを書きこみ過ぎないように一言セリフやナレーションに折り込むとよいというアドバイス。

② 脚本作り

昨日のチーム毎に書きかけの脚本を完成させる。2日目のみ参加「チーム中学生」は講師が書き方等を説明後、「5W1H」（いつどこで誰が何を何のためにした）のフレーズをつなげた文章を作り、脚本完成。

「チーム中学生A」・・・去年の春病院で、一人の少女が頭がおかしくなってメロンパンを食べた。

「チーム中学生B」・・・5月29日遊園地で警備員が気持ちが昂ぶったので吐きそうになりながら過去の恋人に別れを告げ新しい道を歩き始めた。

③ 発表

6チームが配役を決めて、完成した脚本を演じて発表。

参加者全員の投票で優秀賞1作を選んだところ、2日目参加の「チーム中学生B」が多数の票を得て優勝。

<優秀賞に対する講師評>

- ・最初に「チケット2枚」と言ってから「やっぱり1枚」と言い直すセリフに男の孤独な心象風景がうまく描かれていた。「チケット売り場」「ピンク色のコーヒーカップ」というフレーズで遊園地という場所が特定でき、情景が目浮かぶように書きこまれている点が評価できる。

<見学：実践女子学園演劇部顧問・武本教諭評>

- ・「5W1H」の厳しい縛りの中で筆が止まってしまうのを見て、生徒たちが普段から校則等様々な規則で縛られていることを実感した。今日は、その縛りの中から自由な発想で表現する方法を学べて生徒たちには貴重な体験になったと思う。



講師 北阪昌人氏

『烏肌が、立ちました・・・』

脚本家 北阪昌人

その結末に、烏肌が立ちました。

ワークショップのラスト。みんなの前で、自分たちが書いたラジオドラマ脚本を自分たちで演じてもらうという演習で、5組あったチームの中、最年少の女子中学生チームが圧倒的な票を獲得して見事一位になったのです。

結果発表後の彼女たちの笑顔を見ていて、想像して創作することの素晴らしさをあらためて知りました。

僕自身が、参加してくれた40名近い学生さんたちに感謝したい気持ちでいっぱいになりました。

今回の二日間にわたるワークショップ。三つのテーマを考えました。

まず最初は、音だけで想像する、音だけで表現するというラジオドラマの基本を知ってもらうというもの。参加してくださった若者たちは、中学一年生から大学四年生まで。みんな物心ついた頃から携帯電話を知っている世代です。

携帯電話こそが、ラジオドラマです。音だけで相手がどこにいて、どんな状況なのかを瞬時に類推する。

また、携帯のメールは、すなわち、ラジオドラマのセリフです。

少ない文字数でいかに相手に思いや体験を伝えるか。

このテーマでは昔懐かしい、音響効果の道具（あずきを揺らして波の音を出す、布をこすって風の音を出すなど）を実際に体感してもらいました。

数々の道具は、NHK放送博物館の川合館長にお願いしてお借りしました。

また、ラジオドラマ自体を聴いたことがない参加者も多数いると想定し、僕が書いた15分のラジオドラマを試聴して、音だけで想像する演習に使いました。

テーマの二つ目は、実際に書いてみよう、です。

ラジオドラマが音声による映像表現であること、セリフと音響効果と音楽だけでできていることなどを説明しました。

細かい書き方より、まずは想像の羽を広げてほしいと思ったので、すぐに課題を出しました。なるべく全員が参加できるような課題は何か。

各班が、5～6名だったので、5W1Hをそれぞれに考えてもらい、奇想天外な文章をつくってもらい、それをラジオドラマ脚本にする、という方策にしました。

いつ、どこで、誰が、何を、どのように、どうした。

まわりのひとと相談しないで、どんなに文章が変になってもかまわない。

発想の自由さこそがラジオドラマの醍醐味であることを知ってほしかったのです。

実際、あがってきたものは、全て笑いが起きるものでした。

たとえばある大学生のチームは「犬が、秋の夜、小学校のグラウンドで、モテたかったから、熟した桃を出荷した」。

このチームは、犬がある少女に恋をして彼女に熟した桃を届けるまでの物語をアクション大作にまとめあげました。

さて、三つ目のテーマは、演じてみよう、です。

脚本は誰かに演じてもらって初めて成立するものです。またひとりよがりのセリフでは、聴いているひとが想像できません。自分たちで書いたものを自分たちで演じることで、見えてくるものがきっとあると思いました。

各班でリーダーとチーム名を決め、話をまとめあげたら、今度は配役です。

脚本をみんなの前で演じ、各人、どの班がいちばん面白かったかを投票して一位を決めようと思いました。競うことが大事というより、ゴールを明確にすることで団結力が生まれると考えました。

各班の脚本づくりに関しては、テーブルを回り、日本放送作家協会の三原さんや入山さんにもお手伝いいただき、アドバイスしました。

また、演じることの見本として、僕がお世話になっている俳優さん（市川訓陸さん、小関里恵さん）にもご協力いただきました。

最年少の中学生チームは、あがってきたストーリーがかなり大人っぽいものでした。

遊園地にある男がひとりでいたら、昔の彼女が家族ときていた、というお話。

難航しました。不穏な空気。このチームはお話が完成しないかなと思いました。

とにかく書いて隣のひとに回していく、というやりかたをアドバイスされ、少しずつ、物語が動いていきました。

そしていよいよ発表の時。各班、熱のこもった演技が続きます。終わるごとに僕から簡単な講評とアドバイスを伝えました。

五感に訴えかけるセリフやモノログがいかに伝わりやすいか、など。

でもときにドキッとするくらい素晴らしい文章もありました。

たとえば、「手術室の赤いランプが、生き物のように私に迫ってきた」。

色や、触感を加えることで、想像が伝わりやすくなることを本能的に知っている、僕はその扉を開けてあげるだけでいいんだなあ実感しました。

白熱した演技が続き、いよいよ大トリの登場です。

女子中学生チーム。彼女たちは、素晴らしかった。こんなに短い時間でよくぞここまでという完成度。

参加者からの惜しめない拍手に、彼女たちが笑顔になりました。

かすかな自信が垣間見れて、こちらまでうれしくなりました。

その様子を見ていて、想像力を鍛えようというお題目が少し違っていただと思いました。

鍛えるというより、解放してあげる、箱を開ける、窓を開く。

もともと持っているものを、引き出すだけでこんなにも、いい笑顔になるのだと勉強になりました。

ラジオドラマは音だけで表現するので窮屈。参加者のみなさんに、そんな印象があったかもしれませんが、窮屈だからこそ、ふだん使わない力が必要になる、ということを感じてもらえればうれしいです。

もっともっといろんなアプローチで、今年90年になるラジオドラマの素晴らしさを伝えていければいいなと思います。

V 脚本アーカイブズ検討委員会と継続する基本課題

脚本の保存・公開に関する進展は、関係機関・団体の代表参加による「脚本アーカイブズ検討委員会」での議論や検討、活動におけるルール等の検討・オーソライズが前提となってきた。

新たなステップにおいて、今年度も計3回の脚本アーカイブズ検討委員会を開催し、脚本アーカイブで継続している課題に関して段階的に検討を行ってきた。

以下が事務局で整理をした、脚本アーカイブの前提としての方針と、継続している様々な「基本課題」である。これらの克服が、今後のコンソーシアム活動のキーとなる。

1. 「脚本の収集・保存」の方針

(1) 脚本の保存場所

- ① 脚本の保存については、国立国会図書館、川崎市市民ミュージアム、東京国立近代美術館フィルムセンター、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館、NHK放送博物館をベースに、全国の公共図書館・文学館、大学図書館等で行なわれ、それぞれが連携する「分散・連携型」アーカイブになる。
- ② 各放送局ライブラリーでの脚本アーカイブ体制との連携について検討していく。

(2) 収集基準

- ① 1980年代までの脚本を優先して収集・保存する。収集は著作者自身（放送作家）所蔵の脚本を優先する。90年以降の脚本収集については、今後に判断をしていく。

(3) デジタルアーカイブ等

- ① 脚本の劣化状況を把握しながら、デジタル化の優先順と方法を検討・実施していく。
- ② 放送局を含む映像アーカイブとの連携も視野に入れる。

< 「収集・保存」の基本課題 >

■各所蔵機関・施設との連携をどう進めるか。

・「連携」の具体方法は？その検討をどういう形で進めるのか？

■1980年代までの脚本の新たな収集・保存をどう行うのか。

・保管場所をどうするか？

・脚本以外の資料の扱いをどうするか？

■脚本のデジタル化をどう進めるのか。

・デジタル化の基準は？デジタル化の判断の実施は、誰がどう行なうのか？

・どこの予算で行なうのか？

2. 「脚本データベース」の方針

(1) 脚本データベースの構築

- ① コンソーシアムを経由した脚本のデータベース整備を進める。
- ② 脚本所蔵機関の横断検索ができる「脚本総合検索サイト」の実現に向け検討を行う。
- ③ 前提として書誌データの基準フォーマットの作成を行う。

< 「脚本データベース」の基本課題 >

■ 書誌データ入力において不明部分の扱いをどうするか。

- ・ データを他で確認する方法と基準は？ どの範囲までのデータを必要とするか？

■ 「脚本総合検索サイト」の検討と準備をどうするか。

- ・ 誰が設計を行ない、制作・運営はどうしていくのか？
- ・ 書誌データフォーマットの運用手続きをどうするか？

3. 「脚本の公開・活用とその促進」の方針

(1) 公開方法の整備

- ① 脚本内の書込みや個人情報について扱い方のガイドラインを策定する。
- ② 非公開扱いとすべき脚本をどうするのか検討を行なう。

(2) 活用のあり方について

- ① 脚本の「教育活用」の方法について様々な試行と検証を行なう。
- ② 公開脚本の一般向け活用に関して様々な工夫と検討を行なう。

(3) デジタル脚本アーカイブ活用の推進

- ① デジタル化による活用方法や有効性の検証を行なう。

(4) 脚本アーカイブズの利用促進

- ① 脚本の一般公開をより有効な形で広く告知し利用促進を行なう。

< 「公開・活用」の基本課題 >

■ 教育活用や一般活用、デジタル脚本アーカイブ等、どう試行を行なうのか検討する。

- ・ 「教育活用」ワークショップの具体的な試行方法は？
- ・ 「市川森一アーカイブ」のようなサイト制作の可能性は？

4. 「アーカイブ脚本の権利処理」の方針

(1) 権利処理の体系整備

- ① 権利者への権利処理に関して、実践を踏まえた効率的なフォーマット整備を行なう。
- ② デジタル化や公衆送信についてなど、先々の権利処理の方法について検討を行なう。

(2) オープン状態の脚本の問題

- ① 権利者連絡先等不明の状況について、あらためて確認を行なう。
- ② オープン脚本に関する扱いについて目途をつける。

< 「脚本の権利処理」の基本課題 >

■ オープン作品の扱いに関して、どこまでどう対応するのか。

【平成26年度「脚本アーカイブズ検討委員会」の実施結果】

- ① 平成26年度第1回 平成26年6月6日 (於・日本脚本家連盟会議室)
- 議題1 脚本・台本の一般公開の状況報告と検討
 議題2 コンソーシアムの今年度活動の概要と検討
 議題3 あらたな脚本・台本の収集に関して
 議題4 デジタル脚本アーカイブの企画検討について
- ② 平成26年度第2回 平成26年10月15日 (於・日本脚本家連盟会議室)
- 議題1 脚本公開の状況と今後の収集について(アンケート案の検討)
 議題2 脚本データベースの改修、および教育活用の試行検討
 議題3 次期デジタルアーカイブ企画、シンポジウム等
 議題4 その他の情報
- ③ 平成26年度第3回 平成27年2月10日 (於・日本脚本家連盟会議室)
- 議題1 平成26年度の活動概要と総括
 議題2 来年度以降の収集計画(アンケート結果報告含む)の検討
 議題3 新デジタル脚本アーカイブ企画、シンポジウム等について
 議題4 その他の情報

【今年度の「脚本アーカイブズ検討委員会」 全参加者リスト】

所属	氏名	役職
東京大学	吉見 俊哉	大学院情報学環教授
日本大学	上滝 徹也	名誉教授
国立国会図書館	佐藤 従子	利用者サービス部 音楽映像資料課課長
日本脚本家連盟	金子 成人	理事・著作権委員長
	柳井 克朗	事務局長
日本シナリオ作家協会	佐伯 俊道	常務理事・著作権部長
日本放送協会	阿部 康彦	NHKアーカイブス
	川合 淳志	放送博物館館長
日本民間放送連盟	大寺 廣幸	事務局長
	斎藤 信吾	ライツ・コンテンツ部長
放送人の会	北村 充史	事務局長
放送批評懇談会	橋本 隆	副理事長
川崎市市民ミュージアム	大野 秀人	副館長
	河野 正伸	総務課
日本放送作家協会	田中 格	常務理事
	香取 俊介	理事
放送番組センター	鈴木 貴尚	業務課
東京国立近代美術館フィルムセンター	岡田 秀則	主任研究員・情報資料室長
日本動画協会	植野 淳子	プロデューサー
早稲田大学坪内博士記念演劇博物館	岡室 美奈子	館長
	土屋 紳一	デジタルアーカイブ室
日本脚本アーカイブズ 推進コンソーシアム	山田 太一	代表理事
	石橋 映里	事務局長
	三原 治	事業局長
	入山 さと子	収集・保存担当主任
文化庁(オブザーバー)	中臺 正明	文化部芸術文化課支援推進室メディア芸術振興係主任
	牛島 こずえ	文化部芸術文化課支援推進室メディア芸術振興係
総務省(オブザーバー)	中里 和宏	情報流通行政局情報流通振興課
法律アドバイザー	福井 健策	弁護士 日本大学芸術学部客員教授
	中川 隆太郎	弁護士

Ⅵ コンソーシアム主催シンポジウムの開催

脚本アーカイブズ事業においては、その理解促進に向けた周知に関する活動もまた大きな使命といえる。本コンソーシアムでは一般社団法人立上げの前段階から、毎年「シンポジウム企画」を行ってきた。今年度で5回目となるシンポジウム企画は、3年前にも国立国会図書館新館講堂にて実施した。そして、そのシンポジウムの開催が、国立国会図書館への寄贈につながる大きな一歩となった。今年度は、デジタル化の潮流の中で、さらなる脚本アーカイブズ活動の進むべき道を切り拓く契機になったと推察される。以下、概要と実施レポートを報告する。

1. 脚本アーカイブズシンポジウムの概要

日 時 2015年3月18日（水）13時半～17時
場 所 国立国会図書館東京本館 新館講堂

- ・開会挨拶 山田太一（日本脚本アーカイブズ推進コンソーシアム代表理事）
- ・共催挨拶 有松育子（文化庁次長）
- ・共催挨拶 大滝則忠（国立国会図書館長）
- ・プレゼンテーション
「国立国会図書館所蔵の脚本・台本」について
佐藤従子（国立国会図書館利用者サービス部 音響映像資料課長（当時））

■第1部 座談会

タイトル『継承されていく脚本の「魅力」～アーカイブの価値とは』

国立国会図書館で公開されている1980年以前の脚本は、放送された映像・音声の保存がないものも多く、重要な資料。脚本の魅力や価値について、当時から放送に関わっている出演者、制作者が語り合った。

参加者 三田佳子（女優）
嶋田親一（プロデューサー・演出家・元フジテレビ）
中村克史（テレビプロデューサー・演出家・元NHK）
山田太一（脚本家・小説家）
司 会 岡室美奈子（早稲田大学坪内博士記念演劇博物館）

■第2部 パネルディスカッション

タイトル『文化資源を活かすためのデジタルアーカイブとは？～脚本アーカイブズを中心に』

文化資料アーカイブが大きく推進されていく中、デジタル時代の文化資料保存の可能性について脚本・台本を中心にディスカッション。デジタル脚本の新たな利用方法、デジタル化における諸問題についても展開。

パネリスト 高野明彦（国立情報学研究所教授）
福井健策（弁護士、日本大学芸術学部客員教授）
大場利康（国立国会図書館 電子情報部電子情報企画課長）
司 会 吉見俊哉（東京大学大学院情報学環 教授）

第1部 座談会

『継承されていく脚本の「魅力」 ～アーカイブ価値とは』

参加者

三田佳子（女優）

嶋田親一（元フジテレビプロデューサー・演出家）

中村克史（元NHKプロデューサー・演出家）

山田太一（脚本家・小説家）

司会

岡室美奈子（早稲田大学演劇博物館館長）

岡室 最初に、登壇者の皆さまを紹介させていただきます。嶋田親一さんは、フジテレビの開局時からプロデューサー・ディレクターを務められ、名作「6羽のかもめ」（1974年放送）など多数のテレビドラマを制作し、映画や舞台のプロデュースでも活躍し、新国劇の最後の社長も務められました。

女優の三田佳子さんは、テレビ以外にも映画や舞台など数多くの作品に出演され、国民的大女優と申し上げるにふさわしい活躍をされています。ご自身が出演された膨大な作品の脚本をほとんど保存してこられ、それらのうち800冊を2009年に脚本アーカイブズに寄贈されました。

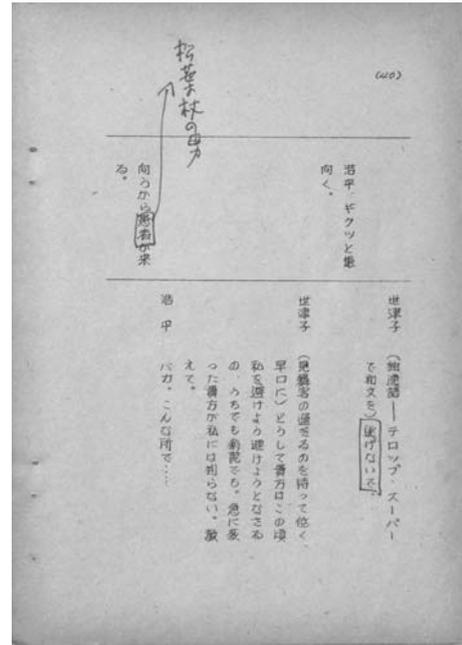
中村克史さんは、NHKで多くのドラマを手掛けられ、ディレクター時代は山田太一さんとコンビを組み、土曜ドラマ「男たちの旅路」（1976年～82年放送）、大河ドラマ「獅子の時代」（1980年放送）などを制作し、多くの賞を受賞されています。

山田太一さんは、日本を代表する脚本家のお一人で、「岸辺のアルバム」（1977年放送）、「ふぞろいの林檎たち」「早春スケッチブック」（共に1983年放送）など、みなさんご存じの数多くの名作を手がけてこられました。本日はこのような素晴らしい方々にご登壇いただき、脚本の魅力について語っていただきたいと思います。

では最初に、嶋田さんからお話を伺います。1958年にフジテレビで放送されたドラマ「執刀」の脚本（国立国会図書館へ寄贈）のお話から伺っていきます。これはフジテレビが開局するときの試験放送で流れた作品で、わずかな方しかご覧に

なっていない「幻のテレビドラマ」と言えますね。

嶋田 当時はフジテレビが市ヶ谷の河田町にあり、隣の東京女子医大に心臓外科の世界的権威である榊原任先生がいらっしゃったので、医療部分は榊原先生にご指導いただきました。脚本は劇作家の北条秀司の高弟だった山本雪夫という方が書いたのですが、彼もテレビに憧れていて、きちっと台本を仕上げました。



「執刀」の脚本とテロップ

「執刀」を題材に選んだのは、スーパーインポーズ（字幕）入りの映像を作りたかった。「映像を撮るなら映画みたいなものを作りたい」という願望があって、「スーパーインポーズを入れて、かっこよく見せたい」と考えたわけです（笑）。医療ドラマなら医者との会話の中にドイツ語が出てくるので、スーパーインポーズを入れられますから。映画に憧れていたテレビ屋のささやかな夢でした。

その台本が今、国立国会図書館にこういう形で展示されるとは、感激ですね。関係者が生きていたらみんな喜んだと思います。

岡室 では次に、三田さんにお話を伺いたと思います。実は嶋田さんは、三田さんの芸名の名付け親でいらっしゃるんですよね。

三田 そうなんです。私は東映で映画女優としてデビューする前から、これから旗あげする劇団に迷い込みまして。そこに嶋田さんと、脚本家の松木ひろしさんがいらっしゃったんです。私は当時、本名の「石黒嘉子」という名前でお芝居に出たりしていたんですが、お二人に「もう少しやさしい名前のほうがいいんじゃないの」と言われまして。そこで「じゃあ名前をつけてください」とお願いしたんです。



三田佳子氏

嶋田 （名字のほうは）慶應大学が好きだったんだよね。

三田 そう（笑）。私のいた女子美術大学の附属高校の文化祭に来るのは慶應大学の学生が多かったから、お二人に「大学はどこが好き？」って聞かれて「慶應です」って言ったんです。それで「慶應だと三田だな」なんて言ってるうちに、私が「み」って音がきれいだなって思い始めて、それで「三田佳子」って名前をつけていただきました。その節はありがとうございました、今日まで「三田佳子」でやっております（笑）。

岡室 その嶋田さんがプロデュースを担当し、松木さんが脚本を手がけ、三田さんが出演して、1969年から70年にかけてフジテレビ系で放送され

たドラマが「アーラわが君」ですね。この脚本も三田さんが所蔵されていたものですが、もう46年前の本ですから、たいへん貴重ですね。

三田 私は当時27、8歳だったんですが、このドラマに出たときは、町を歩くと「三田さん」ではなく、役名の「綾乃さん」って呼ばれるようになりました。それが印象的で、テレビはあの頃からものすごい力があつたんだと記憶しています。……あら、台本に「によっきり顔を出して笑う」「あーら、と言え」なんて書き込みがある（笑）

嶋田 でも、三田さんはこの脚本をよく保存していましたね。

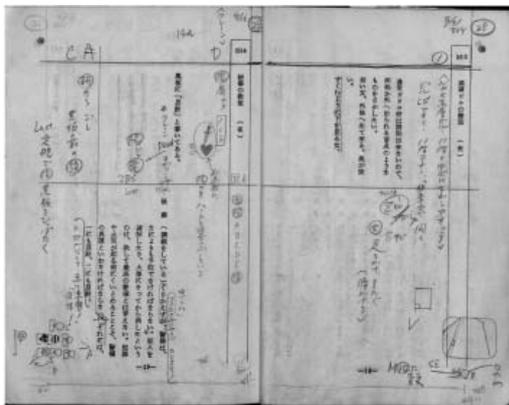
三田 はい、私にとって脚本は命ですから。出演作品の脚本は1000冊近く、すべて保存してきました。その中から少し手元に残したものもありますが、ほとんどは2009年に脚本アーカイブズに寄贈しました。そのときは自分の命をはぎ取られるような、ものすごく淋しい思いがして、「これは絶対に私の心、私の命なんだ」と感じました。今ではこうして国の保存機関である国立国会図書館という場所に、私のつたない書き込みなども一緒に脚本を残すことができ、本当にありがたいと思っています。

岡室 三田さんの脚本にはたくさんの書き込みがあり、この書き込みがまた、たいへん貴重な資料となっています。脚本の中には書籍などの形で出版されたものもありますが、こういった書き込みによる情報は唯一無二のものであるため、その意味でも（現場で使われていた）脚本の保存というのは、非常に重要なことだと思います。

中村さん所蔵の脚本にも几帳面な書き込みがたくさんあって、ある種の演出ノートになっていますね。中村さん、これらの作品についてお話をお聞かせいただけますか？

中村 まず鶴田浩二さん主演のシリーズ「男たちの旅路」ですが、脚本の表紙にタイトルが別の紙で貼りつけてあるんですね。実は最初に山田さん

と企画を立てたときのタイトルは「俺たちの旅路」だったんです。ところが準備中に、民放で「俺たちの旅」というドラマ（脚本・鎌田敏夫、主演・中村雅俊、1975～76年放送）が始まってしまった。それでこちらは「男たちの旅路」に変えたんです（笑）。



岡室（写真を見て）この脚本の書き込みは、演出ノートのような形で書かれているんですか？

中村 この書き込みの部分は、僕がちょっとイタズラして書き足したものです。ここは、ガードマン会社に新人として入社してきた水谷豊さんや森田健作さんらの若者の研修期間のシーンで、グラウンドで走ってしごかれた後、前田吟さん演じる中間管理職の先輩に座講で絞られるシーンです。先輩が「ガードマンは忍耐が大事だ、忍とは心の上に刃と書く」と説教している中、若者達はその話をぜんぜん聞かないで、ノートにハートマークの上にナイフのイタズラ描きしている。それで最後に先輩が「一に忍耐、二に忍耐、三四がなくて」と言うと、脚本では生徒たちが「五に忍耐」と答えるんですが、そこを僕は「五は肉体」と変えてしまったという、そんなイタズラをしてるんですね。単純なダジャレ、これは山田さんが一番嫌うことです（笑）。

岡室 山田さん、この演出はいかがでしたか。

山田 いや、面白いと思いましたよ（笑）。

岡室 でも、そういったことがわかるのも脚本が残っていればこそですね。私たちは「山田さんの脚本は現場で変更されないものだ」と思い込んで

いますが、実際はこのような変更もあったわけですね。加えて中村さんがどのように演出をなさったかもつぶさにわかりますから、これは本当に貴重な資料であり、お宝だと思います。

では山田さん、今お話に出たような三田さんや中村さんとご一緒のお仕事について、何か思い出がありましたらお聞かせいただけますか。

山田 そうですね、三田さん主演の作品では、まず「花の森台地」（1974年放送）。これは当時流行り始めた「建売住宅」を舞台にしたドラマです。社運を賭けて売り出した建売住宅がなかなか売れないので、社長が社員を家族ごとモデルルームに住まわせて見学に来たお客さんに「この家でこんなに楽しく暮らしています」というのを見せて、家を売ろうと考えるわけです。だからそこに住む家族は、ものすごいケンカをして険悪になっても、お客さんが来たらハッピーな家族を演じなきゃならないという、コメディ仕立てのドラマです。それから「緑の夢を見ませんか？」は、津川雅彦さん演じる亭主が仕事でミスして破産して、首吊って死んじゃって、残された妻の三田さんが義母や友人たちと一緒に「男は頼りにならないから、女だけでペンションをやろう」と決意して、伊豆高原でペンションを経営するという、女たちが努力する話を書いたものです。



山田太一氏

三田 先生の台本は、台詞とト書きがいっぱいなんです。登場人物の所作が「目を上げる」とか「ちょっと気にして右手を見る」とか書いてある

んですが、その前後にある台詞とその動きが一つにならないと、表現が違ってきてしまう。たとえば「『そうね』と言って右手を見る」のような短い台詞と動きでも、そこに書かれたすべてが演技となり、脚本の軸になっている。だから山田先生の作品は、誰が見てもすごくよくわかるんです。たとえ中村さんが現場で少々イタズラをしても、山田作品の「枠」を超えることは絶対がない。先生以外の役者や演出家がイタズラしようと思ってできない、それが先生の脚本の良さであり、すごさなんです。

山田 撮影現場で演出家や俳優がその場で思いついたことや、気が利いたようなことを言い出して、それを許していたらぐちゃぐちゃになって作品の形が壊れてしまいます。だから僕は、演出家や俳優の皆さんが無理してくださってることは百も承知で、知らん顔して書かせていただきました。(笑)

三田 よくドラマに対して「山田作品」とか「橋田壽賀子作品」という言い方をしますが、山田先生や橋田先生の脚本には、作家の生理みみたいなものが出ています。私たち役者が、その台詞を変えたら、先生の作品じゃなくなっちゃう。私は常にそういう思いを持っているので、脚本に書かれた台詞は一字一句変えずに演じています。

岡室 橋田先生の脚本といえば、台詞量が膨大なことで有名ですね。三田さんは、橋田さんの作品についてはどのように演じられていましたか。

三田 橋田先生の脚本は、山田先生とは真逆なんです。ト書きはあまりお書きになっていないんですね。そして台詞の数がもうすごく多い。でも私がそこで(脚本に)負けると、橋田先生の作品ではなくなってしまう。俳優さんの中には「この台詞は3回言ってるから、1回は取ってもいいんじゃないか」なんて言う方もいましたが(笑)、私は違うんです。同じ台詞が3回出てくるなら、それによって橋田先生の作風が出てくるのであって、1回減らしたらぜんぜん違うものになってし

まうと思います。

あと、私が「を」のところに線を引いているのは、「てにをは」を間違えないように印をつけているんです。とにかく私は「作家の先生がお書きになる言葉は、役者にとって直してはいけないものなんだ」と思って、ずっとその信念を貫いてきました。この間(2011年)、宮藤官九郎さんが脚本を書かれた「うぬぼれ刑事」というテレビドラマで西田敏行さんとご一緒したんですが、西田さんは自分流のアドリブがとてもお上手で、脚本から3倍くらい違う台詞になるんですね(笑)。私はそれに合わせながらも、脚本の通りにやっている。最近は脚本もインターネットで読めたりしますから、それを見た視聴者の方が「三田佳子が(脚本から)ひと言も変えてなかった」と書いていたことを知ったときは、「そうよ、私はすごいでしょ」って、そこだけは力を込めて自慢しちゃいました。

岡室 三田さんはそうやって幅広い脚本家の方とお仕事をなさりながら、すべての台詞を一字一句違わずに覚えていらっしゃる。噂によると、三田さんは台本を全部手で書き写しておられるそうですね。

三田 きっかけは2006年に、唐十郎さん作の「秘密の花園」という舞台をやったときです。台詞が難しいんです。散文詩といえは聞こえはいいんですけど、「あれは台詞でしょうか？」という世界でしたので。しかも二役、まったく真逆のキャラクターで、どうやって覚えようかと思ったとき、「もう書くしかない」と。自分の台詞だけでなく人の台詞も一から十まで全部、写経の如く書き写しました。そうしたら、唐さんの台詞の中身が解読できて、覚えられるようになったんです。それ以来、台本の写経を続けています(笑)。

中村 今の三田さんのお話で、山田先生のエピソードを一つ思い出しました。山田先生が最初にNHKで書かれたドラマは連続テレビ小説「藍より青く」(1972年放送)でしたが、先生は原稿用紙に脚本を書かれるとき、台詞を声に出しながら執筆されていました。そのとき「そうか、脚本家

の方も、最終的に台詞を口に出したとき、どういう意味で伝わるかを考えて、それを確認しながら台詞を書かれてるんだな」と思いました。

岡室 山田先生は「男たちの旅路」のほかにもジョージ・チャキリス主演の「日本の面影」（1984年放送）など、中村さんと組んでたくさん名作を作られてきましたが、中村さんとのお仕事で思い出に残っていることはありますか？

山田 今お話に出た「藍より青く」のときは、毎週NHKで打ち合わせをしていたんですが、あるとき打ち合わせの時間になっても、誰も部屋に来ないことがありました。理由はわかっていました。その日は浅間山荘に警官隊がいつ突入するかわからない日だったんです（笑）。

岡室 テレビドラマの記憶って、そういった社会背景や文化などの記録と一緒に存在するところが、すごく面白いですよ。そのあたりは嶋田さん、いかがですか。

嶋田 僕がフジテレビで作った「6羽のかもめ」というドラマは、倉本聰さんの原案によるものなんですが、あれはその年（1974年）の前半に倉本さんが関わったNHK大河ドラマ「勝海舟」でトラブルが起きた直後に書かれたもので、テレビ業界の裏話なんです。アンチNHK的な内容だったので、出演したいという方もたくさんいて、NHKの方もいっぱい見ていたそうですよ（笑）。あの作品は、倉本さん自身が「最高傑作だ」と仰ってますから、やっぱり強い思いがあったんじゃないですかね。

中村 当時のNHKは倉本さんに加えて、連続テレビ小説「鳩子の海」（1974年放送）の林秀彦さんや、水曜ドラマの脚本を書かれていた高橋玄洋さんなど、脚本家の方々とスタッフとの関係がぎくしゃくしてましてね（苦笑）。昨年亡くなられた元NHK会長の川口幹夫さんがちょうどドラマ部長を務められていて、「これは何とかしなきゃ」ということで、翌1975年に「土曜ドラマ」枠を立

ち上げたんです。それまではNHKドラマといえば、1年または半年の連続ドラマか単発ドラマしかなかったのを、4本シリーズ（同一作家の原作や同一テーマの作品を4本続けるシリーズ）のような深い内容の作品を、しかも作家第一主義で作ることになった。その土曜ドラマ枠で、初めて小説家ではなく脚本家を冠にして作ったドラマが、1976年の「山田太一シリーズ・男たちの旅路（第1部）」で、ここから脚本家シリーズが始まりました。この頃にはNHKの中でも「脚本が大事だ」という意識が高まって、委嘱料の改訂なども行われました。そして同年には新しく「ドラマ人間模様」の枠も作られて、翌年は早坂暁さんが脚本を書かれた名作「冬の桃」で、三田さんが主演されています。



中村克史氏

岡室 1970年代の山田さんや倉本さんのご活躍によって、日本には素晴らしい脚本が生み出されていったんですね。最近は脚本家を冠にしたシリーズはあまりなくて、ちょっと淋しい気もしますが、山田先生、そのあたりはいかがですか。

山田 僕は（脚本家がオリジナル作品を書きにくくなっているという現状には）もう憤慨してます（笑）。だって脚本家は「自分の物語」を書きたいから脚本家になったわけでしょう。そうやって脚本という仕事に賭けているのに、他人のマンガやベストセラーの脚色ばかりさせられている現代のドラマのあり方は、すごくゆがんでいると思います。僕は川口幹夫さんが築いてくださった「土曜ドラマ・作家シリーズ」と「ドラマ人間模

様」で、（自分の名前で作品を書かせてもらって）どれだけありがたかったかわかりません。今のドラマはそういうところが本当によくないと思っています。

岡室 それでは次に「脚本を保存していくことの意味」について、改めて皆さまのご意見を伺えればと思います。

嶋田 私は仕事のスタートが新国劇なんですけど、あそこは「脚本が大事」という考え方なんです。新国劇は世間では「役者の劇団」と誤解されてきましたが、実際はそうじゃないんです。劇作家の北條秀司・菊田一夫たちが関わっていたし、大作家では長谷川伸とか、後には池波正太郎も座付き作家みたいな感じで脚本を書いていて、まずこの諸先生方の脚本が先にあった。私も「初めにホンありき」という教育を受けていて、だから映像の世界に入ってから、脚本がなければ何にもできないんですよ。だから、三田さんがこうやって脚本を大事になさっていたことを今日改めて確認して、自分たちはいい時代に教育を受けたんだなと。しかも今は、その脚本を国立国会図書館で預かっている。ぜひ残っている脚本を読んでいただきたいと思っています。



嶋田親一氏

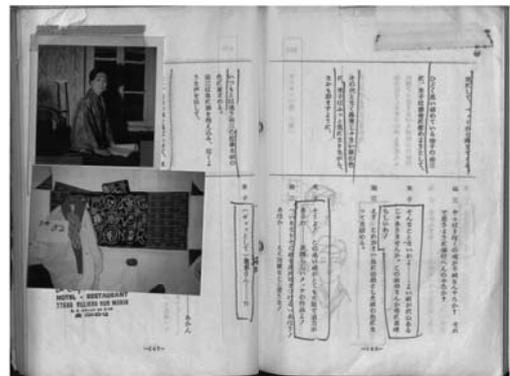
岡室 新国劇を創立した俳優の澤田正二郎は、早稲田大学で坪内逍遙に学んだ弟子なんです。そういったところからも、新国劇には言葉を大事にする伝統があったのかなと思いました。では三田さん、いかがですか。

三田 やっぱり私も「脚本ありき」なんですよ。このことは、私が脚本をずっと保存していたことから信じていただけたと思いますが、私は「脚本なくしてどんな作品も存在しない」と思っています。その脚本から自分が想像して一人の人物を作り上げる、これが面白くて、だから役者を辞められない。私はそういう思いで、これからも自分の命ある限り、脚本を大事にしていきたいと思っています。

岡室 脚本に残る三田さんの写真や書き込みを見ると、脚本は単なる言葉の記録ではなく、役者さんの身体の記録でもあるという気がします。

三田 この脚本は「^{ぼろ}襦と宝石」（1980年放送）ですね。これは早世した天才画家

の佐伯祐三さんと、その妻の米子さんを描いた物語です。少しでも本物の米子さんに近づきたいという気持ちがあったので、衣装の写真とか、いろんな資料を切ったり貼ったり絵を描いたりしました。



岡室 その意味で、この脚本は三田さん個人の記録というよりも、「三田さんという文化の記録」と言えますね。

中村 僕のようなディレクターやプロデューサーの経験者は、完成した番組から逆算して最初の設計図とか下敷きになるのが脚本だ、と考えがちです。脚本は駅伝のファーストランナーのような立場で、最終的にはディレクターや俳優さんなど、いろいろな人の力が結集して番組が完成する。先程話に出たような、脚本家とスタッフの間でトラ

ブルが起きていた頃は、最終ランナーのディレクターがファーストランナーの脚本家の作品を赤鉛筆でバサバサ切ったりしていたわけで、それぞれの役割をはき違えるようなつまらないことがきっかけになって、ああいったトラブルが起きていたんだと思います。

今後、将来の人々のために脚本をどうやって残していくかについては、いろいろ考え方がありますが、僕が一つ望むのは、脚本の情報を文学史として整理してほしいということです。以前は山田さんや倉本さんのような脚本家の作品は、「シナリオ集」として普通の本屋さんにも並んでいたんですが、最近はそういったものはほとんど見かけません。ですから脚本アーカイブズでは、脚本家ごとに情報をきちっとまとめて、検索できるようにしてほしいと思います。そしてその時代の脚本家が、テレビやラジオでどういう仕事をしてきたか、作風がどういう風に変化していったか、脚本を通じて何をやろうとしてきたのかも整理して、すべて検索できるようにしてほしい。「文学としてのシナリオ」を、もう一度しっかりと学べるようなアーカイブズになればと思います。

岡室 山田さん、今「文学としてのシナリオ」というお話も出ましたが、そのあたりはどのようにお考えになりますか。

山田 ドラマ作りには大勢の人が関わっているので脚本だけを大事にしたいということは思わないんですが、ただ、1980年代以前のテレビドラマについては、大半の映像がすでに失われているので、せめて脚本は残そうというのが、この脚本アーカイブズの大きな趣旨になっています。

岡室 初期の頃のテレビ作品は、映像が残っていないものがたいへん多いですね。そういう作品の内容は脚本から推し量るしかないわけで、その意味でも脚本は非常に貴重なものだと思います。現在、1980年以前の脚本に関しては国立国会図書館で、それ以降のものに関しては川崎市民ミュージアムに保存されています。また早稲田大学演劇博物館にも年代に関らず数多くの脚本が収蔵されて

います。ちなみに映像が残っている作品の価値については、どのようにお考えになりますか。

山田 映像には映像ならではの価値はあるでしょうね。脚本だけではわからない演出や演技を見られるわけですから、それはとても豊かな経験になると思います。脚本アーカイブズでも、将来的には脚本と映像を一緒に残していくのが一番いいと思います。

岡室 では次に、保存した脚本の活用についてご意見を伺いたいと思います。現時点ではとにかく脚本を保存して、後世に残すことが一番大事だと思いますが、保存の先にはやはり「どう活用するか」が問われます。脚本資料の現物とそれをデジタル化したものを、それぞれどのように活用していったらいいか、何か知恵があればお伺いしたいと思います。

嶋田 僕は一般の方もさることながら、やっぱり今ドラマを作っている若い俳優さんや演出家たちにこそ、脚本アーカイブズを積極的に活用してほしいと思います。彼らにはもっと過去の脚本を読んでほしいし、他の芝居や作品を見てほしい。若い人たちと話をしてみると、昔の脚本を読んだり映像を見たりして本当に勉強している人と、そうでない人と、真っ二つに分かれるんです。若い人でも、昔のことを非常に勉強している方はたくさんいます。だから僕は、より若い世代に期待したいと思うんです。

山田 僕自身はほとんどの脚本をオリジナルでやってきましたけれども、それでも一つの話を書こうと思ったときは、それに似たテーマの小説を探して読んだり、映画を見たりします。それによって、やっぱりずいぶんインスパイアされるところがあるんです。過去には豊かな資産があるんですから、それを踏み台にすれば、「今」はもっと良くなるはずですよ。でも最近は「過去のものもう終わったものだ」という感じで、現在と未来だけで生きてるような風潮がある。それはとてももったいないことです。過去から継承してい

る部分も大事にする。そのほうが今よりずっと豊かな作品が作れると思います。

あと、テレビ作品についてはもう少し、見たい人がどこでも上映できるようにならないものかと思っています。現状では、一般の人が仲間を集めて過去作品を上映できるような権利処理の仕組みがないんですよ。その結果、過去のテレビ作品を見てもらえる機会がなくなっている。今後はそういった部分の対応も含めて、過去の作品を大事にしてほしいと思います。

岡室 今お話が出た著作権の問題に関しては、この後、第2部のほうでお話があると思います。ただ、今山田さんがおっしゃったことは非常に重要だと思いますので、今日会場にいらっしゃっているテレビ関係の方は、ぜひ映像の公開に向けてご協力をいただけたらと思います。過去のテレビ番組を気軽に見られるようになれば、それがいかに素晴らしいかということも伝わり、社会の中で脚本への関心も高まっていくのではないかと思います。そのあたりについて中村さん、いかがですか。

中村 そうですね、僕は番組自身への考え方が変わってきているのではないかと気になっています。最近ではテレビ番組の中で「個人」をフィーチャーする機会がまったくなくなってきた気がするんですね。テレビ番組は、脚本家とさまざまな専門能力を持ったスタッフ、俳優さんたちが力を合わせて完成するものですが、最近では脚本家やディレクター、プロデューサーなどスタッフの個人名は、新聞のラテ欄（ラジオテレビ欄）にも番組案内にもなかなか載りません。将来にわたり「集団で作るテレビやラジオの番組には、個人の専門性の集積がある」という視点を持って、テレビ番組全体を捉えてほしいと思います。

岡室 確かにラテ欄は昔のほうが情報量が多かった気がしますね。1974年放送の「私という他人」というドラマを見て「三田さんってすごい！」と思っていたら、ラテ欄のテレビ評で同じことが書かれていて、嬉しかったのを覚えています。昔はそういったテレビを取り巻く「豊かさ」のような

ものがありましたよね。

三田 ありましたね。たとえば私は「有森冴子」で外科医、「いのち」で内科医の役をやりましたが、この2本のドラマを通して、私自身が本物の医者のように思われちゃったところがあります（笑）。あの当時は女性が医師に、それも外科医なんて「憧れの仕事ではあるけどなかなかない」というのが現実でした。でも、私があこの2本のドラマで女医を演じたことで「女性が医者を目指す」という社会現象が起こったんです。やっぱりテレビは、なんだかんだいってもすごく影響力が大きいものです。だからこそ、私たちもテレビの良さを改めて伝えていきたいと思います。テレビも放送開始から60年も経ってるんですから、日本の大切な歴史として、今の人にきちんと伝えていきたい。昔もこんなすごい番組を作ってたんだ！ ってことが知られば、一般の方も「なるほど、もう一度しっかりテレビというものを考え直していこうよ」って思ってくれるんじゃないかと思っています。



司会 岡室美奈子氏

岡室 確かに、あの2本のドラマを見ていた人はみんな「女医の三田さん」という記憶を持っていたわけで、その三田さんが最近「ドクターX」という医療ドラマに出られて、その記憶をまたみんなが共有できているというのも、テレビの素晴らしいところだと思います。……というところで、お時間がやってまいりました。登壇者の皆さま、本日は貴重なお話を本当にありがとうございました。

第2部 パネルディスカッション

『文化資源を活かすための デジタルアーカイブとは？ ～脚本アーカイブズを中心に』

パネリスト

高野明彦（国立情報学研究所教授）
福井健策（弁護士、日本大学芸術学部客員教授）
大場利康（国立国会図書館
電子情報部電子情報企画課長）

司会

吉見俊哉（東京大学大学院情報学環 教授）

吉見 第2部では、アーカイブの法律や技術に関するお話をしていきたいと思えます。壇上には、知的財産権に関して日本の第一人者の弁護士・日本大学芸術部客員教授の福井健策さん、デジタルアーカイブのIT技術分野で最先端の仕事をされている国立情報学研究所教授の高野明彦さん、国立国会図書館のアーカイブ化事業で中心的な役割を果たされている電子情報部企画課長の大場利康さんにおいでいただきました。それぞれ法律・技術・図書館に関するお話を伺ったうえで、会場の方とも意見交換しながら、「文化資源を活かすためのデジタルアーカイブ」について考えていきたいと思えます。

最初に各先生方からご自身の活動テーマについてのお話をいただきます。まずは高野先生にお伺いしたいのですが、高野先生は最近、藤本義一さんのアーカイブを手がけられているそうですね。

高野 藤本義一さんのアーカイブについては、まだ本格的に取り組むところまでにはっていないので、まずは私たちが現在提供しているサービスの紹介をしながら、その中で「藤本義一さんの仕事はどのようなふうに見えるか」を説明していきたいと思えます。アーカイブ活動のテーマは「知識の蔵を繋ぐ方法」、すなわち「知識を発想力に換える情報技術」を作り出すことです。具体的にいえば、検索を行う際に「検索キーワードと字面が一致する情報」だけを表示するのではなく、キー

ワードと何らかのつながりがある情報も表示することで、先人たちの仕事を自然に思い出せるような仕組みを作りたいと思っています。その一つが「Webcat Plus」という本の検索サービスです。Webcat Plusでは、大学図書館総合目録データベースや国立国会図書館のデータベース、全国850店の古本屋在庫情報を集めた「日本の古本屋」、著作権切れの文学作品がテキストデータで収められている青空文庫、Web百科事典のウィキペディアなど、本にまつわる情報が“面白い形”で溜められている場所を横断して、その本の関連情報をまとめて提供しています。サイト内では「本」という切り口だけでなく、「作品」や「人物」といった切り口からも情報を整理統合しているので、ユーザーは知りたい情報を集約的に見ることができます。

さらに「想 IMAGINE」というサービスでは、Webcat Plusに加えて、新書マップ（新書・選書のテーマ別書棚検索サイト）、JIMBOU（神保町の古書店街の在庫が分かるサイト）、文化遺産オンライン（博物館・美術館の情報サイト）といった情報サイトもまとめて一つに束ね、それらに蓄えられた情報を相互に関連づけながら、横断的に検索できる仕組みを提供しています。このように「別々のデータベースから関連情報を集約できるサービスを構築すること」が、我々の活動の目標です。



高野明彦氏

そのWebcat Plusで「藤本義一」さんのお名前をクリックすると、ウィキペディアに記載された

プロフィールの一部が表示されるほか、大学図書館、国立国会図書館、日本の古本屋など外部サイトへのリンクもあり、それぞれのサイトで藤本さんに関する詳細情報を得ることができます。藤本さんの「作品」の中から「鬼の詩/生きいそぎの記」をクリックしてみると、作品のページに飛んで、この作品が過去3冊の出版物に収録されたことがわかります。そのうちの1冊をクリックすると、その本についての情報が表示され、本に収録された作品の一覧や、各図書館でその本につけている管理番号も確認できます。そしてその番号をクリックすると、「その図書館ではどの棚に収まっているか」まで把握できます。これが「Webcat Plusから見た藤本義一ビュー」です。

次に、我々がNHKの放送文化研究所（以下、文研）と共同で作っている「放送文化アーカイブ」というシステムを紹介します。これは「我々が持っているさまざまな技術をすべて、文研が所有するリソースに適用したらどうなるか」にトライした結果生まれたもので、文研内にあるNHKに関する各種データベースのほか、Webcat Plus、新書マップ、ウィキペディアなどのデータベースとも連動しており、探したい情報を横断的に検索することができます。検索方法も「まとめて探す／年表から／番組から／資料庫から」など、いろいろな切り口があります。

たとえば「まとめて探す」で「藤本義一」を検索すると、各データベースから藤本さんと何かしら関係のある資料が表示されます。その中から面白いと思ったものにチェックを入れておけば、その内容をフィードバックし、項目内に出てくる他の言葉を使って、検索の対象を広げていくことができます。こういった「近いもの探し」が、僕らの研究テーマである「連想検索」です。通常の検索のように「キーワードと字面のs一致する情報」が表示されるのとはちょっと違って、「どういつながりがあるのかよくわからないけれど、“近い”と判断された情報」が得られるので、利用した方には「面白い」と言ってもらっています。

僕らがこういった連想検索の仕組み作りに取り組んでいるのは、「情報に文脈（コンテキスト）を与えたい」と考えているからです。たとえば

Googleで検索する場合、特定のキーワードを入力すると、そのキーワードが含まれる検索のパターンが人気順で複数表示されるので、みんな同じ検索結果に流れ着いてしまいがちです。何かクリエイティブなことをやりたいとき、あなたはそれで本当に満足できるのか、と問われれば、それは違いますよね。だから僕らは「自分の個人的な経験が生かされた形で、情報がナビゲートされる世界を作りたい」と考えて、こういった活動をしているのです。

さらにこの連想検索の仕組みを、日常的な読書環境で活用できるようにしたのが「Book Search & View」というシステムです。これで「藤本義一」を検索してみると、8冊の本が藤本さんに言及していることがわかります。そのうちの1冊「大阪弁『ほんまもん』講座」で藤本さんの名前が出てくるページに飛ぶと、ページの両脇には藤本さんだけでなく、そこに登場する他の人物やキーワードに関する情報も、ずらっと並んで表示されます。こういった読書環境は「情報に自分だけの文脈を発見する場」であるといえます。

これから僕たちは脚本をアーカイブしていくわけですが、第1部でお話があった脚本の書き込みのような個人的な経験の蓄積をどうやって記録し、活用までつなげていくのかを考えるとアーカイブの構築は非常に難しいと思います。そういった問題を考えるのが今後の僕らの課題だと思っています。

吉見 高野先生、ありがとうございます。では次に、国立国会図書館電子情報部企画課長の大場さんから、国立国会図書館が現在取り組んでいる文化資料のアーカイブ化について、お話をいただきたいと思います。

大場 私からは、国立国会図書館が現在デジタル分野でどういう取り組みを行っているか、具体的な内容をお話ししたいと思います。

まず一つ目の取り組みは「国立国会図書館の所蔵資料のデジタル化」です。これは2000年度から始まったもので、初期の段階では年間およそ2～4万冊の所蔵資料について著作権処理を行い、イ

ンターネットで公開してきました。現在は約250万点弱の所蔵資料がデジタルデータで公開されています。そのうち著作権が切れているものや文化庁長官の裁定を受けたもの、著作権者から許諾を得たものなど50万点弱は、インターネット上で公開しています（アクセス数568万件/月）。また、2012年の著作権法改正により、図書館向けのデジタル化資料送信サービスが可能になってからは、絶版等で入手困難になった資料など約138万点を、公共・大学図書館等439館に送信しています（アクセス数1万件/月）。こういった利活用をさらに促進するための取り組みとして、国立国会図書館では2014年5月から、著作権保護期間が満了した資料の転載（復刻・翻刻・掲載・放映又は展示等）にかかる手続を不要にしました。また2014年8月からは、図書館送信および国立国会図書館内限定公開となっている対象資料のうち、著作権保護期間が残っているものについて、申請者側で権利処理がなされていれば、復刻・翻刻を目的とした利用に限り、画像データの試行提供が行えるようにしました。といっても後者はやはり権利処理が難しいためか、まだ十分には活用されていません。



大場利康氏

二つ目の取り組みは、「国内でデジタル情報として発信された資料の収集」です。これには、国内の公的機関（政府や地方公共団体）のサイトを中心に、ウェブサイト上に公開された情報を収集する「インターネット資料収集保存事業（WARP）」と、インターネット上で無償公開

されていてコピーガードがかかっていない資料を、紙の納本制度と同様に納品していただく「オンライン資料収集制度（eデポ）」があります。後者は残念ながらまだまだ普及していませんので、今後もっと認知を高めていきたいと思います。カテゴリとして図書、雑誌、古典籍、博士論文、歴史的音源などがあり、ここに脚本も入ってきた、ということになります。

三つ目の取り組みは「デジタルアーカイブの連携」です。「国立国会図書館サーチ」というサービスでは、国立国会図書館だけでなく、図書館や博物館、美術館、公文書館、民間企業など他機関が保有する紙やデジタル媒体等の約100データベースから、約1億のメタデータを横断的に検索できます。また「国立国会図書館東日本大震災アーカイブ（ひなぎく）」では、地震・津波災害、原子力災害に関するあらゆる記録を検索・活用でき、今年2月の時点で連携機関31、連携データベース36、検索対象メタデータ数約278万件となっています。

今後もこういった活動は進めていく予定ですが、各種アーカイブのさらなる充実のためには、国立国会図書館所蔵資料のデジタル化を継続するとともに、当館以外の図書館や博物館・美術館におけるデジタル化も促進し、連携を強めていく必要があると考えています。また利活用の面では、出版社等による復刻・翻刻・電子書籍出版などの二次利用を促進するため、著作権処理等に関する各種課題を解決するなどして、利活用しやすい仕組みを整える必要があります。加えて利用者や研究者がアーカイブを利用しやすくするため、検索ができるよう、資料の内容を画像ではなく、テキスト化していくことも重要だと考えています。こういった活動の中で脚本をどう扱うべきかについても、今後ぜひ議論を進めていければと思います。

吉見 大場さん、ありがとうございました。著作権処理はアーカイブに限らず、今の現代日本社会、ひいては世界全体が抱える、非常に大きな問題といえます。この点について、福井先生に脚本も含めた文化的資源をきちんと継承し活用していくための法律の仕組みはどうあるべきか、それに対して現状は

どうなっているのかを、お伺いできればと思います。



福井健策氏

福井 デジタルアーカイブを巡る法的な議論は、この数年間、非常な高まりを見せています。最近も文化庁をはじめ、内閣知的財産戦略本部、文化資源戦略会議など、さまざまところでアーカイブをさらに活性化させるための制度が提案されています。

とはいえ、現状では著作権の問題はまだ多く、あらゆるアーカイブ活動はみな大きな壁にぶつかっています。アーカイブにおいては、よく「人手不足と予算不足の壁がある」と言われますが、それに加えて権利の壁も、非常に大きく立ちはだかっているわけです。たとえば映像作品であれば、音楽はJASRACで管理するケースが多いのでまだいいとして、それ以外の脚本家や出演者など、著作権および著作隣接権を持つ関係者については、その一人ひとりをすべて探し出し、利用の許可を得なくてはなりません。過去の作品になればなるほど、容易に連絡が取れない権利者が増えていきます。「権利者を見つけ出し、連絡をとって許可をもらうこと」、これが著作権処理を行ううえでもっとも大変なところなのです。

その中でも特に頭の痛い問題が、俗に「孤児作品（オーファンワークス）」と言われるものです。孤児作品とは、どれだけ探しても最終的に権利者が見つからない作品のことです。こういった孤児作品は日本だけでなく、世界中でも重大な問題となっています。なぜなら、著作者が見つからなければ利用の許可が取れず、そういう権利者が一人

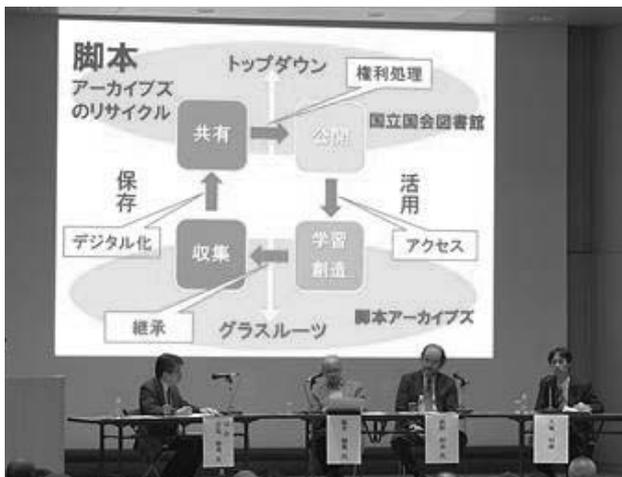
でもいればその作品は理論上、デジタル化も公開もできないことになるからです。加えて、映像作品なら画面に映り込んでいる一般人に対する肖像権の問題があるし、フィルムならそのフィルムの所有者が誰なのかという所有権の問題もある。こういった問題に対してどのような対策を取るべきかは、日本に限らず、欧米でも大きな問題となっています。

それに加えて最近ではもう一つ、「TPP（環太平洋経済連携協定）」という大きな壁も出てきました。TPPには著作権をはじめとする知的財産に関する情報が大量に含まれており、簡単にいうとアメリカが「著作権をアメリカ型にしろ」と各国に求めているのですが、これが今最大の難航分野になっているのです。その内容は膨大で全部は紹介できませんが、特に重要なものを2つだけ説明したいと思います。

まず一つ目は「非親告罪化」です。著作権侵害には刑事罰が科されますが、現在は親告罪なので、被害者が告訴しない限り起訴や処罰はされません。「ちょっとした著作権侵害」は、日常生活の中でいくらでもあるわけで、例えばWebページを印刷することも複製ですが、権利者も「まあいいだろう」と黙認しているわけです。ところがこれが非親告罪化すると、権利者が特に問題視しないようなデジタル化やウェブでの紹介も、理論上は、国が起訴・処罰できるようになります。その結果、アーカイブのような文化活動にもかなり萎縮が出るのではないかと懸念されています。

もう一つの重大な問題は、著作権の保護期間の延長です。これは、著作権の保護期間を現状の50年から70年に延長するというものです。放送番組は比較的最近の作品が多く直接の影響は少ないかもしれませんが、原作にできる作品が減るといった影響はあるでしょう。いずれにしても現在、TPPによって著作権の規定が変わり、アーカイブ活動にとって困難な方向に話が進んでしまうことが心配されています。その中で日本はどうすべきかといえば、私は「我が国は我が国の実情に応じた、あるべき著作権ルールを模索していくべき」と思います。国同士の対立が大きい著作権法の非親告罪化や著作権保護期間の延長といった

知財項目は、TPPから除外したほうがいいのかも
しれません。そのうえで、孤児著作物対策を含む
アーカイブ法制を、国内できちんと整備するこ
とが必要です。今後は孤児作品や絶版作品などの問
題を早急に解決し、まずは非営利のものからデジ
タル化を積極的に進められるよう、著作権の改正
を一刻も早く実現すべきだと思います。



吉見 福井先生、ありがとうございます。では、
ここまでのお三方のお話をふまえて、ディス
カッションに移りたいと思います。

そもそもアーカイブの議論には、2つの軸があ
ると思います。一つは「保存」と「活用」のつな
ぎ方、もう一つは「グラスルーツ（草の根）」と
「トップダウン」のつなぎ方です。現在、脚本
アーカイブズは脚本家、俳優、演出家など、いろ
いろな方々のグラスルーツ的なネットワークを通
じて収集されています。しかし「草の根から収集
したものを国内外で共有し、学校や創造の現場で
活用する」というサイクルを構築することを考え
ると、先ほど福井先生がお話しされたような、孤
児著作物を含めた権利処理の問題が出てきます。

また、デジタル化を進める上では、個別の組織
と国立国会図書館のような大組織がどうやって協
力していくのか、という問題もあります。そこで
まずは、権利処理の問題と、小さな組織と大きな
組織をどうつなぐかという問題、それからアーカ
イブの具体的な活用法という問題について、この
場で考えていければと思います。

最初に、福井先生が先ほど指摘された孤児著作

物をはじめとする著作権の問題について、大場さ
んや高野先生からレスポンスをいただければと思
いますが、いかがですか。

大場 著作権の権利処理の問題は、国立国会図書
館でもずっと苦労し続けている部分です。まず、
紙の本として発行された著作物については、明治
期の刊行図書から始めて、大正→昭和前期と順番
に、その本にどういう著作権者が絡んでいるの
か、調査することから始めました。生きているの
か亡くなっているのか、亡くなったならそれはいつ頃か、遺族の方はいらっしゃるのか。そういった調査を現在も延々と続けておりますが、見つからない方が多いです。そこで、現在は文化庁長官の裁定制度（ある程度調べても著作権者がわからない場合は、文化庁長官から「こういった目的なら使用してもよい」と許諾をもらえる仕組み）を利用して、インターネットでの公開を続けています。この裁定制度を作る中でも、文化庁との間で「調査の要件をどうするか」「どこまで調べれば“十分調べた”といえるのか」「後から権利者が出てきたらどうやってお金を払うのか（代償金制度）」など、いろいろな部分で調整に苦労してきました。現在はこの制度も改善されて、かつてに比べればだいぶ使いやすくなっているので、今後も権利処理に関しては文化庁と話し合いながら進めていくというのが、国立国会図書館のスタンスだと考えています。

吉見 ありがとうございます。続いて高野先生、
権利処理の問題を技術面から見たとき、何かブレ
イクスルーのようなものはあるのでしょうか。

高野 僕の中では「これはアメリカだったらフェアユースかな」というのが、一応のガイドラインになっています。日本のコンテンツが著作権侵害を恐れて新しい活動を行わず、コンテンツ活用の可能性が試されないまま消えてしまったり、コンテンツの電子化が遅れて商業的な魅力が失われ、海外からの投資が行われなくなったりしたら、それは国としてもまずいだろうと思うので、僕はギリギリのところまで活動していこうと思っています。

そもそもアーカイブというジャンルで何か新しいことをやろうとすると、「100%真っ白」な状態では、たいしたことはできないわけです。ある程度濃いグレーというぐらいのところで、「今やるべきことはやっておこう」と覚悟を決めて「これは僕らの文化にとって非常に重要なんだ」ということを、周囲にはっきりとわかる形で示していく。そういった活動を続けていけば、いずれは法律が変わったり、新しい例外規定ができたり、新しい国立国会図書館の中の事業が立ち上がったりして、グレーだった活動が公然とできるようになる、そんな展開を期待しています。

吉見 「アメリカだったらフェアユース」というご発言について福井先生、いかがですか。

福井 まさにそこがポイントだと思います。アメリカの著作権法が非親告罪で、保護期間が長くても社会が回っている理由の一つは、アメリカには「フェアユース」という大きな例外規定があるからです。著作権法の中に「権利者に悪影響がない、公正な利用だったらやってよい」という、短めの条文が入ってるんですね。「公正な利用ならやってよい」と定めた規定は、新規のビジネスや軽微な利用と、すごく相性がいいんですよ。アメリカでインターネットの新ビジネスが開いた原動力も、フェアユースだと言われています。それに対して、日本はまったく真逆です。まず、現行の著作権法はフェアユースのような規定を持っていません。それを入れたところで、日本人にはおそらくすぐには使いこなせないだろうと思います。なぜなら、フェアユースはいざ裁判になったとき「この利用はフェアユースだ、公正なものだ」と言い切って、相手と戦う覚悟がある者にとっての規定だからです。アメリカでは自己責任、事後司法救済型とよく言われますが、その覚悟がないと、フェアユースなんて怖くてやっぱり使えないですよ。日本では「そんな規定より、お上でガイドライン作ってください」って話になる。日本の良さとは、まさに高野先生が仰ったグレー領域の使い方とか、「これ以上やったら怒られるかな、でもこのくらいなら大丈夫かな」と判断する阿吽

の間合いです。そんな考え方ともっとも相性が悪いのが、非親告罪です。権利者が「まあいいか」と思って見て見ぬ振りをしているときに、第三者が通報したら、国は捜査や刑事処分をせざるを得ないかもしれない。ですから、この部分については新しいルールも作りつつ、志ある者は多少のリスクは承知でがんばりつつ、TPPであまり日本にあわない知財のルールは入れないという、いくつもの課題の解決に向けて取り組まなければならないと思います。

吉見 ありがとうございます。よく「アメリカでは新規ビジネスや新たなクリエイティビティ、ベンチャー企業など新しいものがどんどん出てくるのに、日本はなんで出てこないんだ」と言われますが、その背景にはフェアユースがあるということですね。

福井 でも、日本はフェアユースがなくてもコミケ（コミックマーケット）を生み出しましたよね。理論上は非合法のようでもやり過ぎでなければ許され、現に大規模に開催できているわけですよ。実際は日本も、新しいものをちゃんと生み出しているんです。



司会 吉見俊哉氏

吉見 そもそもクリエイティビティや新たな創造性というものは、ゼロからは決して生まれませんよね。過去の作品が誰でもタダで、しかもかなり自由に使えるという余地が社会の中にないと、社会そのものの可能性を殺してしまう側面があるよ

うに思います。脚本はまさにそういった「余地」を作ることによって、さまざまな活用や利用ができ、新しいものを生み出すのにぴったりのフィールドだと思うんです。こういった脚本の利用に関して、先生方のご意見をお聞かせいただけますか。

大場 既存の脚本は、脚本家の皆さんが新たな作品を作るための素材にもなるし、役者や演出家が新たな映像作品や舞台作品を作る、いわゆるリメイクの素材にもなる。その意味で非常に可能性が高い作品であり、今後、そういった二次創作的な利用につながるような枠組みが作れるのであれば、よりいっそう活用の幅が広がるのではないかと思います。

高野 私は三田さんの脚本の書き込みと、それについて物語る三田さんの様子を見ていて、脚本における「書き込み」の価値を実感しました。脚本アーカイブズでは三田さんの脚本だけを集めて終わりにするのではなく、同じ作品で別の方の書き込みがある脚本も集めてはどうかと思います。将来的に書き込みのある脚本が複数たまっていったら、それらを見比べられるようになったら、よりいっそう深みのある、脚本ならではのアーカイブズになるのではないのでしょうか。

吉見 私が脚本アーカイブズのプロジェクトに参加する中で気づいたのは、「脚本そのものの内容も、最初と最後では変わるんだ」ということです。演出が進んでいく段階で脚本もどんどん変わるので、収録前に書かれた台本と、最終的な放送台本は違うものになります。これは放送の台本だけでなく、映画や演劇の台本も含めていえることかと思いますが、この点については福井先生、いかがですか。

福井 脚本の価値については「作品」という視点のほかにも、さまざまな側面があると思います。たとえば映像の二次利用を進める場合、映像さえ残っていれば二次利用できるかといえそうではなくて、映像の情報が記載された周辺資料がどうしても必要になります。そのとき脚本がちゃんと

残っていれば、テレビドラマにしても映画にしても、DVD化やその他の二次利用が進めやすいんです。過去作品のリメイクにしても、脚本が残っていてこそ可能になるものです。

脚本にはもう一つ、「読むためのツール」という側面もあります。著作権法には「38条の例外」という規定があって、「非営利で入場料をとらない場合は、権利処理をせずに朗読などで活用できる」と定められています。ですから、学校教育などさまざまな場で「脚本を読む」というプロジェクトが広がっていくと面白いと思います。内容がテキストデータ化されれば、音声読み上げが可能になるので、視覚障害のある方でも聞くことができ、作品にまた新たな価値が生まれます。より多くの方に読んでいただくためにも、電子書籍を出版される方々には、脚本を電子書籍として読むためのツールやリーダーのようなものも、どんどん開発していただきたいと思います。

吉見 ではこのテーマについて、第1部に登壇された先生方にもご意見を伺えればと思います。まず山田先生、いかがですか。

山田 権利の問題は本当に複雑で、どこかでみんなが目をつぶらないと実現しないということですね。ただ、権利を主張することで誰かが儲かるのならまだしも、特に儲からないのに権利を大事にしなければならぬというのは、ちょっと細かすぎる気がします。

嶋田 著作権に関していえば、演出家は著作権料がもらえるわけではないので何の権利もありませんが、できれば一般の視聴者の方にも演出家や脚本家の仕事を理解してもらえるような方法を、もう少し考えてもらえればと思います。

岡室 テレビ番組に関しては、映像と脚本に新聞の番組評などのさまざまな資料も紐付けて、ひとまとめにアーカイブ化して保存していくのが、望ましいと思いますが、そこで大きな壁となるのが「映像の収集」だと思います。映像のデジタル化はNHKをはじめ、いろいろなところで進められ

ていますが、いったんデジタル化すればそれで永久保存できるわけでもなく、保存メディアが新しい媒体に変わるたび、永遠にメディア変換をやり続けなければなりません。そうなると、著作権処理ができない作品の中には積み残され、保存しきれないものもどんどん出てくると思うんです。そういった積み残しが発生しないうちに、ちゃんと権利処理を行って、映像が公開される仕組みを作っていくことが重要なのではないのでしょうか。そのためには、今ご登壇の先生方にご尽力いただくとともに、国を挙げてきちんと対策をとってもらわないと、本当に手遅れになってしまうと思います。

吉見 ありがとうございます。では、今度は会場の方々からご意見をいただきたいと思います。特に活用の面に関しては、いろんなご意見があるのではないかと思います。いかがでしょうか。

発言者1(女性) 一つ目はフェアユースについてです。たとえば海外の学会で研究発表をする場合、フェアユースが認められていないと論文に記載できるエビデンスの数が減り、海外の研究者に負けるんじゃないかという危惧があります。二つ目は、写真のアーカイブについてです。たとえば東京のランドスケープなどの写真を国立国会図書館のデジタルアーカイブに入れて、誰でも簡単にアクセスできるようなシステムを作ることはできないのでしょうか。

発言者2(男性) 私は個人で映像のデータベースを作成し、インターネットで公開していますが、最近の脚本の公開状況で気になることがあります。NHKのテレビドラマの脚本は、「貸与」という形にしている、表に出ないようにしているので、最近の作品の脚本を見るには、NHK放送博物館の資料室に出向く必要がありました。ところが昨年の大河ドラマからは、「台本に個人情報が含まれているので、一般人には公開しない」という形を取り始めて、私たちが見ることはできなくなっています。こういった脚本は今後ずっと見られないのでしょうか、それともいずれは公開される

ようになるのでしょうか。

発言者3(女性) 映画会社で資料を管理している者です。私が一番悩んでいるのは、新作の素材の保存についてです。新作の場合、素材は台本も含めて最初から全部デジタルで作られていて、データでやりとりされています。デジタルデータになってからはどこにも「モノ」がありません。作る側に「自分たちの作品をずっと残していく」という意識がゼロで、社内でも断絶を感じています。特に1980年代以降の作品に関しては、そのように感じる人が多いので、先生方には作り手側の保存モチベーションを上げるための、何かわかりやすいスローガンのような言葉をアドバイスいただけませんか。

発言者4(男性) 今の若者たちがアーカイブに接するためのインターフェースとして、国立国会図書館以外にも現実的な施設が作れないものではないでしょうか。たとえば繁華街に「国立アーカイブ映像館」みたいな施設を建てて、500円とか1000円とかの入場料で気軽に入れるようにするとか。アーカイブは税金を使って行われる事業ですから、限られた知識層だけが足を運ぶ国立国会図書館のような場所だけでなく、より多くの国民が気軽に接触できるインターフェースを、Web以外にももっと作ってほしいと思います。

吉見 会場からのご意見、ありがとうございます。それでは各先生方から、今のご意見に対するお答えと併せて、最後のメのお言葉をいただきたいと思います。

大場 まず、写真など東京の風景を記録するというお話ですが、現在も国立国会図書館では古い写真帖のデジタル化を行っていて、そういったものは今後できるだけ広く共有化したいと考えています。ただ、個人や写真家の方が撮り溜めた膨大な写真のアーカイブの共有は、国立国会図書館だけでは対応しきれないと思うので、写真の専門家の方々にも協力いただき、分担しながら作業を進める必要があるかと思っています。

次に、デジタル情報の保存の問題についてですが、EUやアメリカなど政府がお金を出して取り組んでいる国に比べると、日本はまだ遅れている状況です。国立国会図書館としても、この課題について積極的に発信していきますので、皆さんも声を上げていただき、共に「デジタル情報の保存が必要だ」という流れを作っていければと思います。

それと「アーカイブの重要性を会社にわかってもらうために、何かキャッチコピー的な言葉が欲しい」というお話についてですが、やっぱりアーカイブは「次の世代の飯の種」だと思うんですね。脚本のアーカイブは、「次の世代が新たな作品を作っていくためのベースとなるもの」だと思うので、将来的に会社が長続きするためには作品をアーカイブして「次の世代の飯の種」を残さなければならない。そのことを、ぜひ現場の方々にも考えていただければと思います。

福井 「個人情報の問題で脚本が閲覧できなくなった」というお話ですが、これについては個人情報保護法という法律がありまして、5000件以上のパーソナルデータを管理している事業者は、容易にこれを公開することができないという法律上の縛りがあります。現在、個人情報保護法の改正をにらんで政府で議論が進んでいますので、そこにアーカイブなど一定の非営利・学術的な利用を妨げないような、何らかの規定が入っていくことが望ましいと思います。

それから「研究論文はエビデンスの出し合いなので、著作権の問題でエビデンスが減ったら困る」というお話、これは広い意味での国際競争の問題だと思います。最近では総務省でも「アーカイブは知のインフラである」と言うようになり、アーカイブが日本の競争力を高め、豊かな社会を形作るための重要なインフラであるということが認知されるようになってきました。著作権制度のような情報ルールもまた、知のインフラの一つです。今後はより優れたルールの構築についても、皆さんと一緒に考えていければと思います。

高野 映画会社の方からデジタルデータの保存に

ついでのご意見がありましたが、最終プロダクトが電子形態である場合「本当に使える状態」で保存する手当を考えるとしたら、国立国会図書館にダークアーカイブとして保存しておくことですね。ダークアーカイブとは、図書館側が勝手に公開することはできず、所有者が頼んだらいつでもデータを引き出せるような仕組みです。実際、アメリカには「インターネットアーカイブ」という民間団体があって、1996年のプロジェクト立ち上げ以来、さまざまなWebサイトのデータを自主的に集めて保存し続けています。日本でもそういったプロジェクトを参考にしながら、国家として保存すべきデジタル情報をきちんと保存しておく仕組みを考えていく必要があるでしょう。

また「デジタルアーカイブを身近に感じられる場所を作るべき」というご意見ですが、僕らは、その取り組みの一つとして、2013年に新御茶ノ水の駅前に「お茶ナビ」という町のガイドスペースを作りました。ここではお茶の水界隈の町情報を集めて訪れた人に提供するなど、アーカイブを実際に利用するための取り組みを行っています。情報を発信する場でありながら、訪れた人たちから昔のお茶ノ水界隈の話が聞けたり写真が提供されたりすることもあり、情報収集の場にもなっています。国では「日本文化館」みたいなものを全世界に配置して、日本文化を発信していくような計画も考えているようですが、そこを訪れた人から日本の思い出や資料を収集するような仕組みを用意してはどうでしょうか。全世界から集まった日本に関する情報を国立国会図書館に保存していけば、非常にバランスの取れた「日本という国のイメージ」が得られるのではないかと思います。

吉見 最後に、私からも一言申し上げたいと思います。私自身は文化のサステナビリティ（持続可能性）とクリエイティビティ、この両者は集合知と記録知のコラボといますか、両方に足を置いているとどちらも実現は不可能だと考えています。集合知にはGoogleやウィキペディアなどいろいろありますが、それだけでは非常に薄っぺらな存在で、情報はどんどん流れて行ってしまいます。一方で20世紀の近代日本には、テレビ番組にして

も脚本にしても映画にしても、相当の文化的な蓄積（記録知）があるわけです。単体では薄っぺらな集合知に厚みを持たせるには、それらの記録知、つまりアーカイブとの連携が必要です。その接続が切れてしまったら、集合値は深く価値のあるものにはならず、後の時代に残っていくこともできません。

そしてもう一つ申し上げたいのは、今後は日本が一丸となって「ナショナルアーカイブ構想」を実現していくべきだということです。「ナショナルアーカイブ構想」については、2012年に総務省が「知のデジタルアーカイブ」を提言し、2014年には内閣府知財本部が「タスクフォース」報告書を出し、その後に文化庁有識者が「ナショナルアーカイブ」案を出していますし、国会の中でもアーカイブに関する議連がいくつかできました。ただ、現時点では全部がバラバラで、互いに連携していないんですね。この先、脚本を含むアーカイブを未来の資源として生かすことを本気で考えるなら、国立国会図書館が中心となってリーダーシップを握り、トップダウンでこれらの団体や活動をつなぎ、全体をまとめていかないと、なかなか前には進めません。今日は国立国会図書館の大滝則忠館長も会場にいらしていますので、館長、ここで簡単に一言いただけますか？

大滝 国立国会図書館としても、ナショナルアーカイブをはじめとした全国的な取り組みに中心に関わっていくことは、たいへん重要であると考えています。たとえば東日本大震災アーカイブ「ひなぎく」は、国全体として大震災のあらゆる記録を残すという目的のもと、さまざまな関係機関が連携しながら運営されていますが、その中で国立国会図書館はポータルサイトを提供し、全国から集められたデジタルデータをお預かりするという、基本的な役割を担っています。今後は脚本の分野、またナショナルアーカイブの分野においても、当館が同様に関わっていくことができれば、国立国会図書館の役割として、たいへん重要な意味を果たさせていただけるのではないかと考えております。

吉見 ありがとうございます。国立国会図書館は全国の公共図書館や大学図書館にデジタルデータを配信していますし、立法府の中にある組織として国会ともつながりがあるなど、他のアーカイブ団体とは異なった、ある種特別な役割を持っている組織だと思います。今後ナショナルアーカイブ構想を一つにまとめていくうえでも、国立国会図書館はとても大きな役割を持っていると思いますし、脚本アーカイブズの将来にとっても、国立国会図書館との連携はとても大切だと認識しています。

参加者の皆さまも、今日のシンポジウムで見聞されたことをぜひそれぞれの現場に持ち帰っていただき、問題意識をさらに高めながら、回りの方々にも広めていただければと思います。本日は長時間ご静聴いただき、誠にありがとうございました。

Ⅶ まとめ

1. 今年度の総括として

脚本アーカイブズの活動が「新たなステップ」に入ったということは、多岐にわたる課題への取組みがより難度の高い、先の見えにくい段階に入ったということでもある。

もとより、今まで全く存在しなかった大きな「体制」作りに関係者が結集して立ち向かっているのがこのコンソーシアムの役割だとすれば、試行錯誤しながらも少しずついろいろな足場を固め、その上に工夫を積み重ねていくことでしか、全体の大きな前進は生まれないのかもしれない。ここでは、事業3年目の地道な活動成果として、後々大きな意味をもつようにも見える要素に関し触れておきたい。

① 放送脚本の「アーカイブ拠点」存在の意義

国立国会図書館で1980年までの脚本・資料約2万7千点が昨年から公開開始されたことに続き、27年度はそれ以降の脚本、約1万8千点が川崎市市民ミュージアムで公開される予定である。アーカイブの推進事業において、これまで何年もの間「どこに保存し、どう公開されるのか」の見通しが立っていなかった状態からすると、「アーカイブの拠点」が“場”として稼働し始めたことは、画期的な進歩であることをあらためて強調しておきたい。デジタルアーカイブへ移行していく前段階では、現物を保存管理し活用窓口となる「拠点」の存在・あり方が、今後の事業の方向性検討の前提になっていく。

② 脚本データベースは進化し続けてきた

このコンソーシアム活動では、日本放送作家協会で作成した入力データを整理し、現物と再度突合せを行い、新規寄贈入力と併せ、脚本・台本5万点を管理している。整理された書誌データをWeb上で「脚本データベース」として閲覧・検索が可能な状態にしている。そして昨年度・今年度と、検索データベースとしての機能等を改善し、分散して公的機関に寄贈・移管された脚本の現在の所在先が検索できる形になっている。このように脚本アーカイブズの在り方が「分散型のアーカイブ」であるため、「脚本データベース」が脚本における書誌データ管理の入力基準として重要な役割を果たす。今後、公共図書館をはじめ、博物館、文学館、資料館に眠る脚本をたどり、所蔵先を検索する「統合検索システム」構築が検討されつつある。その構築のため、入力基準策定において、本データベースは重要な参考材料である。

③ 脚本の活用試行が生みだすもの

脚本活用の試みとして、昨年度より様々な「教育活用」のワークショップを実施している。対象は中学生から高校・大学生そして教師まで、方法は映像上映を含む場合や脚本の実作も行うケース等、いろいろな形でトライしてきた。ここから見えてきたのは、脚本を媒介にすることにより参加者の創造力は「事前の想定を超える」ということである。参加者の反応を見ると、どう脚本を活用するかを検討が様々に広がってくるということである。試行錯誤ではあるが実際的な取組みを繰り返す中から、思わぬ将来性をもった方向を見出していくと実感している。脚本と少し離れるが、小学生を対象として、1分間のストーリーを創り、タブレットPCで映像表現するセミナーも実施した。この登場人物のキャラクター作りと絵コンテは、脚本作りの基礎である。脚本アーカイブズが扱う「箱書き」や「企画書」等の周辺資料や、監督の「絵コンテ入り台本」がこれにあたる。様々な年齢の「脚本活用」から、多くの可能性が伺えた。

2. 今後に向けて

これまでの脚本アーカイブ活動で、現物脚本を集め整理し保存先に入れ込むイメージはつかめてきている。今後のアーカイブ設計の中で一番不透明なのは、現物脚本のデジタル化をどこまでどう行い、それがどう展開するのかという点である。予算規模が先にありきなのか、それとも「どのような形で行い、どれだけの量をデジタル化するのか、デジタル資料をどのように利用可能にするのか」という分量と実施・活用方法を検討したうえで、計画し予算化するのか、といった根本の判断のようなことが必要になってくる。

その判断の材料のために、今後デジタル化に関する試行策にも取組み、様々な試行検証を十分に検討しながら推進していくことで、現実的なかつより有効なアーカイブの道が見えてくると信じている。

今年度の国立国会図書館との共同研究の中で、脚本35冊の全文がデジタル化され、「国立国会図書館デジタルコレクション」の中に搭載され、館内公開（うち2冊はインターネット公開）された。35冊という小さな一歩であるが、憲政資料や古典籍と並んで搭載されることは、驚くべき大きな進展であることは間違いない。この一歩がさらなる発展につながるようために、関係の機関・組織、関係の皆さまのご指導とご協力を、今後とも切に願っております。

文化関係資料のアーカイブ構築に関する調査研究

～放送脚本・台本のアーカイブ構築に向けて～

平成27(2015)年3月31日発行

発行 一般社団法人 日本脚本アーカイブズ推進コンソーシアム
〒102-0081 東京都千代田区四番町4-9 東越伯鷹ビル5階 日本放送作家協会内
Tel : 03-5210-7029 Fax : 03-5210-7021

印刷 (株)三交社
表紙デザイン (株)DEN